

(R15) 古龍の私が惚れられました♪♪

紅龍騎神

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

クシャルダオラに転生してしまったオツサンが、女性ハンターに見初められてしまったお話。彼の人生が変わっていく……、いや、転生した時点で変わってるか。そんな物語です……。

# 目次

♪♪♪プロローグ♪♪♪	1
良いことありそう?♪♪♪	7
いつの間に有名人に……?	13
孤島にて……①	19
孤島にて……②	25
和の国に向かいます。	33
和の国に着きました。	39
和の国にて。	46
百竜夜行を企む者!?達……	57
♪♪決戦!百竜夜行……	65
これで決着!?百竜夜行……	82
♪はい!?彼女が増えた!?	89
執念深き竜……	95
残された物達!?は……	105
番外編♪♪珍仲間!?に出会いました。	112
あの……これって解決ですか!?	121
古龍と神々と……	132
いや、長いですね道のり……	141
新大陸で出会った同じ境遇の物……①	149
番外編♪♪②くカリスマ美容師猫さんの憂鬱く	156
新大陸で出会った同じ境遇の物……②	167
新大陸で出会った同じ境遇の物……③	175
セリエナで療養す……	182
会話が出来た!!	189

冰れる龍との遭遇……。

冰れる龍との遭遇……。②

忌まわしき古（いにしえ）の記憶……。

おなじ転生者の彼女……。

—————

—————

—————

—————

♪♪♪プロローグ♪♪♪

ん〜ん〜。眩しいな、朝かあ。じゃあそろそろ起きますか。今日は日曜だし、仕事休みだし。

あ、と、と。ごめんなさい。私は『皇 雅人』《すめらぎ まさと》〃30才後半のおっさんです。モンスターハンターに遅咲きデビューですっかりハマった男です。

暇さえあればモンハンをやっています。はたから見れば大丈夫!的に見られてもおかしくないぐらいにハマっています。昨日の夜からも、早速やり始めて朝方まで。流石に少しは睡眠をとらないと、指捌きに支障が出ては面白くない。と、仮眠をとる事にしたのです。で、爆睡だった訳ですが、さあて起きようか……。おもむろに身を起こすと、何か物凄い違和感が……。

な、なんだこれ。首が気持ち伸びた?ん!?さっきから四つん這いになってない?

って、はああ!何でしょう、この立派な羽は……?あゝあ、尻尾まであるし。しかも、今いるこの場所も、自分がいた世界じゃないのが良く分かります。何故ならついさっきまで、狩りをしていたフィールドだから……。

いや、羽根や体軀を見る限りシルバーで固い甲殻を持ち、竜巻を起こせるなんて、かの古龍、クシャルダオラ、なんですけど!顔は水面か鏡でも見ない限り分かりませんが、私の知る限り、クシャルダオラかと。

あら、良く見たらここは雪山の山頂で、しかも脱皮した後ですか!道理で全身が艶があつて、スツキリ感があると思つた。まあ、この脱皮したところにフルフルベビーが住み着いて育つんだらうね。手がつけられない赤ちゃんだ。

と、取り合えず羽根を動かして……、おお!動かせるぞ!ほう!こいう風にかかすとホバリングできるのか。おお、見晴らしが良い。龍の種によつてはこんな空を拝めるんだな。絶景だ!

さて、今度は降りてみよう。ああ、なるほど。こうやって降

りてこればいいのか。脱皮した地点に降りて来ました。うくん、優雅に降りられる。私にはない貫禄と言うものだろうか。ん？下を通りすぎて行くのはハンター達……。隣のエリアまで行こうと向かっていますね。大型モンスターが居そうなのは何となくですが感じがあります。これが気配なのか？

しかし、私がここに居ると言うのに気づかれないのも少し寂しい……。かと言って戦いたいわけでもないのでやり過ぎたほうがよさそうと思う私……。ハンターの熟練度によって、倒される確率が高くなるのは目に見えてるし……。

私もゲーム上ではそうでしたし。逆にモンスター側になるとこう思っているのかな？と考える私が居ました。

んん!?男性ハンター3人は隣のエリアに行ってしまったが、女性ハンターが1人後を追うように走っていきます。でも、途中で身体を震わせている……。ホットドリンク飲んでないな。1本位分けてあげる気はないのかね？ほんとに仲間ですか？いくらハンターと言っても女性1人置いてきぼりか……。うくん、ちよと薄情……。

こら、フルフルベビー、お前さんホットドリンクぐらい持ってないのか？……。持ってないわな。ごめん、聞いた私が馬鹿だった。

うくん、何かないものか……。つて！どこから出たの、ホットドリンク！しかも3つ！大盤振る舞いでしょ！じゃ、遠慮なく渡してきますか。しかし、私を見て慌てて逃げてしまいましたが？かといって他に手がありません。彼女の近くに投げてやるわけにもいかないですし。なので直接手渡し？いや、口渡しするしかないかと。

ま、なるようになれです。じゃ、行きましようか。

私は3つの瓶をくわえて、ホバリングして降りて行きます。慌てたのは、やはり彼女の方で、まさかクシャルダオラが居たなど想定外でしょう。逃げる事も出来ずに震えています。セルレギオスの素材の装備で銀髪のロングヘアで、綺麗な顔立ちのナイスバディ♪可愛いじゃないですか。上位のハンターと見受けませんが、どうしてこんな待遇なのか気になりますね。

私は取り合えず、彼女の目の前に降り立ちました。彼女はただ震えていて、こちらを見たまま動く事が出来ないようです。

ゆっくりと顔を彼女に近付けます。

「ひっ！」

彼女は小さな悲鳴を上げていました。私は余程か？しようがないな。ま、渡してすぐに移動するのでしょうか。私は口を開き、3つの瓶を地面に落とします。勿論割れない高さで。

すると、3つの瓶が何なのか分かったようで、驚いていました。

よし、渡す物は渡したし、おいとましますかね。私は身を翻し、ホバリングしようと羽根を広げました。すると後ろから声が。

「あ、ありがとう……………」

信じられないのと嬉しいのと入り交じった感情の返事をしてきました。私も尻尾の先をピコピコと左右に小さく振って返事をする、更に驚いています。その彼女を尻目に私は飛び立ちました。一気に良い高さまで上昇し、飛翔を開始します。さて、雪山から何処に行こうか……………。

そんな私をずっと見つめている彼女の姿がありました。ホットドリンクの瓶を抱えながら……………。

\*

\*\*\*\*\*

いやあ、良い眺めだね。今日は晴れているせいか、フィールドも良く見える。あ、あれ監視船ですね。望遠鏡のレンズがこっちを向いていると言うことは、気付いてますね。

まあ、通り過ぎましようか。敵対視されてもかなわないし。さて今度は、どのフィールドに降りようか……………。飛翔しながら横を通り過ぎざまに、前脚で小さくバイバイすると監視船の中は大騒ぎでした。こちら側から見ると結構面白いな…………。私は別のフィールドに向かって飛び去りました。ギルドや龍暦院でも話題になるでしょ

うね。

さて、何処に向かおうか……。火山は嫌かな。相性の悪いテオ・テスカトルが居たりしてもめんどくさそうだし。かと言ってどのフィールドもモンスターが居そうなのは目に見えてるし……。まあ、どこか落ち着ける場所を探さないとな……。おお！そうか、遺群嶺つて手があったな。でもバルファルクが居るかなあ？でも、泊めてもらえるかな？元々私も体軀はゴツゴツしているし、柔らかい場所じゃなくても寝れるし。

よし、そうしよう！遺群嶺へレッツゴー……。遺群嶺の場所どこ??超高層の山なのは分かりますが、一体どこに？一旦ホバリング状態でそこに止まり、周りを遠くまで見渡します。

あ、もしかしてあれか？ずっと南の方……。と言っても方角があつてるかどうか……。その方向を目を凝らして見るとありました。雲が途中にかかっていますが、間違いなく。

しかし、ここからどれだけあるの？こんなに長距離を見ることが出来るなんて千里眼の薬要らないね。あ、飲んでも意味ないか。

よし、向かいましょうか。私は翼を羽ばたかせ、一直線に飛翔していきました。遺群嶺の頂上を目指して……。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

集会所では私の知らぬところで大騒ぎ。監視船から、クシヤルダオラが現れてしかも手を振って行った！などと連絡があるものだから、龍暦院もギルドも大騒ぎ。ギルドナイトとも戦ったりしたことがあるはずのクシヤルダオラ……。私が転生しているなど誰にも分かるはずがなく。しかも、脱皮した後ですよ。元気いっぱいです。

しかし、あの女性ハンターが私と出くわしたという情報は流れてなかったようで。私にも分かりませんが？

なぜ、彼女がそれを伏せているのか、心までは読めません。



「しかし、雪山で出くわさなかったのが幸いだったな。」

「おう、乱入されてたらと思うとゾツとするぜ。」

「しかし、アイツも運がいいな。俺らより大分遅れて来たくせに出くわさなかったとはな。」

あんたら、レディをほっぽって先のエリアに行ってたでしようが！あれは余りに可哀そうだよ。あんたらに先に出会ってたら、間違いなく吹き飛ばしてたね、断言します！

でも、彼女がなぜ会った事を伏せていたのか……。後々に私も理解する事に……。

で、特別クエストが出たようなのです。私が特殊個体とされてしかも、捕獲するというクエストが……。

ま、それは後で知った事なのですが。

おおー！やっと着きましたよ。頂上に。あら、お邪魔していいかを確認しようと思っていたら、肝心のバルファルクが居ない。でも、休憩しているうちに戻って来るかな？端っここで休ませてもらいましよう。なかなか長距離飛行はそれなりに疲れるのね。バルファルクにとってはどうなんだろ？あの音速で飛行する龍は別格だね。

今度は、飛翔加減を考えながら飛ぶことにしよう。少しは体の使い勝手が分かって来たぞ。と言ってもまだまだ未知の使い方があるんだろうけど。

私は、少しそこに寝る事に。まさか、また彼女に出会うことになるうとは……。

ん!?なんだ？私の尻尾を触る者がいる。いや、バルファルクなら咆哮で私を叩き起こすでしょう。では一体誰が……。身体を動かさずに片目をすこーし開けて、尻尾の方を見てみると、1人の女性ハンターの後ろ姿が。

いつの間に……。しかも1人？尻尾をさするだけで、攻撃してこない。んん!?その姿はもしかしてこないだの？あれほど怖がっていたのに、今日はどうされました？他のハンターと一緒にじゃないのですか？

はて？頭だけを起こしてみましようか……。

私はゆっくりと頭を起こして彼女を見下ろしました。

「きゃっーぐ、ぐめんなさい！起こしちゃった？」

え、こちらが言葉を理解していると思ってる？今の喋り方は、それを想定してる喋りだよね？まあ、尻尾でバイバイすればそうなのかも思うよね。お嬢さん偉い♪

でも何しにここへ1人で来たのかが分かりません。危険を冒してまで、ここに来る意味が分かりません。

どうということなのか……。

私が色々考えながら彼女を見つめていると、照れながらこんな事を言ってきたのです！

「私、あなたが好きになっちゃいました♪ダメですか……？」

は、はい!?!今なんとおっしゃいましたか？あ、あの…わたし仮にも古龍なんですけど！分かってます!?!しかも今回でまだ2度目ですよ、お会いしたの！ホットドリンクあげただけで、惚れられるってどゆこと？天変地異の前触れか!?

い、いや、ダメじゃないですけど！私は顔を左右に小さく振って、彼女を見ると、照れながら、につこり微笑む彼女が……。か、可愛い♪なんでこういう時なの！モテ期が！せめて人の時にして欲しかった……。ガクッ。

私は、そんな事を恨めしく思いつつ、彼女を改めて見つめていました……。

これが、始まりです。どうなるかは、私も彼女も分かりません。でも、一緒ならば……。と思う私達でありました……。

良いことありそう?♪♪♪

あ、元の世界では皇 雅人こと、クシヤルダオラです。寝ているうちに転生させられ気づいた時には、古龍の姿に。しかも、ホットドリンク3本で、女性ハンターに惚れられる………………。何でしょう、このシチュエーション。モテ期が古龍になってからってどゆことですか!そりゃ、私より古龍の方が格好いいでしょうよ。だからって……………切ない……………。

一体彼女は、どっちを好きになったのでしょうか。皇雅人か、クシヤルダオラか?

う〜くん。考えても埒があかない。ま、どのみち途中で私に飽きてしまうでしょう。こんな美人に好かれた事なんてまずありえないし、奇跡に近いし、モテたことなどなかった私です。取り合えずは今を楽しもうと思います。

彼女は銀髪のロングヘアでセルレギオスの装備をしている上位のハンターなのですが、彼女の心のどこをくすぐったのか、女性から告白される……………♪こんな栄誉なことがありますか?!

私は、初めてでどきどきしています♪心臓が飛び出しそうで。あ、クシヤルダオラの心臓って大ききどのくらいなんだろう?素朴な疑問ですね。誰か知っていたら教えてくださいね♪

でね、私が浮かれ過ぎて肝心なお名前を聞けてないんです……………。と言つて、どうやって聞いたら良いのか分からない……………。恐らく喋るにしても龍語になるから彼女には分からないだろうし。どうしたものか……………。あ、文字で!いい、いやしかし、こっちの世界の文字は全く分かりません。こまった……………。何とかお話出来る手段はないものか……………。

と、ボーつとしながら地面を爪でガリガリ。試しにこちらのひらがなというモノを書いてみる事に……………。

んんんっ!!私には見たことのない文字が書かれて行きます。なんで??でも、それを見た彼女の方が目を見開いて口を塞ぐように驚いています。私より遙かに驚いてる……………。

(初めましてかな?あなたのお名前を教えてくださいませんか?)  
文字の形は分かりませんが、彼女は分かるようなのでこちらの知っている文字でそのまま書いてみました。

すると、彼女がむち打ちにならないでね。と思うぐらいにこちらを振り向き、両手で口を押えながら涙をぽろぽろと流しています。

わ、私何か悪い事言いましたかね?

でも、顔を見ると逆に嬉しそうな表情です。良かった、嫌われた訳ではないですね。

「やっぱり、言葉が通じるんですね♪」

やっぱり……。という事は言葉を理解していると感じていたんですね。確証が欲しかっただけですか……。

私は黙って頷くと彼女は更に嬉しそうでした。笑顔がまた可愛いですよ。だんだん引き込まれてます?

「ミラルダと言います。そ……その……。 お付き合いしてくれませんか?」

ミ、ミラルダさんね……。 ホントに私の事を好きになったのですね。ホットドリンク3本で!?どんな、なれそめでしょう。

(私でいいんですか?その……。古龍ですけど?)

と、彼女には申し訳ないが再確認の為に聞き直します。

「はい♪龍であつても構いません、この気持ちには嘘はつきたくないの……。」

な、なるほど。人や古龍という立場を越えていると言うわけですか。私だつてこんな綺麗で可愛い彼女がいたらどれ程癒されることでしょうか。断る理由が無くなりました。お付き合いしたい……。

(いいお名前ですね。こちらこそ、お付き合いしてもらえますか?)

地面に書いた文字を見て、彼女の顔が明るく喜びの顔に変わりました。眩しくて、スゴく素敵だ。やはり私も、彼女に引き込まれているかな?たぶん。

「嬉しい、ありがとう♪」

ズキューーン!ハートの貫通弾で撃ち抜かれました。い、

いかん。抱き締めたい……。

へ、なあああ！か、か、か、彼女の方が私の顔にハグしてきました！おお！む、む、胸の感触があ！ド、ド、ドキドキする！緊張しっぱなしです！おっさんにして初めての体験！か、固まってしまつて逆に動けない。でも、彼女が暖かく心地好い……。転生されて良かったと言うべきか……。でなければこんなあまーい！出来事など起きなかったでしょう。勿論、龍暦院やギルドには内緒の話……。バレればお互いにどうなるか、非常に悲しい現実を突きつけられるでしょう。彼女の悲しむ顔は見たくないですからね。素敵な笑顔をありがとう♪

その時、高い金属音が上空から飛び込んで来ました！物凄い風圧と爆音が響きます。一緒にルドロスが1頭、地面に転げました。前足でルドロスを押さえつけます。

「え、ま、まさか？」

はい、そのまさかです。私と同じ様なシルバーな体躯で、翼爪等に穴があり、そこから炎を射出します。そのパワーであの音速を出せるスピードになるんですね。恐れ入ります。しかも、あの泳ぎが上手いルドロスを捕まえて来るって、神業でしょ！とんでもない古龍ですね、バルファルク。

（お前たちここで何をしている！）

その、バルファルクが問い掛けて来ました。

（済まなかった。少し休憩させてもらっていた。直ぐにおいとまするよ。）

（貴様、何故ハンターと一緒にいる？）

確かにね。普通はそう言う反応ですよ。

（彼女は、私に惚れたそうさ。だから、一緒に過ごそうと思っっている。）

言ってる自分が照れるじゃないですか。なんつう事を言わせるんでしょこの龍は。

（馬鹿な？人間となど無理に決まっている！直ぐに裏切られるぞ！それが分からないのか！）

そうかも知れませんが。そう思う事ももつともです。でもやっぱり、彼女に惹かれているんですよ。分かります、この気持ち。って分かるわけないか。あなたも彼女が出来たら分かります。何せ私ですら初めてこんな気持ちを体験させてくれてるんですから。(ならば去るが良い。お前たちがどうなろうと俺の知るところではない。)

確かに。彼の言う事ももつともです。ここは、彼女を連れて離れるとしましょうか。私は地面に再度文字を書きました。

(移動します。背中に乗ってください。足元に気を付けて。)

と右肩を降ろし、彼女の乗りやすいような体制になりました。彼女がその都度驚いています。

「い、いいの?」

私は頷くと翼でそつと彼女の背中を後押し……。すると照れつつも私の背中によじ登りました。私の首の付け根あたりで私にしがみつきます。私に掴まったのを確認すると身体を起こし、翼を広げ、ホバリングで上昇していきます。

「わ、わあ! 凄い! 綺麗!」

西日差し込むような巨大な太陽が、私と彼女を照らしていました。私も最初はあなたと同じに感動しましたよ。

「グアー!」

私は行くよと龍語で声をかけました。彼女も分かったのか、「はい!」

と返事を返してきました。そこから彼女、ミラルダとの旅が始まったのです……。果報者ですね私……。

ハッキリ言って、いや言わなくても嬉しい! 何か楽しい予感がします。その下から大丈夫か? と心配そうに見つめるバルファルクの姿がありました。

さてさて、何処に行こうか……。また別の場所を探さないとならなくなつたし。と言って今度は彼女と一緒に。相変わらず火山系は苦手だし……。ってテオが居るからなんだけれども。喧嘩をするつもりは無いんですけどね。向こうの出方次第と言ったところでしよう

か。後々嫌でも行く事になったら話し合いで、仲直り? してみたと思います。

う〜ん、どこ行こう? 極圏? 霊峰? 禁足地? 砂漠? 竜ノ墓場? ……ん!? 竜ノ墓場ってあのイカちゃん? ……いや、オストガロアの居るところですね。私が彼女を手伝って、オストガロアを討伐しちゃうとか?

そんなのありですか? いや、クエスト受注しないと駄目ですか…。 そうしないと討伐してもクリアにはなりませんね。かと言って、どのフィールドもモンスターとハンターは居る訳で。さて、困ったどっちに進路をとろうか? なやみますね。

「孤島に行きませんか?」

彼女が気を使って提案してくれました。確かにまだフィールド的には、ゲームをしていた時に行っているのですが、そんなに違和感はありません。なるほど、孤島ですか…。 それなりに出現するモンスターは色々居ますが。

なるようになれ、ですね。行ってみましょうか、モンスターに出会うのか。はたまたハンターに行くわすのか…。 こればかりは時の運。行ってみなければ始まらない。行きましょう! 私は領いて飛翔しようと思いました。

……………で、孤島はどっち?? ごめんさい、意外と私方向音痴!? 上空に上がったらどこを向いて飛んだらいいのか分かってません。彼女に…。 分かるかな? 龍語…。 とホバリングで顔を右に左に見回していたら、  
「こっちの方向です!」

彼女が指を指してくれました。優しい…。 私は早速領いて、指さす方向へと飛翔を始めました。しばらく行くと、お馴染みの調査船が…。 あの調査船のお陰で助かっているギルドやハンター、龍暦院の研究者たちが居る。

不思議なものです。こちら側からすると後々脅威になりかねないというのに、私としては攻撃する気になれない。むしろこちらから手を振って、船内で大騒ぎしているのを見ている方が楽しい。別に調査

船が直接攻撃してくるわけではないので、横を通り過ぎる事にしました。勿論！あの大きな望遠鏡のレンズが私たちを追ってます。

私は前足を振ってバイバイすると同時に、レンズに向かってウィンクしてあげました。それをレンズの奥から見えていたおじいさんがひっくり返ってます♪♪非常に愉快です。人側からすれば一体何なんだと思うでしょうね。

「クア♪、クア♪、クア♪」

私は笑っていました。ここに転生されてから初めてです。笑いがこぼれたのは……。ですが、元の世界が恋しいと言う訳ではありません。何故って、彼女が出来たんですよ！私にとっては彼女大事！別れるなんてあり得ない。それがたとえ古龍の姿であっても……。

「クスクス……。お茶目さんなんですね♪……。フフ……。」

バレてる……。私は顔を赤らめながら、とぼけて真っ直ぐ前を向いたまま、さりげなくその場を通り過ぎていました。

ふうっ、やはり彼女の笑顔は素敵です……………。



いつの間にも有名人に……？

どうも。こんにちは、元の世界では皇 雅人《すめらぎ

まさと》と言う名前でおっさんをしておりましたが、この度、クシャルダオラに転生いたしました。寝ているうちに気づいた時には、古龍の姿に変わっており、しかもクエストに来ていたハンターの内の一人にホットドリリンク3本をあげたところ、その女性ハンターに惚れられた……。あ、不思議。

彼女は銀髪のロングヘアでセルレギオスの装備をしている上位のハンターなのですが、余程、恋しかったんでしょう。ホットドリリンクで、気を惹いてしまった……。べ、別にそれでナンパしようとしてた訳ではないんですけど。彼女に一目惚れされた事だけは間違いない……。いなく……。

で、今遺群嶺を彼女と共に出発し、孤島に向かって飛翔中で、途中で調査船をからかいながら通り過ぎていました。彼女を背中に乗せるのも、なかなか良いものですね。私、意外と方向音痴の様に上空に上がると右も左も分かりません。彼女が居て助かります。しかし孤島に着くまで、まだまだ距離があります。なにかお腹が減ってきました……。と、ふと下の陸地の方を見るとアプトノスさんの群れがランポス達に追いかけてられます。うくん、そのアプトノスをランポスから横取りすることになるのかな？でも弱肉強食の自然界……。動画上ではリオレウスが横取りしてたけど、私も有りかな？美味しそうと思うのは古龍だから？それともこの世界の生物として？定かではありませんが。ま、いずれにしてもお腹が減ったことは紛れもない訳で……。

涎を垂らして下を見ているのが分かったのでしょうか、彼女にも気付かれたようで。

「生肉ゲットしていきませんか？」

私は即返事すると、ゆっくりと下降を始めます。彼女もしつかりと私につかまり、アプトノスとランポスの動向を見えています。確かに地上に降りたままでは良いですが、ランポス達に襲われても大変です。上

位ハンターのようなので、後れを取る事は無いでしょうが念を入れてかかるのが大事。一瞬の隙や油断が怪我の元……。私もゲームとして狩をしていた時は、それでどれほど切なくなつた事か……。さすがランポス達、集団での狩に長けている。親を狙うより弱い子供を狙う……。生物の世界の背くことの出来ない厳しい掟……。ならば私もそれに従い狩をするのでしょうか。ランポスが1頭ジャンプして子供のアプトノスに襲い掛かろうとした時です。私が上から前足を地面に振り下ろしたのは……。

「ギギャアア！」

そのままランポスを地面にめり込ませていました。ランポス達が、私を見てパニックになってます。彼女も私の背中から飛び降り、セルレギオスの太刀“シミターアルナジト”を振るってランポス達を倒していきます。私も子供のアプトノスを羽で庇いながらランポスを追い払っていました。

ランポスの集団が私たちに狩られ、ようやく子供のアプトノスを開放してあげます。すると、親のアプトノスも走って子供に近寄り、お互いに頬ずりしていました。

「クアアアア!!」

親のアプトノスがお礼を言うように一声上げて、親子はその場を去って行きました。後々、この親子にも助けられることになるんですが、今は私たちも知る由もなく見送っていました……。

彼女が早速、ランポスの生肉を採取していきます。4、5頭倒したので、それなりに生肉がゲット出来ました。

残りはしっかりと捕食しにくる鳥が居るので任せます。私は彼女を乗せて飛び立ちました。場所を少しく変えて、ゆっくりと食事が出る場所を選ぼうと思ったのです。デートの邪魔はされたくないですよね。

小高い丘の岩場に降り立ちました。見晴らしが良かったので、そこが良いだろうと決めた次第です。そこにしゃがみ、翼を休める事にしました。彼女ミラルダも降りて、早速生肉を焼き始めました。

私も香ばしい匂いに、涎が…………。

「上手に焼けました！」

ここにきてまで、そのセリフを聞けるとは…………。

「クスツ、欲しいの？」

コク、コク、コク、小刻みに頷くと彼女も笑いながら、私に差し出してくれました。

「あ〜んして♪」

きや〜〜〜！なんと言うシチュエーションでしょう！こ、こんな嬉しい事があつて良いのか？良いんですよね？ありがとうございます！私は、ゆっくりと口を開きます。すると、彼女は口の中に乗せるようにこんがり肉を入れてくれました。咀嚼すると、やはり美味しい。人の時の食感や味？の記憶が残っているからでしょう。でも、ランポスの肉は初めてですけどね。いわゆる焼き肉と言う記憶が定着しているので、生肉に馴れていないと言う事で。恐らく食べられるんでしょけど、チャレンジは追々頑張ってみます…………。

二人で仲良く肉を頬張り、食事が終わった後少し休憩していました。お互いに顔を寄せ合いながら、暫く景色を眺めていました。それにしても澄み渡る眺めです。こんな美人な彼女とラブラブで景色を眺めるなんて元の世界では奇跡に近い。なので、余韻を味わうかのようにその時間を味わっていました。

その時です。後ろの森の中から来訪者が来たのは…………。

（先客か？）

全身が体毛で覆われ、両腕の筋力が異常に発達していて、左右に伸びた角を持つ…………。ゲームの時は、下手をすると秒殺されると言う、手こずる相手…………。ラージヤンさんがいらっしやいました。

あら、するとここはラージヤンさんの休息場所ですか。それは、失礼しました。おいとましましては。

（すまない。あんたの休憩場所とは思わなかった。直ぐに失礼するよ。）

（ふん、構わん。だが何故ここにハンターと一緒にいる？）

そうですね、どのモンスターでもそう思いますよね。ごもつ

とも。

(彼女は私と一緒に行動している、大事な人だ。攻撃したりはしない。)

(そうか……。)

遠くを見つめたまま、たそがれていました。欠伸もしていませんが、随分と落ち着いてますね。怒り狂っている時とは大違い。

あら、ミラルダさんが利くく。果物ですか。それは喜ぶでしょう。ん、早速渡しましょうか？了解です。話してみます。

(すまない、私の連れが、果物をもらって欲しいと、用意してくれたのだが、もらって貰えるか?)

(ん、ほう。うまそうだな。良いのか?)

(うむ、休憩させてくれたお礼だそうだ。もらってやってはくれまいか?)

(そうか、ならば貰おう。よろしく言ってくれ。ではな。)

そう私に返事をして、果物を受け取ってまた移動していきました。私も地面に文字を書いて彼女に伝えると、嬉しそうに微笑んでいました。やはり彼女は笑顔が良い。

(そろそろ、行きましようか?)

私は、地面にそう文字を書くと、彼女も頷いてくれました。周りを片付け、彼女を背中に乗せてホバリングします。途中休憩だったので、方向は覚えていました。なのでその方角へと飛翔を始めます。

これはハンター達に直ぐに見つかるな……。と言う程に晴れ渡る空の中を、優雅に飛んでいく私……。人間側で大騒ぎになつているとも知らずに、孤島に向かって飛翔するのです……。\*

\*\*\*\*\*

変わって、こちらは集会所。何やら、超特殊クエスト？が出たらしく、そのクエストに対して、ハンター達が躍起になって大勢押し掛けていたようです。当然、私達は知りません。クエストの内容は至ってシンプル。私だけじゃなく、彼女も一緒に捕獲。と言うものでした。

危険な目に逢わせたくない、と思ってもその時は私達の知らぬ所なわけで……。

俺が、私だと次々に名乗りをあげてクエスト受注をしてソロや2人、3人、4人と組んでクエストをクリアしようと、士気が上がっていました。また、報奨金が高い！どんだけ有名人になっちゃったの？私達……。半分以上は目にゼニーの文字が浮かんでます。目的はそっちか……。当然と言えば当然ですか。色々と買い揃える物は沢山あるだろうし、食事代の事もある。物入りなのはみんな同じで……。でも、おかしくありません？報奨金3倍増し!?

どんだけ特殊ですか？龍暦院や、ギルドの人達の興味深々さが思い浮かびます。古龍と話が出来るかもしれない……。という、憶測が飛び交って余計に研究したいらしいようです。確かに転生した私……。会話しようと思えば出来ますけど。それ以前の記憶や、何処から来たのかなんて分かりませんからね。

「おい、アイツとクシャルダオラの捕獲だよ。」

「ああ。報酬がすげえな。」

「いつの間に古龍と仲良くなったんだ？」

「何でも、雪山でのクエストの後みたいだぜ。あの後俺たちから抜けただろ。」

「ほくう。その後すぐか？」

「らしいぜ。遺群嶺に行ってた他のハンターの奴らが見たってよ。」

「ふくん。こりや、一儲け出来そうだな。」

あらあら、彼女と組んでいたハンター達が何やら良からぬ事を考えているようで。彼女に何かあったらただじゃ済まないからね……。と相手には伝わらないので、気持ちだけは……。

「ほうー。会話が出来るかもしれないだどー！」

こちらはギルド本部。部下の報告を受けて、話しに食いついている人物が居ました。以前、私ではないクシャルダオラと対峙し、追い払った事のある凄腕のハンターで銀髪のロングヘアに2枚目の渋い顔、双剣ギルドナイトセイバーを愛用している、ギルド筆頭リーダーと呼ばれる彼も動き出そうとしていました。

「よし、数人一緒に来い！クエストとは別行動で動くぞ！」

我もと思うハンターが数人、頷いて準備を始めました。

「私も一緒に良い？」

クイーン装備で、レウス素材のボウガンを愛用する女性ハンターで筆頭ガンナーでもある彼女も興味があるようで一緒に同行すると言ってきました。

「うむ、当然だ。よろしく頼む。」

お互いに微笑み合って、出発準備を始めます。私達には勿論知る由もない事なのですが、なんか凄い事になってるようです。大変な人達に興味を持たれてしまった……。でも、私は彼女を守り一緒に過ごしたいだけ……。

と言っても、まずはなるようにしかありません。とりあえず落ち着く場所探し。そのために孤島へと向かう私達でありました……。

## 孤島にて……①

どうもです。転生前は皇 雅人《すめらぎ まさと》、転生後はクシャルダオラになった私です。そして、私の彼女……。上位の女性ハンターで、銀髪のロングヘアーにセルレギオスの素材を使った防具と太刀を愛用している、ミラルダと言います。しっかりしていて気の利いてくれる素敵な女性です。何度も言うようですが、“何故に”人間の時に知り合えなかったのか……。ぐすつ……。そこだけ名残惜しく。

私達は、ハンター達の動きを知る由もなく、孤島に向かって飛翔を続けていました。まずは落ち着ける場所があれば良いのですが。やつと見えてきました、孤島。このフィールドもいろんな大型モンスターが訪れる場所です。私もゲーム時はいろんなモンスターと対峙しました……。しかし、今度はモンスター側です。下手をすればハンターに狙われるんです。怖いし、めんどくさいですハッキリ言ってます……。彼女を守る為ならば命懸けで頑張りますけど、やたらと戦い続けると言うのは、性に合わない。なので、やむ負えない場合を除いて人とも関りをもつていこうかと思えます。勿論、モンスター達ともです……。ダメですか……？

モンスターに転生した今ならハンター側の、モンスター側のそれぞれの思いや、考え方がはつきりとは言いません。が、分かるような気がするので。まして私たちの様に人やモンスターを越えて互いを好きになる……。お互いを慕って、お互いに守りたいと思う……。私にとっては今が幸せ。遅咲きのオッサンですけどね。大事にしたい……。

ただ、人もモンスターもそれぞれ十人十色。意気投合できる人と出来ない人、意気投合できるモンスターと出来ないモンスター。いろんな出来事が待っている……。それを受け入れつつ、彼女と歩んでいけたらなと思います。

つて！くそ真面目にしんみりとした話をするなど……。失礼いたしました。おっさんになりますと、愚痴が多くていけませんね。現実

に戻りましょうか。

色々言いつつ、ちょうど孤島のエリア10へとやってきました。海辺、砂浜、岸壁……。なかなかいい場所なんですよ、ここ。

海も眺めてられるし……。と言っても、モンスターやハンターが来る場所でもあるので、のんびりと……と言う訳にはいかないでしょうけど。

でも、ルドロスが居る……。3頭も……。

うーん、近くにロアルドロスがいるかなあ、あの水分を含んだスポンジの様な部分をモフモフしてみたい気も……。

とりあえず、彼女を背中に乗せたまま地面に降り立ちます。さすがにクシャルダオラな私なので、ビビるんでしょうかね。ルドロス達がすごすごと逃げていきました。ハンターに対しては襲い掛かっていくのに律儀なものです。で、周りを見渡していると海の中を右に泳いでいってUターンして左に泳いで行って……。また逆戻り。あんなに泳ぎが得意なら、元の世界では金メダル取れそう？と言っても、モンスターは出場出来ないか。海水面から顔を出しているのは、サメのヒレではありません。トビウオのような背ビレが見えます。あの背ビレ……。覚えてますよ……。なかなか足を攻撃しないと、倒れてくれないし、当たりが悪く、しかも眠らされるわ、尻尾でひっぱたかれるわ、体当たりでド突かれるわで。動きに慣れないと、こちらもそれなりに手こずるお相手……。

あ、気付いた。それでも、海の中を行ったり来たりしているという事はあれで攻撃してきますね……。水鉄砲の超強化版……。ウォーターブレス！私も横っ飛びジャンプ!!海の中から上半身を起こし、地面を伝うように水のレーザーが横を過ぎていきました。あつぷなあ！ミラルダは……。良かった、背中にしがみついてくれてる。一安心。

……なんて奴だ。いきなり問答無用ですか。ならばこちらもそれ相応の対応をしましょうか。私はアギトの中に空気の渦を作り出し、それを凝縮させていきます。それをソフトボールほどの大きさまで圧縮し、更に3個ほど作りました。射出の準備をしたまま、相手が同



じ動作に出るのを待ちます。よしっ！きたっ！上半身を水面から出して起き上がり、ウォーターブレスを放ってきました！それを避けながら空気の弾丸を相手めがけて射出します!!まさに弾丸！3弾とも1発目は喉元に。2発目は顎を下から突き上げるように当たり、3発目は上に向いた顎にヒット!!

そのまま後ろにひっくり返って行きました。よしっ、作戦成功。ふふ、仰向けに気絶してる……。珍しい光景です。余程想定外の攻撃で面食らったのでしょうか。起き上がってきません。

「す、凄い……。素敵♪」

え、あ、いや、あの……。照れますね♪彼女が背中に更にきつくはぐしてきます。私は心の中で嬉し泣き。

さて、ガノトトスをどうしましょうかね。ん!?このエリアに何かが来る……。気配を感じます。岸壁の上のところで様子を見ましょうか。彼女も気付いたようで、頷いてくれました。私はすぐさまホバリングして上の岸壁に待機します。そうっと下を覗いていると、来ました、3人のハンターが。

「あ、あれって、前に一緒に組んでた……。」

こんなところに何故

ミラルダが組んでいたハンター達が？

「おい、あそこ見ろ。海の中でガノトトスがひっくり返ってるぞ。」

「あんな状態は見たことがねえ。」

「すると奴等はもう移動したって事か。」

3人して周りを見回しています。こちら側に移動してきたら厄介ですね。ん!?3人共海の中へと向かって行きます。あらま、そのままガノトトスを捕獲する気でしょうか？

これはいけませんね。私はすぐさま先の空気弾を2つ作ります。今度は大きさをソフトボールからピンポン玉程まで小さくし、その場からガノトトスの顔に目掛けて射出しました。見事2弾共にヒット！気絶していたガノトトスが目を覚ましました。

「ちいつ！目を覚ましやがったか！」

「まずいぞ、陸に上がるうー！」

「うわっ！ウォーターブレスだ！うがぁ！」

あらら、一人はウォーターブレスに飛ばされましたね。後の二人も陸地に戻るも、ガノトトスですよ相手は。陸にあがってくるのは当たり前で、あゝ……私も経験上、あの体当たりと、尻尾で叩かれるのはなかなかキツイ。見事、そのパターンにハマってます。自業自得とも言えますか……。欲を出さなきゃ良かったのにね。合掌。

「お、おい！一旦エリア9にさがるぞ！体制を立て直すんだ！」

「お、おう！」

「了解だ！」

おゝ、慌ててエリア9へと走って行きます。まあ、良い判断と言えるのかな。回復等々して、再挑戦するのもアリでしょうし。

ハンター達が隣のエリアへ移動した後、私達はガノトトスの行動に驚きました。なんと、上を見上げて私達の方を見たんです！明らかに私達の方を向いている……。、どういう事でしょうか？そして私達の方を向いたまま、右翼を広げて上にあげたのです！まるでサンキューと言われているみたい……。私も彼女もそれに吊られて私は左前足を、彼女も左腕を上げていました。すると、それを確認したのかクルツと身を翻し、海に潜り移動していきました。さっきの敵は今日の友とでも言うんでしょうか。でも、先のハンター達には悪いですが、ガノトトスを逃がす事が出来た……。あのまま捕獲されるのも癪です。まずはと言ったところで。

(あの3人大丈夫ですかね?)

と一応地面に文字を書く、彼女も肩を竦めていました。いざれにしても、この場所も落ち着ける場所では無さそうですね。良い場所なんですけどね。来客が多いのがたまに傷……。

(別のフィールドに行ってみましょうか?)

そう文字を書いてみると、彼女もそれには賛同してくれました。

で、そこからホバリングで上空へ。一体、どっちに向いて行ったらいいのやら。

「今度は密林に行ってみましょうか。」

おお！ナイスアイデアです！私も早速頷いて、向きを指示してもらい飛翔するのでした…。おっさんじゃなくても、方向音痴は辛い……。彼女が居てくれてホンとに助かります…。優しいし。一緒にいると安心します。大切な存在……。

移動中も、彼女と会話が弾みます。と言っても、彼女から質問してきて私が首を縦に振ったり、横に振ったりとイエス、ノー形式ですけどね。それでも新鮮で楽しい。これなら長距離でも飛べそうな気にさせられます。こりやおっさんハマりましたわ。私も好きになつたみたいです。

今更自覚か？と思われたらその通りです！

鈍感だな。と思われたら龍だけに。そこはどうか分かりませんが、おっさんだから今まで彼女が出来なかつたんだ。と言われても、当たっているだけに言い返す事が出来ません。

なので、余計に大事にしたいと思うのは、人一倍？じゃなかった龍一倍？と思う訳で……。

話しに華を咲かせていると見えて来ました密林さんが。

私達は少しずつ、下降しながら降りるエリアを探します。

エリアの3へ差し掛かった時です。大型モンスターとハンター数人が戦っています！上空から良く見ると、二足歩行で、翼はなく、前足は小さいものの、顎が発達し、体躯も筋肉質な目をギラつかせた、竜が1頭……。

あんまり関わりたくないモンスターでしょうか。私はゲーム上で瞬殺された最初の時はショックでしたし、スタミナもあって強い。このモンスターが出現しやすいのは、ゲーム上で把握してはいませんが、実際に目の当たりにするとリアル感が半端ないですね。確かに強面です。イビルジョーさん。相対しているハンターさん達が、気がかり……。ん!?どこかで見えたことが……。……。

はい!?あれってまさか……。……？

「筆頭リーダー！」

(筆頭リーダー！)

思わず同時に叫んでました。息ピツタリ！

そうなんです。筆頭リーダーと筆頭ガンナー、数人のハンター達が、イビルジョーさんと対峙していたのです。まずは両者を引き離さなければと、彼女と領きあい、イビルジョーに急接近！ホバリングしながら、通常の大きさの空気の圧縮弾ブレスをイビルジョーに向けて放ちます！至近距離のブレスにかわしきれずに横殴りに吹き飛ばすイビルジョー。

「なっ……………！」

「も、もしかして……………」

「エリア10への避難を！ここは私達が追い払います！」

「し、しかし……………」

「負傷者も居るようですし、ハンター達を連れて早く！」

「了解だ！皆、エリア10に避難するぞ！」

「さ、私につかまって。」

「すみません、姐さん。」

「それよりも、彼らの気持ちを無駄に出来ないわ、急いでここを離れましょう。」

「うむ。その通りだ！しかも、我々が目的のもの達の様だしな。」

「はっ、も、もしかして彼らが？」

「そのもしかしてだ。」

あ、あのう、早く移動してくれます？イビルジョーさん起きあがってますけど。この現状分かってますよね？お願いしますね？食い止めますから。

あ……………まずいわ。怒っちゃったよ、完全に。もうっ！短気なんだから、嫌われちゃうぞ♪……………完全に失礼しました。後はなるようになれです！私達はハンター達が避難するのを確認しつつ、目の前のイビルジョーと睨み合いとなるのでした……………。

つづく……………。

## 孤島にて……②

あ、こんにちは。クシャルダオラこと皇

雅人《すめ

らぎ まさと》です。転生したばかりで、嬉しい事に彼女が出来ました。ミラルダと言う上位の女性ハンターです。銀髪のロングヘアにセルレギオスの装備一式で、凄く綺麗。その彼女がホットドリंक3本で私は好かれてしまった。良いんでしょうか？良いんですか？ありがとうございます。何せ元の世界では、一切モテたことがなく、おっさんになってしまった私……。

今を楽しんでいる真っ最中です。私と彼女でゆっくり過ごせる場所を求めて、移動している訳ですが。なかなかその場所が見つからず、出会は色々ありますが、まだ落ち着ける場所はなく……。

そこで孤島に向かって行きましたが、珍客が多すぎていけない。でね、彼女の提案で密林に来てみたところ、エリア3のところ、筆頭リーダーさん達がイビルジョーさんと戦っているじゃあくりませんか！（古っ！おっさんだけに。）

で、今怒らせたジョーさんを目の前に、筆頭リーダー達を逃がして、なんとかしようと思いをかなりひねって、考えていました。するとミラルダが突然、通常の7倍はあろうかという生肉を取り出したんです！あなたどこに隠してたんですかそんなの！持ち歩くレベルじゃないでしょそれ。うおっ、涎が……。

思わずその生肉に目が釘付けに。ん！？あら、怒ってたイビルジョーさんも怒りが消えて、生肉にすっかり釘付けですか。しかも涎を垂らして……。

「でね、これを上に放り投げるからブレスで飛ばして欲しいの。向こうの方に。」

はい！？ブレスで生肉を飛ばす？あゝゝゝ、なるほど。向こうはエリア2の方角ですね。生肉をそこまで飛ばして、イビルジョーさんに追いかけさせると。完全に生肉に目を奪われている今なら行けるか？いやゝしかし、その手に引つ掛かるんでしょうか？いくらなんでも、それは無理なんじゃ……。え、やるだけやってみる？じゃあ、

彼女のリクエストに応えてやってみましょうか。彼女が、生肉を左右に振って、イビルジョーさんの目を惹き付け、真上に放り投げます！私もタイミングを合わせて風玉ブレスを発射！見事にエリア2の方へ飛んで行きました。………って、おおい！ジョーさん、ホンとにつられて行くんか〜い！

……。マジで生肉を追いかけて行っちゃいましたよ、イビルさん。犬じゃ無いんだから。本能ってコワイ。

「やった！作戦成功！息もピッタリだったね♪嬉しい！」

いや、あの……。いつもながらに照れますね。ってか、その笑顔は犯罪です！どれだけハートを撃ち抜かれたか！分かってないでしょ？……。ガクツ……。まあ、その天然さ故に惹かれたんですけど。

おおっと、折角上手くいったんです、すぐに筆頭リーダー達がいるエリア10へと急ぎましようか。私は早速彼女を乗せて、低空飛行で向かいました。歩いたり上空まで上がらずとも、この方が早い。リーダー達は遺跡跡の傍で、怪我をしたハンターを応急治療していました。私は、地面に足を降ろして、彼女も降り、歩いて近づいて行きます。

「おおっ！無事だったんだな！良かった。まずは助かった、礼を言う。ありがとう。」

筆頭リーダーに頭を下げられ、つられて彼女も私も頭を下げてました。条件反射ってコワイ。

「で、ハンターさんの具合はどうですか？」

「うむ。応急手当てをしたので、なんとか戻れそうだ。それよりイビルジョーを倒したのか？」

いやあその……。倒したと言うわけじゃ無いんですけども。ああ、彼女が説明してくれていますね。そうですよ、私が地面に文字を書いたらそれこそ珍しがられて、珍モンスターにされかねない。え、もうなってる？マジで？いやあ、それほどでも……。失礼しました。

「実は君達に会いに来たのだ。」

「え、どういう事ですか？」

ウンウン私も聞きたいです。

「君達の事を聞きたいのもあるが、一応君達に対してクエストが出されている。君達の捕獲というな。」

な、なんですと！私だけじゃなく、彼女までとは聞き捨てな  
りませんね。彼女が何かしましたかね、こんな可愛い女性が。彼女も  
驚いてます。当然のリアクションですよ。

ハンターがハンターの捕獲ってあーた、常識逸脱してるで  
しょ。あれ!?でもこの方達は私達を捕獲しようとしませんですか？  
なんで？

「え、クエスト受注してないんですか？」

「そうだ。個人的に君達と話がしたくて赴いた。予想したフィール  
ドで当たりだったが、イビルジョーにまで当たるとは。不意を突かれ  
て仲間が怪我を負ってしまった。先程は本当に助かった。」

いや、あの、良いんですか？仮にも私じゃないですが、クシャ  
ルダオラを撃退したお方ですよ？そこまで平然と話をされるとこ  
ちらが気が抜けちゃいますね。なにせ他のクシャルダオラと対峙し  
た事のあるリーダーさんです。再戦を望むのは当然の事かなと思っ  
ていたのですが、全然そんなことはないようで、気さくに話し掛けて  
きます。うゝん不思議？

「いや、クシャルダオラと話が出来ると情報があつてね。実際、古龍  
と話がしてみたいと密かにずっと思っていたのだ。相手がどうゆう  
思っているのか知りたくてね。」

はあ、なるほど。そんなことを内に秘めてたんですか。筆頭  
リーダーさんともなると、色々と思うところがあるんですね。でも、  
転生している私なので詳しい事は分かりませんよ。

「古龍の気持ちですか？」

ミラルダも会話が出来る事を話そうか迷ってますね。それ  
が世に知れたらどうなるのか。心配するのは当然で。そこまで気に  
してくれる彼女は素敵です。

「いや、無理には言わない。それに、それとは別に頼みたい事があ

るんだが。」

「えっ、私達にですか？」

「そうだ。私から君達にクエストを依頼したい。」

おお！驚きました。何がそこまで信頼を得たのか分かりません。ですが、他の優秀なハンター達ではなく、私達に依頼するのは余程の事でしょう。私は、ミラルダと顔を見合わせました。

どういった内容かは聞いてみないと分かりませんが、個人的に依頼したいと言うのはただ事ではないですよ。

何か他で問題でも起きましたかね。まあ、聞くだけ聞いてみましょうか。返事はそれからでもおそくは無いです。ミラルダも納得したように頷いてくれました。

「クエストの内容をお聞きしたいのですが。」

「うむ。ここで話すのもなんだろうし、龍歴院に案内したいのだがどうだろうか？」

んん!? 龍歴院ですか? まさか、そこまで誘導しておいて捕獲する気じゃないですよ?

「念のためですが、龍歴院で捕獲される事はないですよ。」

流石ミラルダです！ 同じ事を思っていたなんてオジサン感激！

「うむ！ 勿論だ。依頼したいことがあって、捕獲した等とあってはリーダーとしての威厳に関わってくる。私が率先して案内をするので、どうだろうか？」

まあ、そこまで言われればねえ…。私は、ミラルダと顔を見合わせて見えないように地面に文字を書きます。

(まずは行ってみましょうか。筆頭リーダーさんが案内してくれるなんて光栄かも。)

「うん、そうだね。確かに凄い事かも。」

私達は頷いて、筆頭リーダーに向き直ります。

「分かりました。一緒に行きます。」

「おお！ 行ってもらえるか、了解した。ならばイビルジョーに鉢合わせする前に移動しなくては。」



フム。とりあえず、怪我人に乗せて行きましようかね。その方が移動も早そうですね。

(怪我をしているハンターさんに乗せて行きましよう。その方が移動もしやすいし。)

私が地面にそう文字を書くと、彼女も納得してくれました。筆頭リーダーにそう提案してくれています。

「な、なんと！それは本当か！本当に良いのか？」

古龍が背中に人に乗せるなど、ライダーでもない限りあり得ないと思っていたようで。

他の古龍はどうか知りませんが、私は構いませんよ。いつも彼女を乗せてるし。

「済まない。重々感謝する。必ず君達を守る！よし、行こう。」

こうして、私達は筆頭リーダー達と共に龍歴院へと向かったのです。

♪♪♪

いや、龍歴院の方では私達が着く前に大騒ぎ！クエストを受注せず、捕獲すらもせずに筆頭リーダーが一緒にこちらに向かっているなんて、連絡が入るもんだから、オジサンでなくてもそりやビックリで！

研究員達は色めきたってます。なんせ、生きたクシヤルダオラが暴れもせずに龍歴院に来るんですよ。生態が垣間見れるとなれば、気持ちも分かります。

それで、大騒ぎになっている訳ですがバタバタしている間に、私達も到着しました。

全員注々々目々々！

一斉に私達に視線が向けられています。これだけ沢山に見られると照れますね。なんとというかその………はずかしっ！

いえ、なんでもないです……。

「こちらだ！」

リーダーは建物の傍にテーブルと椅子を用意してくれました。

「怪我人をすまない、助かった。」

怪我人を降ろすと、すぐに医療班に運ばれて行きました。集会所がすぐそこにあり、近くにベルナ村もある。

いえね、ベルナ村の側を通りかかった時は、悲鳴やら、物陰に隠れる者や、村長の後ろに隠れたり、教官を前に押し出したりする人々が……。この世界ではそういうもんなんだと、改めで感じた訳です。そりゃそうですね、私ぐらいでしょ転生して彼女が出来ちゃったのって。もし他に転生したモンスターがいたとして、大人しくしているかどうか。オジサン少しは落ち着いてるんですよ。彼女が出来て舞い上がってますけど。

いやあ、でも恐がられているのも、元人間からすると意外とシヨックでした。元の世界でも、好かれていたわけではなかったですけどこつちの世界に来てまでその気持ちを味わうとは……。なんか寂しかったなど。

でも、今私には彼女がいる。意外だった筆頭リーダーもいる。草食モンスターの親子もいる。ラージャンもね。まだまだ良い出会いがありそうで、楽しみなこと事実な訳なんです。楽しみでしよ。

筆頭リーダーが、椅子に腰かけると、筆頭ガンナーのお姉さんも隣に腰掛けます。対面側にミラルダが座り、その傍に私が顔を寄せていました。その方が話がしやすそうだったので。アイルー2匹が恐る恐る飲み物をテーブルに置いて行きました。いや、実物を見たら更に可愛い。抱き締めたいけど、潰してしまうなこれは。なんか違った意味で切ない……………。

「では、早速だが本題に入ろうか。頼みというのは君たちに和の国に行ってもらいたいんだ。」

「和の国ですか？」

私もビツクリ。近隣のフィールドで何かをするのかと思ってまし

た。和の国って意外。

「そうだ。私の古くからの友人が和の国に居る。その友人から応援を頼みたいと手紙が届いてね。私も短期間ならば赴こうかとも思ったのだが、日数もかかりそうな話も出ていたので離れる事が出来ない。他のハンター達も出払ってしまっていて、しばらく戻る事が出来ない状態だ。そこで、君達に頼もうと思ったのだ。もし、行ってくれるなら今回の君達の捕獲クエストを取り消しにしてもらおうと思うのだがどうだろうか？」

ははは。さすがですね。クエストの帳消しを提示してきましたよ。思っているよりもしたたかです。でも、ハンター達に追いかけて回されるよりはマシですか。

「和の国には温泉もあると言っていたな。」

何っ!!温泉!?!何故にそれを早く言ってくれないのですか!い、行きたい!温泉!!あ、でも入れるかな私……。何気に彼女を見ると彼女も目をキラキラさせて見つめてきます。完全にハマってますねこれは。私は頷いて行くことを了承しました。

「やたっ!ありがとうございます!」

あなたの笑顔には勝てません……。ま、私も温泉に食いついたわけです。

「おお!行ってもらえるか!すまない、感謝する。」  
「で、応援て何をすれば……。」

そうです。そこです。行ったはいいが何をしたらいいのか分からないと気持ちの切り替えが出来ません。

「うむ。50年前に里を襲われたことがあってね。人々は恐れから“百竜夜行”と呼んだ。」

「ひゃ、百竜夜行……。」

百鬼夜行ならぬ百竜夜行ですか。妖怪ならぬ妖竜……というわけですか。

「そうだ。50年前の悲劇を繰り返させぬ為に、その進行を止めるのを手伝って欲しい。」

なんと、大変な事じゃないですか。

「その竜達を率いているのは“怨虎竜マガイマガド”……。」

初めて聞く名前です。名前からしても禍々しい感が半端ないです。でも、その人達を助けない事の方が大変です。行くしかありませんね。彼女の方に向くと真剣な面持ちで頷いていました。私も頷き返します。

「分かりました。明日出立します。」

「了解だ。よろしく頼む！」

と、握手を交わしていました。私も爪で握手。彼女を守る……。里の人達を守る……。頑張ろ!!では……。

和の国に向かいます。

すみません。お邪魔します。クシャルダオラこと皇

雅人へすめらぎ　まさと《です。転生したら古龍ってありがたいですか？彼女が出来たのはありがたいですか？

ミラルダと言う上位の女性ハンターなんですが。彼女は素直で素敵な女性で、ホットドリンク3本で私は好かれてしまったんですよ。

どうしましょう？いや、どうにもならないですけど。私には彼女が必要なんです。愛しい人……きやつ！……。失礼しました。

それで今回、筆頭リーダーさんからの直接の頼まれ事を解決しようとして私達。和の国に向かう準備をしておりました。

こんがり肉に生肉、こんがり肉にこんがり肉……。ってどんだけこんがり肉好きですか！

ミラルダさん、他に持つて行くもの無いですか？あ、いや、ホットドリンクにクーラードリンクも分かりますけど。他にも色々道具が……。OKです……。思った私が馬鹿でした……。

「ね、向こうに着いたら温泉に入ろうね。そ、その……。一緒に……。」

は、は、は、はい?!い、い、今、なんて?!意味深発言されました?ドキドキ……。し、心臓が破裂しそう……。な、なんて大胆なんですよ!オジサン一発KO!

言った本人も顔を赤面させてうつ向いています。純情さが物凄く可愛い。私は顔を近づけて、彼女の頬に触れていました。彼女も頬擦りしてくれます。幸せのひととき……。

「準備の方はどうかかな?ん!」

筆頭リーダーさんが、いらっしやいました。私達も慌てて離れましたが恥ずかしさは拭いきれず……。

「じゅ、準備OKです。」

「了解した。地図を渡しておくので、迷わないようにな。健闘を祈っている。よろしく頼む。」

リーダーが地図を渡してくれました。よし、何とかこれで方向音痴

な私も着けそうです。私は肩を下げて彼女を乗せ、ホバリングをします。ある程度の高さまで上昇し、リーダーに手を振って飛翔しました。リーダーも手を上げて返事をしてくれます。

「ん!?なんだこの大きな気配は……。」

私達にはその時気付きませんでした。リーダーには気配を感じたようです。周りを見渡し、注視しますが見当たりません。

「む……、気配が消えた!」

姿を現すことなく、その大きな気配は消え去りました。後々私達に關係してくるとは思いもよらず……。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

雲の上を飛翔している私たちは意気揚々と地凶通りに進んでいました。和の国に向かつて。

「私達に止められるかな?」

私も領いてみるものの、未知のモンスターです。強そうなのは名前からしても分かります。しかし、対峙してみない事には対策しようもありません。里の人達に少しでも情報を貰って、考えねばなりません。さてさてどんな場所なのか。温泉はあるのか、一緒に入る事が出来るのか……ご、ごほん!失礼。

だけど、私が転生したのと同じタイミングで百竜夜行とは……。何かの暗示でしょうか?それともたまたま?偶然?逆にそうであって欲しいと願う私……。

と、思っていたらお腹が減ってきた私です…少し雲の下に下がろうかな。ゆっくりと下降して行きます。雲の絨毯をくぐり、雲の下に出ます。お、ちょうど陸地が見えます。やや!?なんでしようあれは?よく見ると、アプトノスの群れが怒涛の如く走っており、その前を走るドスマツカオ!?

あ~~~~!!よくよく見ればあの時助けた親子が先頭切つて

る！驚きました。随分と遅くなっちゃって。ドスマツカオも逃げ出すってどんだけですか？もう少ししたらアプトノスの団体に下敷きにされますよあれ。ほら、言わんこっちゃない。沢山踏みつけられて、気絶しちやった。ご苦労さまでした、合掌……。

でも、あの親子元氣そうなので安心しました。また襲われて、どちらかが食べられたらと思うと切なくなります。ただ遅くなっていたのは想定外でしたが。

私達は低空飛行で、親子の上を通過して行きます。周りのアプトノス達は、驚いて慌てて四方に散らばりましたが、親子には分かったようで立ち上がって喜んでいようでした。私達も手を振って、返事を返し上昇していきます。下を見直すと、あの親子の周りにアプトノス達が集まって来てます。私達の事をなんて言っているかは分かりませんが、くしゃみが出ないので悪口までは言われてなさそうです。また会うときまで元氣でね……。

私達は高めの岩山の上に降り立ちました。まあ、余程でない限り邪魔はされない場所だと思いますが。

（お腹減りませんか？）

地面に文字を書く彼女も分かってくれました。

「そうだね、休憩しよー！」

彼女も背中から降りて、私に寄りかかるように座りました。

彼女の温もり……心地良い……。

まだ生肉チャレンジしきれてなく、こんがり肉好きの古龍も珍しいと筆頭ガンナーのお姉さんにも言われましたが、元人間でしたので生肉……。慣れてません。急を要するときは否が応でも食べる時が来るのでしょうか。いずれはチャレンジ……。毎回同じことですが。ははは、切ない……。

彼女が焼いてくれるこんがり肉もジューシーで美味しいんですよ。どうやって肉汁を中に抑え込んでいるのか分かりませんが。

うん、美味しかった。地面にも同じことを書くと頬を赤くして喜んでくれました。可愛いです。

ン!?あれは？飛竜種ですが、体軀や翼に黄緑色が入っている、トサ

カの角があつて尻尾も棘がある……。

こんな所にも来ますかライゼクスさん。彼女を守らねば危ないです  
すね。

(お前たち、うまそうな物を食つてるな。)

お、肉に気を取られてる？なら、その方がありがたいですね。彼女  
に被害が及ばなければ良きです。

(肉の事か？何なら分けてやろうか？)

(いいのか？)

(いいよ。ほら！)

私は生肉の方を啜えて上に放り投げました。素早く動いてナイス  
キヤッチ！さすがです。

(ありがとな。そうだ、お前たちこの先に向かうのか？)

ライゼクスが顔を向けた方向は確かに私たちの行く方向です。

(そうだが？)

(なら、気をつけな。これから先は嵐になるぞ。俺の雷がピリピリし  
てる……。天候が変わる予兆だ。)

なるほど。そんな予測も出来るんですか。感心してしまいました。

(すまない。気を付けるよ。)

(肉をくれた礼だ。じゃあな。)

ライゼクスは90°に方向を変えて飛び去って行きました。彼女  
も警戒はしていましたが、生肉を渡した事で話が通じていると私の傍  
で様子を見ていました。

私がライゼクスから聞いた、天気情報を地面に書くと驚いたよう  
でした。ライゼクスがそんな感覚があるなど思つてなかつたでしょう。  
私なのですが……。

「どうしよう？どこか雨宿り出来る場所を探す？」

そうですね。私だけならともかく、彼女が居るので無理は出来な  
い。1度何処か場所を見つけて待機するしかないでしょう。私は領  
ずいて彼女を背に乗せ、飛び立ちました。

和の国までは今しばらく距離があります。手分けして上空から良  
さそうな場所を探します。しかし、こういう時つてなかなか見つから



ない。で、全く気にしていない時に、あくこんな所にあつた……とな  
る事がしばしば。

しかし、そうも言つてられません。分厚い雨雲が徐々に大きくなつ  
てこちらに向かつてきます。いや、こつちが向かつているのか？  
少々、雷も見え隠れしています。まずいです、非常にまずい。このま  
までは、嵐に巻き込まれてしまう。ですが、4つの目を凝らして探し  
ているのにはいい場所が見当たらない！どこかないか、どこか……。

あく、とうとう雨が降り出しました。しかも少し強めで。降水量が  
多いというやつです。風邪をひかせる訳にもいかない……。どうす  
れば……。どんどん雨が強くなってきました。うおっ!!あつぶなあ。  
稲光が横を通り過ぎました。彼女に当たらなかつたのは幸い。この  
ままでは危険ですね、稲光が私を狙つてます。

どこか避難しなければ……。む、あそこは……。

丁度いい岩穴があります。あそこで雨宿り出来そうです。私は方  
向転換をしてその岩穴へ向かいます。先客が居なければいいが……。  
そこも気にしつつ降り立ちました。意識を集中しますが、気配は感じ  
られません。そう奥まである訳でもないようです。彼女が降りて、松  
明を点けてくれました。周りはほんとに大きな洞穴です。ほんの数  
メートルなんですけど、奥深く続く長い穴ではなく、私がちよつと奥  
目に入って丁度と言つたところでしょうか。何とか嵐は凌げると安  
堵した次第。

中央付近に彼女が焚き火を組みました。私も焚き火を囲む  
ようにしゃがみ、彼女は私に寄りかかるように座りました。嵐はまだ  
収まりそうになく、雷雨が轟いています。収まるまでは、ここで待機し  
ようと彼女と話し、一晚野宿をする事に。

食事をして、楽しく会話が弾み、私には嬉しい限り。女性と  
こんなに楽しく話す事が出来るなんて、一生の内にあるかないか。こ  
んなときであっても貴重なんです私には。

さすがに彼女も疲れたようで欠伸を始めたので、寝る事にし  
ました。

焚き火が消えないように木々を追加し、私も片方の翼を広げ

てドーム状の形に上を囲って、簡易テントに。彼女もそれを見て感心していました。オジサン照れます。で、彼女も安心して寝息をたてていました。私も顎を地面につけて、休みます。深い眠りに落ちていききました。私も疲れていたんでしよう、次に目が覚めた時には大変な事になっているとも知らずに……………。

\*\*\*\*\*

\*

ん!?なんだこの匂いは。焼け焦げたような焦げ臭い匂っ!?!?

目が覚めて首を持ち上げると、嵐は去って天気は良くなりましたが、遠目のところの森から煙が上がってます! 燃え方が凄い。しかも、燃え移っている方向に村が見えます!

このままだと村が1つ地図から無くなってしまおう。村人達も……………。

彼女も異変に気付いて目を覚ましました。状況が飲み込めたのか、私に振り向き頷いて合図をします。私も同意見と頷くと、彼女をサツと背中に乗せ、岩穴から飛び出します!そして、向かうは山火事が襲いかかろうとしている村の前。

間に合ってくれ!と願いつつ、猛スピードで飛翔するのでした……………。(バルファルクじゃないけどね。)

和の国に着きました。

ごめんなさい！急いでます！クシャルダオラこと皇

雅人《すめらぎ まさと》です。転生したら古龍になっちゃつて。しかも、彼女も出来ちゃつて！

筆頭リーダーからの直々依頼を受けて和の国に向かっている途中に嵐で雨宿りしちゃつて……。い、いえ何もありません！

あつたのは、目が覚めたら外が大変な事になってました。山火事です！しかも火種が近くの村に向かってます！

緊急事態……。彼女と共に、村と焼け野森の間へと急いでいる所でした。

バルファルクではないけれど、私なりのスピードで村に急接近。村人達も当然、大騒ぎになっていて避難を余儀なくされています。

「だ、誰か將軍にこの事を伝えてくれ!!」

村長が助けを求めに大声で呼びかけ、2人がそれに応えて村を飛び出して行きました。いやあ、意外と遠くが見えて、声も聞こえます。古龍って凄い。彼女もそこまでは見えてないようです。

まずは、私達であの火事を止めねば……。

「あー龍だ!!」

「なっ！こ、こんな時に何で!!」

「は、早く非難を！急げ!!」

はは、助けると思われてないのでから、勘違いされてますね。彼女が背中に乗っている事すら気付いていないようです。

私達は村のすぐ外に降り立ちました。20m先まで火が近づいてます。彼女も背中から降りて村の中に入ります。

「私達が食い止めますから、急いで避難を!!」

「なんじやと！あ、あんたらは？」

「お話は後で！一刻も早く全員避難させてください!!」

「わ、分かった！すまん！皆、急ぐのじゃ！」

村長ですね。先ほど遠くからも見てましたが、村人優先に避難を指示している。いい人の様です。その掛け声で、混乱状態になるかと

思っていました。皆さん助け合って順々に移動していきます。素晴らしい。

「あつーえくん……。」

ん!?逃げ遅れましたか?子供が転んで泣き出しました。ですが、私もここから動くわけにはいかない……。

「大丈夫!連れてってあげる!」

子供を抱っこして急いで村人達の所まで走っていきます。さすがミラルダさん私が好きになっただけはある……。コホッ。

さて、私は火事を何とかしなくては……。竜巻で消せるか……。吹雪のブレスがいいか……。よし!やってみますか、なるようになれです。一旦ホバリングして4、5m上昇し、翼を素早く羽ばたかせ竜巻を2つ、火の向かって来る方へと放ちます。

木々を巻き込みながら前進していく竜巻……。その隙に私はゆっくり飛翔しながらブレスでその近辺の地面を雪を吹き付けてそれ以上に火が及ばない様にします。その上で私は炎と真っ黒い煙が立ち込める火事場へと移動しました。吹き付ける熱風、焦げた匂いと視界を遮るほどの真っ黒い煙……。炎が猛り狂ってました。無差別に火の粉を飛ばし、周りの木々を巻き込んで焼いて行きます。はた迷惑な奴です。落ち着きましようよ、あなたの通った後は何にも残らないんだから。と言っても聞いてないでしょうけど。

上空からブレスを照射しながら、少しづつですが消化を始めました。嵐龍の様に天候を操って大雨でも降らせれば一気に消し止められるんでしようけど、私にそこまでの能力はありません。なので、少しでも火事が進むのを遅らせ、鎮火できればと思ってブレスをずっと吐いていました。

その時です。後方から声がしたのは……。

「よし!放て!」

ガシユンッ!ガシユンッ!大量の水の塊が後ろからいくつも向かって来るじゃないですか!

よく見ると大型のカタパルトを利用して水を乗せて放出してくるとは考えましたね。

さすがに巨大な水玉には山火事も勝てないようです。今度は蒸発して白い煙が上がって鎮火していきます。文明の力って凄い。勿論こつちの世界での事ですよ。

でも、無事に鎮火してくれたようです。ですが、何故山火事なんか……。いくら前夜が嵐だったとしても、雷が落ちたとして木が燃えようとしても大雨で、すぐに鎮火してしまうはず。ならばどうしてここまで、燃え広がったのか……。

ん!?あの向こうに居るのは……。250mぐらい先の方に、烏竜種でしょうか?鶏冠が扇状に動く、嘴の尖ったモンスターが、立ち去って行きました。

なにか関係があるのかは分かりませんが、初めて見るモンスターです。気にしておいて損はないでしょう。

「よし!消火完了だ!村を守る事が出来たぞ〜!!」  
わくわく〜!!つと歓声が上がります。食い止める事が出来て良かった。

私は、彼女が心配になり彼女の元へと戻りました。彼女の方も、私を心配してくれてすぐに近寄ってきてくれました。まずはお互い無事で良かった。村人達も無事の様ですし。

「もしかして、あんた達、筆頭リーダーからの応援の人達か?」  
ああ、今掛け声をかけていた人ですね。装備もそうですが、威厳があつて頼もしい感が半端ないですね。髭が白髪混じりで、シワもある。やはりこの人が將軍っぽいです。

「はい、リーダーから依頼されて来ました。」  
「やはりな。ハンターが古龍と一緒に出向いてくると文が届いていな。古き友の事だから、嘘はついていないとは思っていたが、あまりにも想像がつかなくてな。半信半疑でもあったのだ。だが、こうして君達は村を守る為に尽力してくれた。」

それで確信出来た。やはり友は間違つてはいなかったと。  
あれ、でもこの人って和の国の人?將軍なのは間違いなさそうですけど。国はまだ先の方だと思いましたが?

「改めて礼を言わせてくれ、ありがとう。そしてようこそ和の国

へ。」

あら！着いたって事ですか？し、しかしこの村ぐらいしか見当たらず、城下町すらない、どして？

「おお、不思議そうな顔だな。ここは和の国の外れの方なのだ。城下町と各村は周りに点在している。だから、ここがある程度落ち着いたら、案内しよう。まずは、復旧を手伝ってほしいのだが？」

「わかりました。手伝わせてもらいます。」

ま、彼女もそう言いますし、案内してもらえますから人助けです。お手伝いしましょうか。百竜夜行も近々とは言っても今日明日中にいきなり来ることは無いと思うので、村人を助けておけば良い事もあります。で、私はまず何をしたらいいんでしょう？

「凄くいい!!龍さんだっ!!」

「ホントだスゲー！初めて間近で見た!!」

「え、怖い？怖くない？」

「大丈夫だって。ハンターのお姉さんが言った。」

あはは。ミラルダさんそんな事を言ってたんですか。まあ、襲ったりいじめたりする気もないし、しませんが。

私が手伝うと言っても、逆に村を破壊してもいけないし。ここは子供たちと仲良くなるのが得策ですか。

ならば遊びましょうか。私は村の外側で、犬の伏せの状態、かつこよく言えばスフィックスの状態と言ったら分かりますかね？体勢をその状態にして翼をたたみ、顎を地面に着けて子供たちに自由に上り下り出来るようにしてあげます。子供たちは、私の身体に触れつつ感動しながら話し込んでます。まず、余程の事でない限り、普通の村の人達では古龍を目の前で見ると、触れる事なんてまずないでしょう。親がすぐに子供たちを避難してしまうでしょうから。無邪気で良いですね。

お、みんな私の背中に上がるのかい？良いよ、翼を少し広げつつ子供たちが落ちない様にゆっくりと立ち上がりました。4人の子供たちが慌てて私にしがみつきます。でも、立ち上がって子供たちの方を振り向きウインクしてあげました。それを見て、子供たちも分かっ

たのでしよう。顔がぱつと明るくなりました。家の屋根よりは高さはあるかな。遠くの景色に、村全体が見渡せる……。子供たちが大はしやぎ。

いいですねえ、無邪気で。こっちまでほのぼのになります。あら、でも1人だけ怖がつている子が居ます。女の子ですが、あまりの想定外続きで警戒してますか……。うくん、どうしましょう。どうやって彼女の気持ちを和らげたらいいのか……。あ、そうか。こうすればいいかな？

私はおもむろに自身の鱗を1枚抜き取ります。それを啜えたまま、振り向いて彼女に差しします。

「えっ……。」

彼女が、鱗と私の顔を交互に見ています。私がウインクしてあげると、驚いて見つめられる私……。

「い、いいの!？」

私は頷くと鱗を彼女の手に。

「ありがとうございます。」

彼女の目がキラキラして、私の鱗を抱き締めていました。良かった。彼女の心が解れてくれた……。で、この子が将来名を残す程のハンターになって、私達に再会しに来るなんて、誰もどころか私にも知る由がなく……。

「あ〜！楽しそうね！」

おおっと、ミラルダさん。お手伝いは終わったんでしようか？

そんなに時間が経ったようには思えないんですけど。

「いや〜！かたじけない！助かった。ある程度落ち着いたので、移動しようと思うがいいかな？」

ミラルダも私の方を見たので、頷いて返事しました。おう、子供達を降ろしてあげねば。私はしゃがんで、子供達が降りやすい体勢になります。ミラルダも補助してくれて、四人とも降りられました。

「え〜！もう行っちゃうの〜！」

「もつと遊びたいなあ。」

「そうだよなあ。」

「うん……。」

「これこれ、困らせちゃいかんぞ。」

おや、村長さん。

「村を救ってくれた方々じゃ。無理を言っちゃいかんぞ。今度落ち着いた時にまた遊んでもらうといい。」

「はくくくい。」

すまんの。また遊びに来るからね。私が前足でバイバイすると、子供達も手を振って返事をしてくれました。

そして子供達が走って村の中へと戻ろうとした時です！4輪の荷車に積まれていた丸太の山が崩れたのです！

「危ないっ!!」

ミラルダが咄嗟に走り出します！私も翼で丸太を押さえようと前に突きだします！最初に走っていた男の子が丸太の下敷きに！と思った瞬間、男の子が何かに捕まれて、あらぬ方向に引き寄せられます！私もミラルダも驚いてしまい、男の子の方向を見つめていました。誰も居ない筈のその場所で、男の子が空中からゆっくりと降りていきます。

男の子本人も何が起こっているのか全く分かってません。ただ助かったと思うばかりで。姿形が見えません。

しかし、気配は感じる事が出来ます。その男の子のいる辺りに感じてます。だけど、何も居ないんです。

(ダイ……ジョーブ。オト……コノコ……ブジ……モンダイ……ナイ……。)

?!?!?

なっ！ま、まさかこんなところで？嘘でしょう。ま、マジで

？

(き、君は……。)

(ワタ……シハ……。)

(カメレオン!!)

(チガウツ!!)



おお！ナイスツツコミ。ゲームでも上位種の古龍で、姿を擬態で見えなくしたり、舌で攻撃したり、かなり苦戦させられた相手でもありました。まさか、子供を助けてくれるとはね。

(助かったよ、オオナズチ君。)

(ナゼ……オレ……ダト……ワカツ……タ……?)

おお！いい！そんな特殊な事が出来るのは君しか見てないんだよ！バレバレでしょ！てか、なんでこんなところにいんの？

(どうして君がここに?)

(オモ……シロ……ソウ……ダ……カラ……キチャツ……タ……)

まじか！いい！そんなノリで来たんか！いい！ま、来ちゃったものはしょうがないとして、はて一緒に行動する訳にもいかないし、どうしたものか……。

(オレ……サキ……二……イク……。キママ……ダ……カラ……)

(え、え、ちよちよつと！)

つて、行っちゃった……。大丈夫でしょうかね、ほんとに。そう簡単には見つからないですか。それはそうと、男の子は……。良かった、無事ですか。それは何よりです。じゃあ、移動しましょうか。ん!?ミラルダさん、気付いてない。そうか、私だけが気付いただけですか。一応、話しておきますかね。

と、地面に書くミラルダさんビックリ！

でも、大騒ぎになっても困るので二人だけのひ・み・つ

……。

きやく恥ずかしい！年甲斐もなく失礼しました。

ま、まあそんなこんなで、和の国に着いた私達。こんなんで良いんだろうかと思いつつ、城下町へと向かうのでありました  
……。

和の国にて。

失礼いたします。クシャルダオラこと皇

雅人《すめらぎ

まさと》です。転生したら古龍になり。彼女も出来て、七不思議に認定されてもおかしくないほど私自身がビツクリで。周りから見れば変わった人に見られるかもしれませんが、私にとっては最愛の人……、い、言っちゃった……。恥ずかしい！

そんな1人とワタクシ1頭のお話でございます。

こつちの世界に来てから人ではなくなったものの、その見返りになるのか全く彼女のかの字もない程に女性とお付き合いする事が遠縁……。いや、まず無かった私。そんな私がいきなりお付き合いしてくれる女性が現れた!?しかも美人!わたし好みのいい女……。失礼いたしました。そんな嬉しくなるほどに素晴らしい彼女に惚れられて、こうして一緒に過ごせる安住の地を求めて旅をしている所なんです。

今回、筆頭リーダーからの直の依頼という事で和の国を守って欲しいと頼まれて、温泉付き!の誘惑にも負けてやってきた次第で。

和の国の端の方にある村を何とか助け、將軍様が案内をしてくれます。ってか、ミラルダは分かりますけど私って大丈夫なんですか? 仮にも古龍ですよ? まあ、国を破壊するわけではないですけど。しても良い事ないし。

ただ、いくら將軍様がついてるとは言え驚かれるでしょうね。でも、先の村の子供たちは大丈夫でしたね。

可愛い子供たちです、たくましい。私なんかよりしつかりしてる……。で、色々考えながら歩いて行くと見えてきました。石や岩を使った門構えに石畳の階段。その先には大きな煉瓦屋根の五重の塔が……。その周りを同じ瓦屋根の家々が立ち並ぶ、ところどころに竹も生えている、お店も沢山並んだ活気のある城下町と言うべきでしょうか。その城下町の周りにいくつかの村があり、町に近い村と離れた先程の村とあったりします。でも、私たちはここから試練でしょうね。必ずしも全ての人々が受け入れてくれるとは限りません。

「( )で待っていてももらえるか?」

城下町の入り口で、將軍様が話を通して来るので、待つていてほしいと言ってきました。勿論強引に入って行くわけにはいかないので、返事をして待つことにします。清々しく晴れ渡る空のもと、彼女と待つことにしました。門には二人の門番がいて、私の事をもの珍しそうに話をしています。まあ、当然そうなりますよね。ハンターと仲良しモンスターが尋ねて来たのですから。うくん、將軍が城下町に入ってからしばらくたちますが、戻って来る感じがありません。中々にモンスター迄とは想定外でしょうね。気持ちは分からなくもないですが。

すると、それこそ將軍様が向かって行った方角から二人ほどやって来ます。ほぼ同じ服装で、飾りも似ています。黒髪のロングヘアも一緒に、姉妹なのか双子なのか分かりませんが、可愛いお二人さんが気難しそうな顔をして歩いて来ます。

んんん!?ま、まさかその後ろを付いてくる3人の男性ハンターは？

「え、ええー!あれって……………」

さすがに彼女も分かったようです。でもなんでこんな所まで同じなんでしょ、奇遇過ぎませんか？

つと、それより私達より先に来ている事も気になりますけどね。

「あなた方ですか?父の助っ人と言うのは。」

巫女さんのように可愛いお嬢さんの一人が話しかけてきました。ですが、口調はとても単調で良い感じの話し口調ではないです。

「は、はい。そうですが?」

ミラルダも返事を返しながら、その雰囲気驚いていました。

「父の無礼をお許し下さい。父が個人的に頼んだ様ですが、私どもはギルドを通して依頼しております。そして、3人のハンター様が派遣されました。ですので、折角お越しいただいたのですがお引き取り下さい。ここは私どもで百竜夜行を止めますので。」

あらら、薄々分かつてはいましたがリアルに言われるとさすがにね。更に後ろの3人もほくそ笑んでるし。

参りましたね。私はどのみち中には入れないのでかまいませんが、彼女が城下町に入れないのはいただけない。なにもそこまです言わなくても……。

「それにいくら筆頭リーダー様の直に依頼があるにせよ、クエスト登録されている方々を呼んでまで助けていただくとは思いません。私どもで食い止めますので、お引き取りを。」

うーん、随分と嫌われたもんですねえ。彼女も困ってしまいました。私もですが……。

「あー！ハンターのお姉ちゃんも龍さんだー！」

おおー！先の村の女の子じゃないですか、親御さんも一緒に。どうもどうも。私の鱗を大事に抱き締めてくれていた子です。ほんとにこの子が立派なハンターになるなんて……。ま、それはずっと先のお話ですが。私は顔を地面まで下げて女の子の目線に合わせてました。ウインクしてあげるとニコツと微笑んでくれます。

「龍さん、やっぱり優しい。」

私の顔を優しく撫でてくれる純粋な子……。

それを見て驚いているのは、2人のお嬢さんと、後ろの3人組。あーあ、とうとうまとめて扱いにしちゃった。この3人、良いとこ取りだよ、なんでこんなに縁があるのかさっぱりですが。

「あ、危ないですよー！離れなさいー！」

事情を分かってないようで心配で声を掛けたようです。

「え、どうして!?!お友達だし、村を助けてくれたんだよ。他の男の子も助けてくれた！遊んでもくれたし、凄く良い龍さんだよ。どうしてダメなの!?!」

驚いた顔をしています。子供は素直です。私も子供は嫌いじゃないし、遊んであげて良かった。

「たっ！たっ！大変だー！だー！」

門番が知らせに来た兵士から事情を聴いて大声を上げていました。「どうしたのですー！」

「は、はい!!隣の村にモンスターが出現!!騒ぎが起きていると通報が!!」

「な、なんですって!!」

先の村ではなく、隣の村に……。先の村で見かけたモンスターでしようか?もしそうだとしたら、追跡するべきだったか……。しかし、確認しなくてはそのモンスターかどうか分かりませんね。と言つて、ここに正式なハンターさん達が3人いらっしやるし……。

んん!?あ、ちよ、ちよつと待って!どこ行くの!こら!女の子が急に走り出しました。親も止めますが、間に合いません!追いかけるしかない!

「あ、あの子はどこに向かったんですか!」

さすがミラルダさん当然ですよ。私も直接会話が出来ればいいのですが……。

「隣村です!」

お嬢さんのもう一人が答えてくれました。ならば余計に大変じゃないですか。ここは行かなければ!

ミラルダさんの肩を軽くつついて、肩を降ろして乗るように促します。彼女も分かっつてすぐさま私の背に飛び乗ります。

「お待ちなさい!ここは、私達で向かいます!こ、こら!待ちなさい!!」

お嬢さんが何を叫ぼうとも行きますよ。しかも、関係が無いと言われたんだからこっちは独断で動くまで。何を言われる筋合いはありません。幼い命が危ないというのに何にこだわっているのか私には分からない。逆に良かったです。言葉が喋れたとしたら怒鳴り散らしています。でも、そんな余裕はありません。すぐに向かうとしましょう。ホバリングなどとせず一気に飛翔していました。こんなふう

に飛べたんだ!?と自分でも思いつつ、隣村まで急いだのです……。



まさに隣村はモンスターの襲撃にパニックを起こしていました。逃げ惑う村の人々、統率も取れていなく村長も動揺していて誘導すら出来ていません。村の端の方にある民家も何件か壊されていました。ゲーム上でもこんな事は聞いたことがありません。確かにシユレイド城は滅ぼされたという伝説があるのは知っていますが、何が目的なのか……。

む、見えました！村が荒らされています。折角の畑や民家が荒らされて、被害が出ています。止めなければ！しかし村の中です。でもやむ負えないのか……。それもありませんが、あの子は一体どこに……。私も上空から必死に目を凝らします。いたっ！逃げ惑う村人たちの間をくぐって、逆行して走っていく子が！

マズイ！その方向はまさにモンスターが迫っている場所。一体どこに……。ん!?その先に居るのは同じ年齢位の女の子！取り残されて泣きながらうずくまっています。その子を助ける気ですか！ミラルダも気付いたようです。

「私は村人を誘導します！あなたはあの子たちを!!」

そう叫んで、高さをもともせず飛び降りていきました。ホントに素敵な女性です。改めて惚れ惚れします。

と、浸ってる場合じゃない！間に合うか……。！私は急降下でその子たちの所に……。

「亜紀ちゃん!!」

「さ、紗矢ちゃん!!」

その蹲っていた女の子……亜紀ちゃんを庇うように両手を広げて息を切らしながらも仁王立ちでモンスターを見据えます……。紗矢ちゃんと言うんだね。名前を聞いてなかったので、今知りましたがオジサンが君達を守るぞ!!

その紗矢ちゃんたちの目の前に余裕の顔で上から目線で見下ろしているのは大型1頭と小型2頭、マツカオやギアノス、ランポスの様に群れるのが好きなようで、2足歩行に顔は細く狐のような耳はウサギの耳か？尻尾は太めで長め……。背中に体毛があり、赤い目をしている……。初めて見るモンスターです。小型は若干の違いはありま

すが似ています。相對するのも初めてなので、どんな攻撃をしてくるか予想が付きませんが身体を張って守らなければ！

その大型の方がその子たちの目の前で威嚇の咆哮を上げます。目を瞑りそうになりながらも必死に堪えている。

突然3頭とも体軀を前中回転させて尻尾を鞭の様にしならせ上から振り下ろしてきました！リオレイアやリオレウスの尻尾の下からのサマーソルトの逆バージョン！その勢いのついたしなつて来る尻尾が子供たちに襲い掛かります！さすがに紗矢ちゃんも目を閉じるっ!!

“バシューシューーンツ!!”

激しく叩きつけられる音が響きます！ミラルダも誘導しながらその様子を見ていたようで。

私は翼を広げて力を込めて盾のように固くし、その子の前で地面に突き立て攻撃を凌ぐことが出来ました！間に合った!!相手のモンスタ―達も突然の私の出現で驚いています。更に攻撃を防がれた事で、インパクトが強かったようで。

思い切り目を閉じていた紗矢ちゃんが攻撃を受けないのでゆつくりと目を開けると目の前に巨大な鋼鉄の盾が……。急にこつちを振り向き、パツと明るい顔が。

「龍~~~~さ~~~~ん!!」

ほいよ~~~~!助けに来たよ~~~~!ウインクすると嬉しそうに微笑んでいました。オジサンちよつと安心。でも、相手がまだ居る以上気は抜けません。後ろを見ると、ミラルダが誘導をある程度してこちらに向かつてきます。子供たちを頼めそうですね。紗矢ちゃんもそれが分かってか、亜紀ちゃんの手を引いてミラルダの方へと走っていきます。亜紀ちゃんが私と紗矢ちゃんの仲良さに驚いていましたが、今はそれを説明している時ではありません。その場から少し離れたところまで避難します。それを見届けて改めて相手のモンスタ―に振り返りました。

(いったい何者だ!何故人間の味方をする!)

大型の1頭が話しかけてきました。勿論竜語なので人が理解でき

る言語ではありません。ま、私も喋ると竜語なので人には通じませんけどね。

(ハンターにならないぎ知らず、村人や子供たちまで手……いや、尻尾にかけようとはいただけないな。)

翼を戻しながら返事を返していました。

(何者だと聞いている!!)

(いや、名乗れるほど有名じゃないんでね。古龍である事は間違いないんだけど。)

(フン!どちらにしても人間に味方するなど我らからすれば敵も同じ。大人しく去るか、それとも……。)

(うくん、私としてはあんた達に帰ってもらう方が良いんだけどなあ。)

(それは無理な注文だな。ならば黙らせるまで!)

大型の1頭が再度戦いの咆哮を上げます!しかし、そのモーションに移るなど予測していた私は翼を畳んだ状態で、ノーモーションで突進!そのモンスターの目の前で翼を水平に広げながら横を通り過ぎます!不意を突かれたので反応が遅れ、見事私の翼に両後ろ足を引っ掛けられ空中で1回転してひっくり返ります!小型のモンスターも同じです。まとめて脚を引っ掛けたので同じようにひっくり返ります。私は4本の脚で地面を蹴ってブレーキをかけ、反転して同じアタックを仕掛けていきます。やっと起き上がったところに同じ攻撃を喰らい、又もや空中で1回転。3頭ともがいていました。そして、村側を背にして仁王立ちになり、彼らを睨みつけます。次の攻撃が出来るよう、体勢を作りながら……。

「む、あれは鎌鼬竜“オサイズチ”!!」

お、將軍様が来てくれましたか。“オサイズチ”というんですかこのモンスター。道理で初めてなわけだ。

あら、お嬢さん達や3人組も来ましたか。戦いを見て驚いていますね。

(くっ!!一旦、引き上げだ!!)

起き上がったオサイズチと手下は分が悪いと悟ったのでしよう、撤



収めていきました。まあ、將軍様やハンターが集まった事で多勢に無勢といったところででしょうか。一応撃退出来たんですよね？追いかつたんですよね？はあ〜〜緊張した〜〜!!気が抜けて伏せの状態でその場に座り込んでました。ワールドの方じや縄張り等々で張り合ったり喧嘩したりしてるのはよく見かけましたが、私自身が直接その経験をするとは思ってもよらなんだ……。

いや〜〜ドキドキした。勝てなかったらどうなるんだろうとハラハラしつつ。

「龍〜〜さ〜〜ん!!」

おお!紗矢ちゃんにそれと亜紀ちゃん。ミラルダさんも。良かった怪我はなさそうだし、笑顔が戻ってます。その顔が見られることが何より嬉しい。

「龍さん強〜い!恰好良かったよ〜〜!」

い、いやあ〜、オジサン照れる〜、こんな力の抜けた龍にそう言われると恥ずかしい〜!でもちよびつと嬉しい。

「この大バカ者がつ!!」

おっと、私もミラルダも子供たちも驚いて声のする方へと振り向きました。將軍様がお嬢さん二人を叱りつけている。どうしましたか?」

「お前たちは民の事を何だと思っている!こうして野菜や果物が満腹に食べられるのは誰のお陰か!命より優先する物がどこにある!命を守らずに何が將軍家か!」

お嬢さん2人もがっかりしちゃってます。將軍様の言う事ももつとも。私が言葉で怒鳴らなかつた分、將軍様が代弁してくれているよ。でも、お嬢さん2人の気持ちも分かる気もして……。私って甘い!?

私はミラルダにそのぐらいでと声を掛けてもらおうと、地面に文字を書きました。あ、この子達見てる……。もしかして字の読み書き出来るのか?

「りゅ、龍さん、字が書けるの!?!」

あちや〜、バレちゃった。オジサン失敗。そうだよ〜この子達が

傍にいるのにすっかり心許してたよ。でもまあいいか、いずれはどこかでバレる事。遅かれ早かれ分かる事でしょうし。はは、やっぱりそこに反応する將軍様は凄い。

「い、今なんと言ったか？」

「うん、龍さんがここに字を書いているの。」

急ぎ足で、傍まで寄って来て地面をくいるように見えています。やがて顔を上げて私の顔を見て、ミラルダの方に振り向きしました。

「ミラルダ殿、これは……。」

「は、はい。彼は人の言葉を理解しております。喋る事は出来ませんが、こうして字を書く事で私たちは会話をしているのです。そのお陰で私も助けられています。」

「な、なんと！」

そりや、全員驚きますよね。竜語だけならともかく人語を理解しているなどと今までにない発見。でも私いつも言うようですが、転生しているので昔の事は分かりません。それこそ脱皮する前は どうしていたのか見当もつきません。ただ、今現在はこうして彼女が出来て一緒に旅が出来て危険だけど楽しい毎日……。こうして生きてます。

ゆっくりとしかし確実に全員私を見つめている……きゃっ♪……失礼しました。

「ならば今までの行動も合点がいきますぞ。あなた方が仲が良い事も。こうして人々を助けてくれることも。」

い、いや、そんな大層な事はしてません。人や子供が襲われるのを見ていられなかっただけです……。ま、まずは村も甚大な被害にならずに済んで良かった。あれだけ逃げ惑っていた村人が最小限のケガ人だけで済んだのもミラルダのお陰でしょうか。後は、村の再生は村の人や將軍様にお任せしてお暇しましょうかね。

(ミラルダさん、行きませしよう。私達はよそ者なので……。)

そう地面に文字を書くミラルダさんは頷きましたが、將軍様は慌てています。

「ま、待ってくれ！ワシはそなたたちを部外者にした覚えはない。それに娘たちが何を言ったかは分からんが、依頼しているのはこのワシ

だ。先の村を助けてもらった恩もあるし、今も子供たちや村人を手早く非難させ、救ってくれた。その功労を見越しての事。どうか、50年前の悲劇を繰り返さぬ為にも尽力願いたい！お願いできぬだろうか？頼む!!」

い、いや、頭を上げてもらえますか？将軍様が土下座など、そんな事をさせるような身分でもないですし。

「わ、分かりました。手伝いますので、顔を上げてください。」

彼女も同じ気持ちだったようで、ここまでされてはこっちにもそれ以上の理由がありません。何も城下町でなくとも近くに居れば飛んで助けに行けるでしょうし。百竜夜行を阻止するまで、居ましようかね。そうだ、紗矢ちゃんの村で待機すれば相手が動き出せばいち早く分かるでしょうし。それ、いいかもしれない。

（紗矢ちゃんの村で待機しませんか？その方が全体を見て警戒する事も出来るし、対応も早くなる。どうですか？）

「やった〜!!龍さん来るの?」

紗矢ちゃん文字を見て大喜び。ミラルダさんも分かってくれたようです。

「将軍様。私達は紗矢ちゃんの居る村で待機します。その方が私達も動きやすいですし、連絡をもらえればすぐにでも駆け付けます。よろしいでしょうか?」

「あなた方がそういう事ならばそうしよう。ならば、こちらから出向いて村の方で食事をしようではないか♪」

ほう！食事会ですか、良いですね。城下町に入れなかった手前、ミラルダさんが不憫に思えたりしたのでありがたいです。

（分かりました。よろしく願います。）

私も地面に書いて返事していました。ミラルダさんも安心したようです。

（紗矢ちゃんともう一人の子も連れて行きたいんだけどいいかな？）

そう文字を書くとき更に紗矢ちゃんの顔が明るくなります。

「亜紀ちゃん!!一緒に連れてってくれるって！一緒に行こ!!」

「で、でも……。」

そうだよね、不安になるよね。よし、オジサンが乗つけて連れてつてあげる。2人の前に顔を降ろし、ウインクしてあげます。すると、亜紀ちゃんも安心したのか顔が明るくなりました。オジサンも安心心。

(背中に乗せて行つてあげる。)

「ほ、ホントに!!」

「凄いね!乗せてくれるんだ!」

勿論!!私は肩を降ろして、子供たちが登りやすいような体勢になります。ミラルダさんの方を見ると良い笑顔で微笑んでくれました。ほんつとに素敵な女性です……。そして、ミラルダさんも乗せてゆつくりと村に向かって歩き出します。夕方にまた会おうと將軍様が戻つて行きました。紗矢ちゃんの親御さんは荷物を納めてから戻ると言うので先に私達は歩いて話をしながら、村へと向かうのでした……。でもいつになったら温泉に入れるんだろう……。ま、後で聞いてみますか。なるようになれます。では。

百竜夜行を企む者!?達……。

皆さんどうも、こんにちは。私は『皇』 雅人〈すめら

ぎ まさと》〃30才後半のおっさんです。モンスターハンターに遅咲きデビューですっかりハマった男です。

ハマり過ぎて、古龍になってしまった……。しかもですよ！今の今まで女性の女の字もなかった私が一人の女性ハンターから告白され、彼女が出来たんです！皆さんどう思いますか？はっ、失礼しました。

彼女はミラルダと言う名前で、上位ハンターであるのに美人です。どうして私が人の時じゃなかったの！と思う事しばしば。でも、私を好きでいてくれる彼女に感謝です。

で、筆頭リーダーの直々の依頼で和の国にお邪魔しています。

なんでも百竜夜行という行進が近々あるとの事。それを止めて欲しいと言うので来た次第で。まあ、3分の1は温泉目当てもあります。

村を2ヶ所助けつつ、しかし城下町には入れずじまい……。私が居る事で既にダメでしょうか。でも、鱗をあげた女の子とお友達を助けて、最初に助けた村に待機する事になりました。將軍さまもそこで歓迎会をしようと、言ってくれて私達は子供達と彼女を乗せて向かっていました。

「ねえ、紗矢ちゃん、龍さんとお友達なの？」

「うん！亜紀ちゃん、龍さんね御守りくれたの。」

と懐に赤とピンクの水玉模様の中着袋を取り出し、中から私があげた鱗を取り出してました。

「すご〜い！」

亜紀ちゃんも驚いています。2人して目をキラキラさせているのは気のせい!?この子達ホントに素直ないい子達です。

「ね、いつあげたの？」

ギクツ!!ミラルダさん、知らなかったでしたっけ？いや〜その〜

……。大きな冷や汗を流していると、クスクス笑い出しました。

「クスクス……。怒ってないから大丈夫。あなたのそういう所も好き  
♪」

「いや、その……で、照れますね。ごめんなさい、怒らせたかと思つてました。おじさん心臓に悪い。つて、心臓つて……あ、この辺か。」

「ハンターのお姉ちゃんも龍さんの事が好きなんだね。」

「え、う、うん。大好き。だから一緒に旅してるの。」

「いいなあ。大きくなったらあたしも龍さんと一緒になる〜!!」

え〜〜!今から爆弾発言ですか!しかも、将来……もう爺でしようけど、さりげなく予約されてません!いや、もう、ほんとにありがたいです。」

「え、紗矢ちゃんハンターになるの?」

「うん、なりたいなあと思つて。」

「すごいね!じゃあ、あたし紗矢ちゃんのサポートする!」

えつ、マジですか!?!この子達凄すぎませんか?良いですねえ夢があつて……。私が小さい頃つて夢なんてあつたかなあ?と思いつつ、今はねミラルダさんと一緒にのんびりと暮らせる場所を見つけたいと、目標が出来たので彼女に感謝してますけど。」

で、肝心の温泉つてあるんですかね?行く先々では見当たらないんですけど。川や滝があつて、自然が綺麗な事は納得ですけど、果たしてあるんだろうか?……はっ、でも私つてお湯に入れますかね?どうなんだろう?誰かご存知ありませんか?

知つてる方が要らしたらご一報を。え、内密だから教えられないつて、そんなあ教えて下さいよ後生だから〜。

ご、ゴホンツ!まあ、色々考えてたら村に着きました。子供達を背中から降ろしてあげると、村長呼んでくると嬉しそうに二人で走つて行きました。

私は中に入る訳にはいかないので、外で待機です。こればかりは仕方ないですね、木を何本か折つて来てと。私は周りの木を何本か折り倒し、四角に組み上げて行きます。そしてその折った枝等の中

にいれ、火を……あ……、どうやって火をつけようか？すると横から火がつけられます。ミラルダさん、どうして貴女は素敵なの？私、益々惚れてます♪そうか、焼肉器の火ね。賢くて素晴らしい。確かに肉を焼く以外も使い道はあるよな……。と感心しつつ、ミラルダさんに感謝。

そこには私が作った大きな焚き火が出来ました。

「おお！これはこれは、素晴らしい。」

「スツゴい！大きな焚き火だあ！」

「凄いね！」

「これは良い食事会になりそうだ！」

おお、村長さん達に紗矢ちゃん達。それに將軍さまに娘さん達も。村人さん達も集まって、食事会……いや、宴会が始まりました。飲んで歌って踊って……楽しんでるようで良かった。ミラルダさん？あ、顔が少し赤い……もしかして酔ってます？いつの間に片手にジョッキが……。大丈夫かな？ そんな大騒ぎが夜半まで続きました……。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

一方、私達が楽しんでいる頃、山奥の竹林の奥に今にも崩れそうな社があります。ぼんやりと月明かりが照らすその建物と灯籠……。周りは不気味さと静けさを醸し出しています。その社の前にひたひたと足音をあまり立てずにやって来る物が……。烏竜種でしょうか、鶏冠が扇状に開いたりしています。

（なんだい、私が一番かい。）

（ふん、あんたが早かったただけだろ。）

今度は大型1頭小型2頭がやってきました。ウサギの耳のようなピンと伸びた耳をして、細面の顔立ちに尻尾は長めの太め。背中に体毛があつて、赤い目をしています。尻尾をムチのように振り回すモンスター、“鎌鼬竜”オサイズチです。

(ふん、道草してるあんたが馬鹿なだけだろ。)

(なんだと！我らが悪いとでもいいたいのか！)

(違うのかい？)

(相変わらず減らず口は達者だな。)

(あんたほど堅物じゃないけどね。)

(なんだと！やるのか！)

(やるかい？)

両者がにらみ合いになりました。

(それぐらいで、やめておけ。)

背中に小さな角と苔が生えており、カモハシのような口をして、蛙に似た体軀をしているモンスターが池の中からゆっくりと現れました。

“河童蛙” ヨツミワドウ、あんたも言っただけでやっておくれよ！)

(まあまあ、”傘鳥” アケノシルムよ。誰が早い遅いで言い争っても無駄な事、来るのがかなり遅いようでは困るが揃ったのだからいいではないか。)

(だけど……。)

(楽しそうだな……。)

(ヒイイ！)

(マ、マガイマガド様……。)

3頭はいきなり現れた1頭のモンスターに頭を垂れます。火の霊のような浮遊物がその周りをゆらゆらと飛び、鎧武者のような顔立ちに兜をつけているような角、体軀はジンオウガに似てますが背中には鎧のように甲殻を、雷光虫ではなく妖気のようなものを纏っています。 “怨虎竜” マガイマガド……。50年前に人に被害を及ぼした張本人の様で……。

(準備の方は進んでいるか？)

(はい、それぞれ仲間を集い準備を進めております。)

(そうか。夜叉蜘蛛様からも催促の連絡があった。)

(夜叉蜘蛛が？)

(そうだ。人間どもも、我らの百竜夜行を阻止するべく仲間を募って



るらしい。早々に行動をとれと。」

(まさか、アイツか!?)

(オサイズチ、知っているのか?)

(はい、我らの進行を止めた者が居ます。)

(何者だ?)

(はい、ハンターと一緒に古龍の1頭が我らの邪魔をしてきました。)

(それ、鋼のような鉄の色した龍じゃなかった?)

(なんだ、あんたも知っているのか? アケノシルム。)

(そうだね、森ごと村の一つを焼き払おうとしたら止められたよ。)

(余所者か?)

(詳しくは……。ですが、人間どもの味方の様です。)

(ふむ、我らに反する者は全て敵だ。邪魔するようなら排除するのみ。)

(無論です。我らの悲願の為に……。)

((悲願の為に!!))

あちら、私達の知らない所で一致団結してるとは。それにまだ会っていないモンスターがいるようですね。

こればかりは対峙してみないと分かりません。ま、なるようになれます。そんな事とはつゆ知らず……。宴会が続いていました……。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「先ほどはすみませんでした。改めて村を救ってくれたお礼を言わせてください。」

おや、将軍様の娘さん達がミラルダさんに話しかけてきました。キツイ顔や怖い顔ではなく、穏やかな優しい顔をしています。よく見ると可愛いお嬢さん達じゃないですか。も、勿論!ミラルダさんほどではないですよ。

「いえ、いいんです。普通ならば古龍の彼と一緒になんて信じられないでしょうから。」

と、微笑み返しています。さすが広い心です。見習いたいですね。

「私はサクヤと言います。こちらは……!?」

もう一人の名前を言おうと振り向いて、黙ってしまいました。何故って私の前に来て両手を胸の前で組んでじいっ……と見つめて来るんですから。

「ちよ、ちよっとアミラ！何やってるの！」

「はい、お話ししたくて……。」

あ、あははは。そうですね。話が出る事を知ってるんですよ、あの時居たんですから。

（初めましてになりますか？アミラさん、あの時紗矢ちゃんが村に向かったと教えてくれてありがとう。）

地面に爪で文字を書いて行きます。それを読み取った彼女が照れてしまいました。

「え、そ、その……いえ、こちらこそごめんなさい。疑ってしまつて……。」

「そうね、あの時アミラさんが教えてくれなければあの子達を助ける事が出来なかつたかもしれなし。」

うん、ミラルダさんそのとうり！間一髪でしたからね、あと少しでも遅れていたらと思うとゾツとします。

「いま、私達には百竜夜行を止める為にハンターさん達が必要です。古龍である彼も頼もしい味方です。何としても止めなければこの国が滅びます。それだけは防ぎたいのです。どうか、私達からも改めてお願いします。お力添えくださいませんか？」

「勿論、そのために来ました。彼もそのつもりです。」

ま、もう1頭いるんで心強いですがね。

（ヨン……ダカ？）

うわっ！ビックリした！姿消して傍にいるなんて！早めに声かけてよ。これでも気が弱いんだから。

（頼む、早めに声かけてくれないか？心臓がいくつあっても足りない。）

（ゴメ……ン……ソウ……スル……。）

しかし、オオナズチ君なんて頼もしい味方が居てくれたもんです。気持ち的にも仲間にも古龍が居るとなると違うものです。

(あ、そだ、こんがり肉食べてみないか？ジューシーで美味しいぞ。)と、啜えたこんがり肉を彼のいるであろう前に置きます。すると肉だけが宙に浮いて行きパツと消え失せました。モグモグと租借音だけが聞こえてきます。

(ウ……マイ……マダ……アルカ……?)

(だろう。まだあるから食べるといい。)

(アリ……ガ……トウ……)

(口に合って良かったよ。)

大きめのこんがり肉を2つ3つ平らげていきました。姿を消しているので表情までは分かりませんが、次々食べてるところを見ると美味しいようです。

「おお、古龍殿。楽しんどるか?」

あらら、將軍様かなり酔ってますね。真つ赤な顔でふらふらしています。私は頷くと嬉しそうに顔を綻ばせて、ウンウン頷いてました。余程嬉しいんですね、後であんな表情を見たのは久しぶりです。とサクヤさんとアミラさんが話してました。気持ちが少しは楽になったんでしょう、国全体を守るトップとしては不安もあるでしょうし。

「そういうえば、ミラルダ殿は名前をお聞きしていたが、古龍殿のお名前を聞いておらんかった。教えて下さらんか?」

「あ、そういうえば私も聞いてない。」

ええ!……い、今更ですか?う……確かに言っていない……。どうしよう、フルネームは不味いでしょうし。でも、違う名前もどうかと思うし……。よし、雅人をカタカナでいきますか。マサト……にすれば、まだ転生しているのはバレないでしょ……:……ほんとかな?ま、いいか。

私は地面に爪でカタカナをイメージしながら、マサトと書きました。ミラルダさん含め、全員が驚きと感動しています。名前どころなに沸き起こると思ってもませんでした。私の名前ってそんなに

珍しいですかね？

「マサト……さん♪」

う、うわっ！名前で呼ばれると、撃沈です！しかも照れて可愛いし！！こつちまで赤らめ顔がバレそう！え、バレてる？誰に？皆さんに？内緒にしないとね♪

やっぱリミラルダさんじゃないと、私には無理です。だってこんなに、いとおいしい人と離れられません。私の名前が知れ渡る頃、彼等は動きを開始しました。それは次の日の夜の事でした……。

♪♪決戦！百竜夜行……。

皆さんどうも。相変わらずバタバタしております。私は、  
皇 雅人《すめらぎ まさと》“30才後半のおっさん  
です。モンスターハンターにハマったお陰で、古龍になってしまった  
……。しかもクシャルダオラ。更に、今までの人生で、女性関係など  
全く無かった私ですよ。一人の女性ハンターから告白されて、彼女  
が出来ちゃったんです！嬉しい！

彼女はミラルダと言います、上位ハンターであり美人です。  
どうして私を好きになっただのか謎です。でも、私を好きでいてくれる  
彼女に感謝です。

和の国にお邪魔しているわけですが、  
百竜夜行というモンスターの大打進が近々あるとの事。そ  
れを止めて欲しいと言うので来た次第で。

村を2ヶ所助け、鱗をあげた女の子とお友だちを助けて、最  
初に助けた村に待機する事になったんです。將軍さまもそこで歓迎  
会を催してくれました。

娘さんお二人の歌も聴きました。綺麗な透き通った歌声で、  
おじさん感動して聞き入ってました。ミラルダさんも、私に寄りか  
かって聞き入ってました。

「きれいな歌声だね♪」  
(そうだね、和の国での歌姫なのかな?)

「うーん、そうかも。巫女さんのようにも見えるし。」  
確かに見えなくはないですね。姉妹でそうなんでしょうか？

いやー、大きな焚火の灯りがゆらゆらと周りを照らしながら炎は天  
に向かって登っていく……。それを眺めながらミラルダとゆつくり  
出来るなんて、このまま時間よ止まれ！あ、ダメか……。

「どうだ楽しんでるか？」

側に將軍様が話し掛けて来ました。勿論！心地良いですよ。  
女性とこんな風に一緒に居られるなんて、生きてて良かった！古龍で  
すけど。

「ありがとうございます。こんなに素敵なご馳走まで用意していただいて。」

「いや、礼には及ばんよ。村を2ヶ所助けてもらったしな。それにまだ百竜夜行と一緒に食い止める依頼が残っているし。」

確かにそうですね。最終的にそれを食い止めなければ、国の存亡に関わります。なにせそれを止めるためにきてるんですから。

この国の人達はいい人ばかりのようです。この国を無くしてはいけない……。なんて柄にもないことを思った私……。自然とそう思えるのはこの国の人達の人柄でしょうね。何とか守ってあげなくては。

「マサトさん、お手洗いに行つて来るね。」

は、はい、どうぞ！気をつけてね。私が頷くと、私から離れた。その後、後悔が襲つて来ます。私は油断していたんです。すぐに戻ると過信していたんです。まさかが起きようとは……。

彼女が用を足して、私のところに戻ろうとしたときです。何者かが、暗闇の背後から糸の様な物で彼女を襲つたのです！しかも1本だけではなく、無数に……。彼女ももがいて、短剣で切り裂こうとしますが腕も捕られてしまい、身動きが取れなくなっていました。

(マサトさん!!)

その心の叫びが私の心に届きます。テレパシーでの会話が出来るはずもなく、しかし彼女の悲痛な声で私を呼びました。私は起き上がって、周りを見渡し彼女を探します。

ム、いた！あれか？150m位先の方に、無数に黒いものが蠢いてる。な…、あれ、蜘蛛か？1匹の体長が4〜50cmのネルスキュラとは言いませんが、大きな蜘蛛達がグルグル巻きにした、ミイラのような形の物を20匹位は居るでしょうか、必死に担いで運んでいます。

「龍さん！大変！」

「一体どうした!？」

下を見ると、沙耶ちゃんと亜紀ちゃんが慌てて走つて来ました。

将軍様もさすがに気になったようで。

「ミラルダのお姉ちゃんが、蜘蛛のモンスター達に捕まっちゃったの！」

「なんと！ミラルダ殿が！」

しまった、やはりあいつらか。くそつ、間に合うか？私は再度その方向に目を凝らしますが、既に姿はなくその先の方にも目を向けましたが、姿が見当たりません！まずいな、すぐに追いかけてあげれば……。

私は立ち上がり、翼を広げて飛翔しようと思いました。

「待て！どこに行かれる！」

足元から將軍様の声。何故止めるのか分かりませんでした。早くしないとミラルダが……。

「やみくもに探したところで見つけれはせん！奴らの正体は分かっている、居所もな。」

え、將軍様は奴らを知っていると？私は話を聞くことにしました。その方がすぐにミラルダの元にたどり着けそうなので。

(奴らは何者ですか？)

地面に文字を書いて質問していました。將軍もそれを見て頷いて話してくれました。

「うむ、奴らは群れで行動している。大型モンスターのボスは残虐非道で、我々からすると狂っているとしか言いようがない。50年前の百竜夜行の時も、奴が暗躍していたと噂された……。奴の名は“夜叉蜘蛛” シヤガラクという。」

夜叉蜘蛛シヤガラク……。そんな、影が動いていたとは……。残虐ならば尚更急がないと。

(奴等のアジトは一体どこに？)

再度、文字を書いて質問します。

「うむ、マサト殿なら見えるだろうか。このずっと向こう側に巨大な建造物があるのが分かるか？」

よく目を凝らすと確かにピラミッド遺跡の様な形の巨大遺跡が顔を出しています。私は分かったと頷くと、將軍様は話を続けました。

「その遺跡を越えて2 km奥に進んだ所に奴等のアジトがある。当時、四人二組のハンターの手練れが討伐に向かったが、誰一人戻るものはいなかった……。」

将軍様も悔しそうですね。無念でしょうね、倒すどころか被害の方が大きかったんですから。だからと言ってミラルダを助けない事には私の存亡にも関わりません。

「しよ、将軍様！大変です!!」

2人の兵が血相を変えて将軍様の傍に来て跪きました。

「どうした！何事か！」

「はっ、早急に砦の方へお越しいただきたく！」

「3 km先の方に大型モンスターが集まり出しております！いよいよかと！」

「な、なんと！思ったよりも早い行動だったな。」

なんてタイミングのいい……。ま、まさか奴らこれが狙いで……。なんてことだ！この国を助けたいと思う反面ミラルダも助けに行きたい……。どうすればいいのか……。

「ミラルダさんを助けに行ってください！」

振り向くと姉妹の妹アミラさんが。傍にはサクヤさんの姿も。

「ま、待て！百竜が迫って来るといふのか？」

将軍様の言い分ももつともです。ですが、私もやはりミラルダを助けに行きたい！初めて私の事を好きになってくれた大切な女性だから……。。

「いいのです！お父様もこの時の為に砦を改良し、特訓してきたのでしょうか？ちよつとやそつとじゃびくともしません！ですが、マサトさんにとってはミラルダさんは最愛の人……。その最愛の人を無くしては未来永劫悔いが残るでしょう。たとえモンスターであっても、そんな姿を見るのは忍びない事……。ですから、悔いを残さぬよう助けに行つて欲しいのです。」

あ、アミラさん……。ありがとうございます。私も後悔はしたくないです……。

(必ず、戻ります！どうか行かせてください！)

文字を書いて将軍様をお願いします。最悪、止められても行く





種や牙獣種、烏竜種やありとあらゆるモンスター達の大群……。

(進軍開始だ……。)

そのモンスター達を束ねる、*「怨虎竜」*マガイマガドが号令をかけました。それによってモンスター達が、動き出します。確実に砦へと向かって……。

「將軍様！モンスター達が動き出したとの連絡が……。」

「分かった！総員配置につけ！バリスタ、大砲、カタパルト、連射銃、全ての砲門を開け!!」

「「「「おお!!」」」」

地面から壁から、迎撃する為に造られた武器が現れ、弾や特殊な貫通の矢等が装填されていきます。凄い武装です。確かにそう簡単には抜けられないでしょう。

モンスター達の移動速度は体躯なりに早いもので、百竜と呼ばれるだけはあるほど。山と山の間、川沿いと一部の自然を破壊しつつ進んでいきます。他の野生動物たちはその場から逃げ出し、ただならぬ雰囲気は漂っています。

「ゲートへの到達、後200m!!」

「ゲートを突破した時点で一斉に放て！十分に引き付けるのだ!!」

「「「「はっ!!」」」」

地響きと共にモンスター達の咆哮も聞こえてきます。地震かと思わせるほどに地面が揺れ出しました。相当の数の足音が聞こえてきます！

「まだだ！まだ放つな！引き付けてからだ！」

緊張感が張り詰めていきます。將軍様の汗が頬を伝って地面に落ちた時です！

「グルオアアアアアア……!!!」

ゲートを破り、モンスター達が進撃してきました！

「放て〜〜!!」

いろんな射出音と共にすべての武器の弾や矢が放たれます！

「ギャガアアア!!」



を助きたい……その一心で。

遺跡を越えた辺りで、オオナズチのナズツちゃんか2手に分かれて進入しようと言ってきた。確かにナズツちゃんに回り込んでもらった方が、助けられる確率がいいかもしれない。私も頷いて、OKしていました。

飛翔しながら、姿を消して離れて行きます。頼む、頼りにしてるよ。

しばらくすると、見えて来ました。巨大な洞窟が。いかにもアジトです！と言いたげな、オドロオドロしい不気味な雰囲気醸し出した入り口です。あまり日の当たらない、草木に生い茂られた薄暗い場所があり、独特のイヤイヤ感を出しています。

きつと中に居るであろう、ミラルダを助けに行かねば……。私は意を決して中へと入りました。私が入って行ける洞窟……。広さは想像つきますか!? 巨大ですよほんと。樹海の様な木々に囲まれているから、見つけやすいのかもしれませんがこんなところもあるなんて。

奥に進んでいくと、更に広い場所に出ました。よく目を凝らすと、モゾモゾと蠢いている物が……。

すると、突然壁に何本もの松明がつきました。その中に浮かび上がる無数の蜘蛛達、その中心に大型のモンスターが居ました。確かに蜘蛛です、ギギネブラに近いでしょうか。ただし、ネルスキュラの2本の長い触手、毒を塗り付けて挟み込んでくるあれです。ネルスキュラは1対でしたが、奴は3対もありました。あれじゃ、1対を躲しても2対目、3対目と攻撃が来る、ひとたまりもなさそうです。そんなとんでもない奴が、夜叉蜘蛛、シャガラク……。

マガイマガドを操り、百竜夜行を煽った張本人……。いや、モンスターか。

そのうちの1本の触手に彼女が掴まれて上に持ち上げられています。

「マ、マサトさん！来ちゃダメツ！逃げて〜〜!!」

ミ、ミラルダ……。とりあえずは無事の様ですが、どうやって取り

戻すか……。

(クククク……。そこを動く出でないぞ。動けばこの娘がどうなるか……。)

シャガラクが話しかけてきました。私も止まります。何か起死回生の策はないか……。

(彼女を放せ。何が目的だ！)

(クク……。まずはお前たちを百竜夜行の現場から遠ざける事。もう一つは個人的にお前を食ってみようかと思つての。)

うぐつ、想像しただけで気持ち悪い。こいつに私が食われると!? 後々夢見が悪そうだ。

(なら、余計に彼女は関係ない。放してやってくれ。)

すんなりと放してはくれなさそうぞ。

(素直に我らに捕まれば放してやろうぞ……。)

(その言葉、本当だな。)

(疑うのは構わぬが、娘がどうなってもいいのじゃな?)

(分かつた。どうすればいい?)

相手が優位なのはどうしようもないのか、気配が散漫でナズツちやんがいるかどうかも分かりません。と言つて彼女の事もあるし、従うしかないのでしょうか。

(わが子らがお前を絡めとる。絡め終えたら放してやろうぞ。)

そう言うか否か体長40cm前後の蜘蛛達が傍に寄ってきました。全部がお尻を向けて糸を放出してきます。4本の足元からグルグル巻きにされていきます。動けない様にするためか、相当分厚く巻いてきます。このまま私をミイラにする気か? そう思っているうちに胴体の方まで巻かさつてきました。翼も徐々に巻かれていきます。

「い、いや〜〜!! マサトさん! マサトさん!! 動いて! 逃げて〜〜!!」

ミラルダ……。彼女が泣きながら叫んでいます! 私はじつと彼女を見つめていました。君は生きろ……。生きて私の前でまた微笑んで欲しい……。彼女が泣きじやくつて暴れますが、掴まれているのでそれ以上は動くことが出来ません。徐々に首の方へ。頭まで巻かれ始め

た時に私は裏切られます。

(クククク……。お前の望みどおりにこの娘放してやろうぞ。ただではないがな。)

「アグッ！ゴホッ!!」

背中から脇腹を尖った触手で貫かれていました。尖った先端から血が滴ってます……。

(ミラルダアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!)

「マサ……ト……さん……………」

彼女の頭が前のめりに勢いよく下を向いてしまいます。血が足を伝い流れ落ちていきます……。

(きくさくまああ~~~~!!)

私は奴に向かって怒りを露にしていました。

(ふんつ、誰も生きて放すとは言うておらん。)

やはり聞いていた通り、残虐なモンスターです！彼女を助けたいが為にすることがかえって仇になってしまった……。その光景を目にしたまま動くことも出来ず、糸に巻かれてしまいました。目の前が真っ暗に。

悔やんでも悔やみきれない後悔……。大事な人が……。大切な人が……。最愛の人が……。私のせいで失ってしまった……。何が守るだ、助ける事すら出来ないじゃないか！私はなんて愚かなんだ……。そう悔やみながら、気を失っていました……。

(ふん、もうこの娘には用はない。我が子の糧としようぞ。)

ミラルダを投げ捨てます。無造作に地面に転がる彼女……。子蜘蛛達が、群がろうとした時いきなり斜め上に横たわったまま、飛んでいきます。空中で止まり、姿を現す物が……。

(オマ……エ……タチ……ニ……タバ……サ……セル……ワケ……ニ……ハ……イカ……ナイ……)

オオナズチことナズツちゃんです。彼女を救ってくれました。これ以上彼女を無惨な姿にはしたくありません。ナイスです、ありがとう！

(ほうー！お仲間がいたのかい。これはこれは……。食べごたえがあ

りそうなのう。我が子等よ、其奴も捕らえようぞ。)

子蜘蛛達が、ナズツちゃんに群がろうとします。ですが、相手は古龍です。こちらもただで捕らわれる訳がありません。舌の鞭で蜘蛛達を叩き落とし、尻尾で払ったりと彼女を守ってくれてました……………。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆

(…………ト…………雅人…………皇雅人…………。)

だ、誰だ！私を呼ぶのは。その呼ばれる声で目を覚まします。しかし、周りは真っ白な世界……………。全く何もありません。しかも私も浮遊している感じですか。あら、私、元の人間の姿…………。素っ裸で…………。はずかしく…………。失礼しました。でも、ここどこ!!

(皇 雅人…………。)

(誰だ。)

(我ハ汝ナリ。汝ハ我ナリ。)

え、ちよつちよつと待って、我ハ汝…………。って、まさか!?!クシャルダオラ!?!

(ソウダ。)

(な…………でも、転生して…………。)

そうなんです。転生して、古龍として生活していた筈ですがどうして?!

(汝ハ、マダ思念体ノ状態ダ。)

あ、成る程。それで今人間の姿で…………、納得です。

(彼女ヲ救イタイカ?)

(な、なんだって!)

それって、どういう事?彼女を助けられるのか!?

(助ケタイカ?)

(助ケたい!だが、どうやって?)

(我ト同化スレバイイ。)

(同化する!?)

(ソウダ。ソウスレバ、彼女ヲ助ケル事ガ出来ル。)

もしそれが本当なら……、彼女を助けたい！生きて再会したい！彼女の微笑む姿が見たい！

(分かった！同化してくれ。どうすればいい？)

(ナラバ、条件ガ二ツアル。)

(な、なんだ。条件て。)

(ヒトツハ、我ト同化スレバ、元ノ人間ニハ戻レナイトイウ事。モウヒトツハ、我ノ生命エネルギーガ汝ニ注ガレル。膨大ナ痛ミト苦シミガ襲ツテクル。ソレニ耐エル事。)

なんと！そういう事ですか。ですが、思いは一つ……。

(それでもいい！彼女はこんな私を好きと言ってくれた。凄く嬉しかった。あんなに良い女性はいない！彼女を救えるのなら、人間に戻れなくても悔いはない！)

(イイダロウ。デハ、ハジメルゾ……。)

私は気合いを入れました。するといきなり全身に痛みが！更に熱い！

(ぐわああああ！あ、熱い！！身体中が焼けるようだ！ぐうううう……、しかも何だ！更に足下から流れ込んで来るものが！こ、これ龍脈というやつか？で、でかい！ま、待ってくれそれ以上は！？く、苦しい！押し潰されそうだ！全身も火だるまの様だ！ぐああああああ！！私もこんな事は当然初めての経験で……。)

(も、もう、耐え……られ……ない……。)

さすがに限界が来ていました。これほどのものとは……。気を失いかけた時の事です。ほんとに一瞬の事でした。私の脳裏に彼女の微笑む姿が!?

彼女に逢いたい！彼女と……彼女と生きてあの笑顔がもう一度見たい！

(ぐおおおおおおお!!!)

……。

(な、何だ！一体何が起きておるのだ！)

私の外側でも、異常が起きていたようで。私の身体をグルグ



ル巻きにしていた糸の包帯の隙間から無数の光が溢れだし、膨らんでいきます！

(な、何をしておる！更に糸を巻くのだ！)

シャガラクがそう叫ぶも間に合わず、糸が粉々に弾け飛びます！

(な、なんとこの事だ……………。)

(スゴ……………イ……………チ……………カラ……………ガ……………アフ……………レ……………テル……………。)

さすが古龍種ですね。力を感じ取っている。私は目を瞑ったまま、足元から力が溢れて来ます。透明度のある物質が私をコーティングしていきます。両前足の左右外側に上に向かって刃のようにコートされ、尻尾の先は銛の様に3本の刃が。翼膜には菱形の紋様が一つずつ浮かび上がり、角も増えて立派な形に。顔まで全身コートされます。

(な、なんだこれは……………。)

シャガラクも動揺し固まってきました。私は目を見開いて、奴を見据えて思いきり叫びました！

「グルオオオオオオオ!!」(硬度10!ダイヤモンドダオラ!!)

そうなんです。同化どころか進化したんです。透明度の高い物質で鋼鉄より遥かに硬いダイヤというコーティングを全身に施して……………。

横を振り向くと、ナズツちゃんが傷つきながらも、必死に彼女を守ってくれてました。

(すまない、ありがとう彼女を守ってくれて。)

(ナカ……………マ……………ダカ……………ラ……………ネ……………。)

ナズツちゃん、ほんとに感謝だよ。

(これが終わって落ち着いたら、彼女に巨大こんがり肉を焼いて貰おう。ご馳走するよ、スツゴク美味しいんだ。)

(ソノ……………ハ……………ナシ……………ノツ……………タ……………。)

彼女を優しく受け取ると、一度地面に寝かせて息を吹き掛けます。イメージをしながら吹き掛けるとダイヤが彼女を包み込み、棺が出来上がり、それをくわえて自身の背中に乗せ、更に吹き掛けてダ

イヤでコートして背中にくっ付けて固定します。そして改めて  
シヤガラクを見据えます。

(後は私に任せてくれ。奴は私が倒す!)

土煙が舞うほどに殺気を放ち、洞窟全体に満ちていきます。

(なんとという殺気だ……。)

(シヤガラク、彼女を無惨な姿にしたお前だけは許さない。彼女の  
代わりに無念を晴らす!)

(ふん! ほごくな小わっぱが! どんな姿になろうとワシの相手にな  
らんわ! 子供達よ、こやつを殺つてしまおうのじゃ!)

「キシヤア!」

無数の蜘蛛達が一斉に飛び掛かって来ました! 私は即座に  
斜め後ろにホバリングし、翼を勢いよく羽ばたかせて2本の竜巻を発  
生させます。通常の倍以上の高速回転で。しかも……。子蜘蛛達  
が、その竜巻に吸い込まれていきます。中では、竜巻に乗せて無数の  
小さなダイヤの矢じりが……。それが幾重にも突き刺さり、絶息して  
地面に落ちていきました。元々8つある丸い目が更に大きくなつて  
ました。

(な、な、なんとという事だ……。おのれ! 我が子達を!)

(あんだでもそう思うのか? 最愛の者を失った気持ち分かるか  
?)

(ほごくな! 我が毒手の餌食にしてくれる!)

シヤガラクが、3対の触手に猛毒を塗り始めました。私も対  
向する為に、口を閉じて左右の口元を少し開き、そこから息を出して  
いきます。あるものをイメージしながら……。

それは忍者が扱う武器の代表格の一つであるクナイ。握り  
があつて菱形の刃の付いた短剣です。私はそれを両刃にイメージし  
て、口から左右にダイヤを生成していきます。巧く出来たようです。  
太刀並みの長さはあるでしょうか、口の中に握りの部分をイメージし  
て固め、それをくわえて武器としました。普通のモンスターじゃや  
らないですよ。私は普通じゃないって? ごもつとも。

(そんな紛い物でワシを倒せると思うてか!)

(やってみればわかるさ。)

(小癩なああ!)

触手を振り上げて飛び掛かって来ました!私も首を傾げて刃を上下縦にして、上に向いた刃を振り降ろしていきます!お互いに横をすり抜けたとき、悲鳴をあげていたのはシャガラクでした。

「ギャハアアア!」(わ、ワシの触手があ!)

私の刃が奴の左3本の触手を肩口から切り落としてました。地面に転げ落ちます。体液が吹き出し、一気に疲弊したようです。

(お、おのれ!おのれ!!)

お互いに向き直り、突進します!私は同じく刃を縦にして振り降ろしていきます!すると、残りの3本の触手も切られ地面に落ちます。シャガラクも動きが止まりました。大量の体液が流れ、動く事が出来ずにいます。

(おのれ、許さん。許さんぞ……………)

(そのセリフそっくりお返しするよ。これはもういいな。)

そう言つて刃を放り投げていました。後はブレス等で倒せるでしょう。

(甘いな、ワシに切り札が無くなったとでもおもってたか。見くびつてもらつては困るのう。まだ1対あるのだよ!覚悟……………ガハツ……!)

(すまん、いいと思つたのは刃だけで私が手を下すまでもなかったと言う事さ。)

(き、貴様わざと!?)

そうです。上に放り投げて、相手の意識をこちらに向けて刃が奴の身体を突き刺すまでの時間稼ぎ……………。

(ぬ、抜かったわ……………。くちおしや……………。ガフツ……………)

シャガラクはその場に崩れ落ち、動かなくなりました。それを見届け、周りに灯されていた松明を全て燃やし、周りにも火を付け火葬します。2度とこんな悲劇が起こらぬ様に……………。

ナズツちゃんと共に飛び立ち砦へと向かいます。その途中

の、あのピラミッドのような遺跡の頂上に降り立ちます。

(ドウ…シタ…?)

私は黙って背中から彼女をダイヤの棺ごとその頂上の地面に降ろします。そして、棺の形をベッド状に。自身の翼の一部を少し切り、私の血の一滴を彼女の口に……………。

すると彼女のわき腹の怪我がみるみる治っていき、ドクン!!と胸の辺りが飛び上がりましたが、静かに鼓動のする音が……………。

「う……………ん……………」

彼女が目を覚ましてくれました。良かった。私は嬉しさと、生きて再会出来たことに涙を流しながら、顔を近づけました。

「マサトさん……………」

彼女がはぐしてくれます。良かった!また彼女の笑顔が見られる!

(キ…セキ…ダ…ネ…ス…ゴイ…………)

(さあ、立てるか?)

私は彼女と共にゆっくり顔を起こしていきます。

「ええ、大丈夫、ありがとう。」

ん!?!…………ちよつと待って?私、今、文字を書いてませんけど、聞こえた?

「あ、ほんとだ!聴こえる!凄い!マサトさんの声って初めて聞いた!嬉しい!」

い、いや、その…………照れますね。ビックリしました。会話が出来る!私も嬉しい。そしてやっぱり彼女のこの笑顔が見たかった。最高です!

そして、彼女を背中に乗せ、砦へと向かったのです。

「將軍様!後少して弾が尽きます!」

「ぐつ…………後は一番厄介な奴が居ると言うのに……………」

そうなんです。3人のハンター達を含め、モンスター達をここで足止めしてくれました。後は主になる連中が残ってます。

(ふん、やるではないか人間共。しかし、我らに勝てるだけのスタミナが残っているかな?)

確かに全員、ギリギリで、疲弊仕切っていました。

「こ、ここまでか……………」

「グルアアア!!」

「なっ!!」

全員、モンスター達も上を見上げます!

「お、おお!!」

間に合いました。ギリギリではありますが、遅くなりました。奴等は私に任せてくださいね。2度とこんなことが無いよう止めてみせる!!彼女と一緒にならば!!……………。

これで決着!?!百竜夜行……。

「おおっ!!マサト殿にミラルダ殿!!」

將軍様達の前にゆつくりと降り立ちます。ミラルダさんも私の背中に立ち、太刀を抜いて身構えます。

(へえ、生きて戻って来るとはねえ……。)

(なっ、すると夜叉蜘蛛様は……。)

(倒されたと思つて間違いないだろうな……。)

(ま、まさか……。)

(奴らがここに居るのが何よりの証拠だろう。)

(そんなん……。)

彼等も想定外でかなり驚いてますね……。

申し遅れました!私、ダイヤモンドダオラに進化させてもらった皇雅人《すめらぎ まさと》です!モンスターハンターにハマったばかりに転生し、あろうことかクシャルダオラに転生して直ぐに、彼女まで出来ちゃつて……。

人の時はおっさんで、彼女のかの字もない程恋人とは無縁……いや、皆無でした。こんな形で恋人なんて、何があつたんでしょ?これはこれで嬉しいので良いんですけど。

(奴が、人間に味方する愚か者か……?)

(はい、あ奴らです。龍の方は少し姿が変わっているようですが……。)

(構わぬ。どんな形であろうと、人間に組する者は許すわけにはいかん!)

うくん、やっぱりマガドさんは戦う気満々ですか……。出来ればこのまま帰って欲しかったんですがねえ……。ダメですか?ダメ?引かない?そうですか……。

仕方ないんですかねえ、じゃあ気合を入れましょうかね……。

「グルアアアアア……!!!」

い、いえ、私の咆哮ではありません!上空からこの国、この砦、いかなこの近辺の大陸ごと、ビリビリと揺れる程の咆哮が響き渡ります!!

この半端ない威圧感！圧倒的な殺意と畏怖がこもったこの気は……まさか……何でここに!?

よりによつて会いたくない人……じゃなかった古龍が飛来してきます。

「なつ、何故あの龍が……。かつてのシユレイド城のように、この国も滅ぼされるのか……!?!」

将軍様が絶望的になるのも無理ありませんね。伝説とも言われるかの古龍が飛来したのですから……。

「黒龍・ミラボレアス……。」

ミラルダも知つてましたか。知つてますよね、そうです祖龍と同等のパワーを持ち、炎のブレスはあらゆるものを焼き尽くす劫火……。

その伝説の古龍が上空から私達……いや、全ての人間やモンスター達を見下ろしていました。

人もモンスターもその畏怖と威圧感から耐えきれずに逃げ出していきます。残つたのはその威圧に耐えられる者のみ……。

(何だ奴は?)

げっ!?!マガドさん知らない!?!マジですか!?!それホントに言つてます!?!

なんとという人……いや、モンスターでしょ!!黒龍を知らないモンスター……。

えっ!?!ちよ、ちよつと!向きを変えて黒龍に挑もうとされています!?!いや、辞めましょうよ!無謀ですって!ああっ!!

マガイマガドが軽快にジャンプして岩山を駆け上がり、前足を振りかざしてミラボレアスに向かって行きます!が、黒龍はその場でホバリングしたまま、微動だにせず片方の前足を持ち上げ、マガドが向かつて来たところをその足を降り降ろします!

「ギャガアツツ!!」

黒龍に叩き落とされる形となつたマガドさんが地面に垂直に落下!勢いとその巨軀にクレーターが出来、その真ん中で悶絶してました。めちやくちやに強い……、いや強すぎる……。

あくあ、だから辞めた方が……つて言つてないって?あ、

そうですね、てへっ！

(マ、マガド様!?)

(な、なんとという事だ！あのマガド様を軽くあしらうとは。どれだけ強いというのだあの龍は！)

い、いや……半端ないです……。身の程を知るのも大事かと。G級の更に上に行くハンターさん達の異常さが、古龍になって分かった気がします。ゲームとしてプレイしていた時は、私もミラシリーズのクエストにも行っていましたけど、古龍になってみて改めて最強種に挑むハンターさん達って、今の私からすると怖い……。仲良くなってくれないかな？おじさんより切に願います。

でね、敵わないと悟った周りのモンスター達が、マガドさんを置き去りにしてさっさと逃げ出して行きました。倒されたモンスターだけが、現状が分からぬままに横たわっています。しかし、将軍様達にとってはそうはいかない。モンスターが居なくなった迄は良いですが、上空に残っている超古龍に喜べないわ、気が抜けないわで、将軍様も青ざめちゃってます。

私も同じ気分ですが、顔には出ないし、困った……。

ところがです!!その最強種さんはホバリングしながら降下してくるではありませんか!!はいっ!!一体どういう事なんでしょう?確かにここに現れた理由も知りたい気もしますが……。でも何で!?! 地面に降り立ち、翼をたたみますが攻撃やブレスを仕掛けてくる様子がありません。まじ!?!しかも歩いてこちらに向かって来るではありませんか!私もいっばいいっばいです!!あああああ、こ、強面が目の前に……。

(お前……この娘に血を分けたな……?)

へ、なんでそれを……。

(は、はい、大事な人を助けたく……。)

(我らの力を得て反旗を翻すやもしれんぞ。)

(彼女も私もお互いに愛しておりますので大丈夫かと。万が一にも、そうなった時には私の命に替えてそれを止めます!)

私も黒龍の顔を見返します。暫く顔を見あつてから、黒龍が



ミラルダに話し掛けてきました。

(娘……聞こえているな……。)

「は、はい！分かります。」

(彼氏はこう言ってるが、お前はどうか?)

「はい、私も…、彼から命というものを頂きました。大恩人です。ですから今の私は彼のモノです。私も彼の事を愛しています。もし、私が馬鹿げた事をしようとした時は、彼の手で私を葬って欲しいと思います！」

(ミ、ミラルダ……。)

改めて彼女の気持ちを知った気がしました。本気で私を命懸けで愛してくれている……。私も当然そうです！これからもずっと一緒に居たくて、血を分けてなどと危険を侵してでも、命を助けたかったんですから。

見つめあう私とミラルダを見て、黒龍も納得してくれたよう  
で……。

(ならば見定めよう！お前達の行く末をな……。)

そう私達に告げると、身を翻して飛び立ちました。

(近くに来たときは寄るがよい。大したもてなしは出来んかも知れんが。)

そう言つて黒龍が去つた後は、空が晴れ、いつも通りの砦に戻ります。

將軍様も緊張から解放されて、安心したようので腰を抜かして尻餅をついています。よく分かりますよその気持ち。

すると急に私にミラルダがハグして来ました。私も目を瞑つて彼女の感触を確かめます。

チュツ………。私の上唇に柔らかくて、濃厚で、甘く  
い感触が……。慌てて目を開けると、彼女が顔を真っ赤にしてうつ  
向いてました……。わ、わ、私……キスした!?キスされた!?は……  
ははは……。やっぱり生きてて良かったなあ！例え人の姿でなくとも……嬉しいです!!

私も舌の先をそつと彼女の唇に……。彼女もそれに応えて

くれました。

私の初キッス……忘れられない甘い思い出です……。

(おっと、危険は回避されたと將軍様に伝えないとね。)

「あ、そ、そうだね。私話してくるね。」

そう言つて、降りて行きました。ほんとに可愛い人です。いつまでも一緒に居られる事を切に願います……。

改めて彼女から危険が去った事を聞いて、砦にいたハンターや兵士達は、総出で万歳をしていました。無事に守り切ったと。マガードを捕らえ、他の倒したモンスターも回収していざ凱旋です!!

国中大騒ぎです!拍手が鳴り止むことがなく、喜んで泣き出す者……、はしやぎまくっている子供達……、良かった、国が人々が無事で。

お、沙耶ちゃんと亜紀ちゃんが来ました。私は地面に文字を書きます。

(ただいま。無事に終わったよ。)

「おかえりなさい、龍さんとお姉ちゃんハンターさんが無事で良かったあうえくん。」

あ、あらあらあら、泣いちゃいました。そうでしたか、心配してくれたんですね。ありがとう。君の祈りが通じましたよ♪彼女と共に戻って来れました。

「お疲れ様でした。無事に戻られて何よりです。」

おお、アミラさんにサクヤさん。

(只今戻りました。)

「御二人にお礼を言わせて下さい、国を守って下さつてありがとうございます。」

(い、いや、私は全然お役に立ててません。私より、3人のハンターさんの方がよっぽど活躍していたと思いますが……?)

「勿論あの方達もです。今回の報酬や素材の受け取りに大層喜んでおられました。やり甲斐があったと。」

(そうでしたか、彼等らしいですね。)

「そう思います。」

「おお、ここに居られたか。城下町を案内したい、案ずる事はない。今回は英雄の帰還だ、誰にも文句は言わせん！」

私は彼女と顔を見合わせて吹き出してしまいました。前の事をよっぽど気にしてたんでしょう。その気持ち嬉しくてね、將軍様にお任せすることになりました。と言って、私が入って行けば建物倒壊の大惨事になります。そこで、アミラさんや沙耶ちゃん達にお願いしてミラルダを連れて行って欲しいと頼みました。彼女もハンターの前に一人の女性です。そんな楽しみがあっても良いと思います。私は、遠くからでも彼女の笑顔が見れば一先ず満足です。

私は、城下町の外から彼女達を目で追っていました。賑やかで華やいできます。ほんとに良い国です。守る事が出来て良かった、と言って私は、大した事をしてないと思えますがね。

おお、あそこにあるのは、マグロ？ですか。でかいです、それをアイルー2匹で引つ張るだなんて、無謀だけど見るとお茶目な感じで可愛い。あら、次は舞台の上でウサギならぬアイルーが2匹で餅つきをしています。傍でメモを持ったお姉ちゃんが注目を集める為に頑張ってるようですが。お、お餅が出来たようです。なんと、団子三兄弟じゃないですか。美味しそう……。

お、飾りのお店ですね。女の子同士なので、きやつきやと盛り上がっています。彼女も楽しそうで良かった。

んんっ！あれ、モンスターを似せて造った練習用の模型ですか！考えますね、これなら模擬戦が出来るので実戦で効果が出るでしょうね。おお、武具屋さんも繁盛してますね。でも私を襲わないで下さい、お願いします！

綺麗な城下町です。あちこちに桜が満開で……。

彼女達が戻って来ました。あ、先程の団子三兄弟を買って来てくれたようで、嬉しい。

「はい、あくんして。」

う、うそっ！良いの？食べさせてくれるなんて、おじさん感激！早速頂きます！………美味しい……。格別です！こっちでも食べられるなんて。しかも、彼女に食べさせて貰えるなんて、幸せです！い

つまでも続きますように……。では♪

♪はい!?彼女が増えた!?

あ、御無沙汰してます。進化したクシヤルダオラの皇

雅人

《すめらぎ》

まさと《ことマサト》です。何の取り柄もなかった

おっさんが、転生して途端に彼女が来て、クシヤルダオラと1つになつて進化して……。

一体、私つて何者!?!いや、今はクシヤルダオラなんですけど、進化して。

それでね、和の国で百竜夜行と言うモンスターの大量が襲つて来たのを阻止して……と言っても、私は彼女を救うのに必死で何のお役にもなれなくて。挙げ句に黒龍まで飛来しちゃつて……。

でも、なんとか無事に国を守る事が出来て、彼女の笑顔がまた見られた事が何よりの幸せです……。しみじみ……。

モンスターが居なくなつた訳ではないでしょうが、大量が攻めて来ると言つた大事は無くなつたかなと。

で、ミラルダ達が城下町を堪能したあとに、温泉に入れそうな場所がないかと尋ねたら、村の人が案内してくれました!やった!これが目的の1つだったんですよ、これがなきや筆頭リーダー恨みまます。何せ温泉で釣られた私……。そこはなんとしても入りたい!

んんん!?!でも私つて、お湯大丈夫でしょうか?は、入れるのかな?どうなんでしょ、入つてみないと分かりませんねこれだけは。

なるようになるでしょ。ま、これが分かれば他にも温泉を見付けたら、ゆっくり浸かることも出来るでしょうし。

案内された場所は、村から離れた山奥の方、山岳側とでも言いますか、岩山に囲まれた所にありました。ちなみに夜叉蜘蛛が居た方とは反対側になりますね。竹林に囲まれたその場所は、巨大なクレーター状になった形で、底からお湯が沸きだして一ヶ所からお湯が溢れて流れていました。そう、見られる心配も無さそうですし、巨大な天然の露天風呂ですよ!まずはその凄さに感動!

ま、まずはどうかかな?熱くない!?!そうつと指を入れてみてと……!?!おっ!?!変な意味で良い湯加減です!?!どうなつてんのこの

お湯。温度にすれば42℃位ですか、正に温泉！天然過ぎでしょ！しかも都合よく私が入れる大きさで。じゃ、遠慮なく失礼して……。お、おとおお……！は、入れました！気持ち良いく……最高!!水浴びすらままならないのかと思ってたので、感動が……。嬉しい！温かい……。温もるくく♪

私は翼も少し広げつつ湯船に浸かっていました。

あ、そういえばミラルダは!?って！うわっ！じよ、じよ、女、女性の生肌っ!?

お、おじさん、鼻血が……。あ、出ないか。涎が……。あ、それ危ないし。

い、いくら布ごしでも悩ましいでしょ！でも……、とても綺麗だ……。

「くすっ、ありがとう♪」

あらま、聞こえたみたい……。ゆつくりと湯船に浸かっていく彼女……。見とれる程に素敵です。ほんとに私にはもつたいないくらい、でも嬉しい……。

「ねえ、背中流してあげようか？でも大変かな？」

きやあ！お背中流します。誘惑キター!!いや、しかし私の背中と言っても大き過ぎるので、彼女の傍に顔を寄せて湯船に浮かぶような体勢に。

例えば悪いかも知れませんが、ワニが水面から顔を出した感じ……。分かります？その体勢で、彼女と顔を寄せあつて湯船に浸かっておりました。至極幸せの一時……。

「ねえ、マサトさん？」

(ん、なに?)

「マサトさんはどうして人間の言葉が分かるの？しかも、文字まで書けるでしょう。どうやって覚えたのかなと思って……。」

あくあく、いずれと思っていて今来ましたか。いやしかし、転生したと話したら嫌われるでしょうか？元は人間……。と言ったら軽蔑されそう……。と言って他に語学を学んだなんて言っただけで誰に？と聞かれたらまずいです……。でも、いずれは分かっってしまう

事。嘘をつくよりは正直に……。それで嫌われたならどうしようもありません、その時は……。ま、どちらにせよ話してみますか。疑問に思わせたままも可哀そうですし。

（訳を話すけど、聞いてくれるかい？信じられない事だと思うよ。）  
「え、そうなの？でも、聞いてみたいな。マサトさんの事を知りたいし。」

（分かった、じゃあ話すよ。実は、僕は違う世界からやって来たんだ。と言っても魂だけが、このクシャルダオラに乗り移っただけだね。でも今は1つになった。元の名前は皇　　雅人《すめらぎ

まさと》人間の時は30代後半のおっさんだった……………）

……………

ミラルダが私を見つめて、絶句しています。そうですよね、異世界から来てクシャルダオラに移って、元はおっさん……いや、今もですけど。と、言われれば誰だって驚きます。私はミラルダをじっと見つめて、彼女の反応を待つことに。彼女の反応次第では、私は身を引かねばならないと思えたから。

「そうなんだ……、私はおじさまであつても構わない。だって、命懸けで私を助けてくれた大事な人……。最初にホットドリンクをくれた時から、私は貴方に惹かれてた。それは古龍としても、雅人さんとしても……………」

（ミラルダ……………）

「だから私は貴方が好き♪異世界からの人だろうと、古龍であろうと。私には大切な人だから……………」

ありがとう、私は今までこんなに人から好かれた事はなかった……。良く思われない事はあつても、1度も好意を寄せられた事はありません。果報者ですネ……………」

君を大切に……………。やっぱり私には過ぎた人だと……。でも好き♪

（ありがとう、ミラルダ。愛してるよ……………）

「私も……………」

私もミラルダも顔を見合わせて目を瞑りゆつくりと口づけを交わ

そうとしたその時です！

「覚悟〜〜!!」

なっ！ええっ！竹藪の中から大ジャンプでアックスを振り下ろして来る者がっ!!

「きゃっー!」

(あ、危ない!!)

私はミラルダを前片足で抱きかかえ、もう片方の前足でアックスを上空で受け止めます！重さの乗ったいい攻撃です。ダイヤモンドコートを少し厚めにしたので割れる事はありませんでしたが、反動はなかなか……。

「ぐっーやっばっーすっごい固い!!」

あの……そりやダイヤモンドですから……一応。ん!?声からすると女性ハンターですかね？よく見ると確かにそうです。ネルスキュラの素材で作られたチャージアックスにスパイオX装備ですか、どれだけ蜘蛛好きなのか……。それともただその装備を揃えたかっただけなのか……。

そんな考えも吹っ飛ぶほどの爆弾発言が彼女の口から飛び出しました!!湯船の中で立ち上がり、片手剣モードで剣先を私に向けて、「ねえっ！あたしをあなたのお嫁候補にしてっ!!」

……………。

私とミラルダは目が可愛らしいくらいに点になりました。

「えええええっ!!」

(はあああっっ!!)

その女性ハンターさんは照れながらも大真面目に叫んでました。いや、でもなんで私!?いくらでもイケメンのモンスター位いっぱいいるでしょ。こんなおっさんの古龍にしなくたって。い、いや、ミラルダは別ですよ、勿論。一体何があつたの、私のモテ期!?ほんつとに人の時でなかった事を恨んでやる。と言っても、人の時の方が3枚目、いや、5枚目くらいの凡人でしたから逆に嫌われそうですね、自身で納得。これで良いのかも。

でも、私を好きになってくれる人が2人って何かの予兆!?もう何で



も来いです。

あまりに衝撃的で、私とミラルダが固まっている頃、後方の竹藪の中で小声で笑いながら私達を見ている者が……。

「ククク……。見つけた……。やっと思つたぞ……。我がライバルよ……。」

細マッチョな体躯にショートカットの立て髪、雷迅剣ラギアクルスにベリオロスの防具一式を装備する男性ハンターが居ました。その時は私達も女性ハンターに気を取られていて彼の存在までは気付いてませんでした。

でも、何か別の意味で波乱の予感が……。あの……。私達に安息は来るんでしょうか？来るんですよね？ね？

「あ、あなた、名前は？」

「え、名前？天羅《あまら》よ。」

「え、和の国出身なの？」

「そうね、他の色んな所と、モンスターと相対して来たわ。でも、自分の国で百竜夜行があると聞いて急いで戻って来たの。でも、終わっちゃってて。でも、モンスターは居るよって。」

だ、誰でしょね、私の居場所を教えた人……。

「あなた達の事も情報は入ってたわ。結構有名よ、監視船に手を振ってたとか。筆頭リーダーがひいきにしているとか。」

いや、温泉がなかったら怒ってた所ですけど。有ったから良いんですよ、ケンカしたくないし。でも、手を振って行ったのはかなり話題になったんですね……。違った意味で人気者になっちゃいましたけどね。ま、色んな出会いもあるし、ミラルダと進展出来たし、良しとする所ですね。

でも、天羅《あまら》さんでしたっけ、私を倒そうとした割りにはお嫁さん候補ってどゆこと!?

「ねえ、何でマサトさんなの？」

そうです、ミラルダもそう思いますよねえ。

「あ、そのクシャルダオラ、マサトって名前なんだ！」

うわー！聞いてないし！私に名前があって喜んでるし

！つてか、剣を納めて湯船の中をザブザブと進んで来ます。

チユツ♪……………。

へっ、は、はい!?い、いま、何を……………!?

「あーあなた！なにしてんのよ！」

傍でミラルダが怒鳴ってます。あの……………私今キスされました？初対面でいきなりですか？それも、剣を交えた後ですよ……………。なんつう大胆な女性でしょ。な、何が何だか分からなくなって来ました。誰か状況が分かる人が居たら教えて……………。私はどうなるんでしょうか……………??

つづく……………。

執念深き竜……。

マサトです……。雅人です……。masatoです……。失礼しました、皇 雅人《すめらぎ まさと》です。

クシャルダオラに転生いたしました。しかも進化付き♪でも、元の人間には戻れない……。いや、覚悟を決めて古龍としてここで生きると決めたのですから愛しのミラルダと……。て、照れますね。

って事もあろうか天羅《あまら》さんと言うチャージアックス持ちの女性ハンターに惚れられるという、私にとっては前代未聞、何が起こったこの私！モテ期が今かく！！ツガク……。

しかも、好かれたのは女性ばかりにあらず……。

「ククク、我がライバルよ、待つておれ必ず剣を相まみえようぞ……。」  
なんか勝手にライバル視している男性ハンターが。こちらは姿をまだ見せないなので、良く分かりませんがその内に私達の前に現れるという事でしょう。ま、そっちは全然気長でいいと思いますが。

何か女性2人で言い争ってます。先程の天羅さんのキスが原因かと……。やれやれ……。

私は、二人の問答を無視してミラルダを抱き抱えて舌で彼女の口を塞ぎます。うゝゝと、文句を言いたそうでしたが私が唇を離さず、愛しく優しくキスをするので彼女も徐々にキスにハマリます。

横目で見ると、天羅さんが指をくわえて羨ましそうにこちらを見つめていました。この子本気で私の事を……。まあ、しばらく様子を見ましようか。敵では無さそうだし、いざとなればね。ミラルダを見つめながらゆっくり舌を離します。彼女は頬を赤らめてウツトリ。良かった、落ち着いてくれたようです。まずは、温泉から出ましようか。さすがに、のぼせそう……。

でも、いきなり立ち上がれば波が立って彼女達がひっくり返っても困るのでゆっくりと身体を起こしてなるべく波が立たないように立ち上がります。ミラルダもタオルのような布を身体に巻いて、身体を拭きながら、1つずつ防具を身に着けていきます。天羅《あまら》さ

んはそのまままで陸に上がり布で防具ごと拭いて行きます。よく見ると天羅さんも可愛い……コホッ……。

まあ、何はともあれ私にとつては凄く幸せなひと時を、壊すがごとく兵士さん2人が慌てて駆け込んできました。

「たっ！大変ですっ!!」

「捕えていた怨虎竜が急に暴れ出し、我らだけでは抑えきれず……、どうかお助け願いたい!!」

な、なんだって！マジですか!?!それはマズイな……、どのあたりで暴れているかは分かりませんが城下町や村が危ない！黒龍に抑えられただけでは収まらなかったんですか……。

(ミラルダ!!)

「ええ、行きましょう！国の人達を助けないと!!」

「勿論、あたしも行くよ!」

「あ、あなたね!」

(待った！話は後で。とにかく急ごう!)

「分かったわ。でも、後で優しくしてね、マサト♪」

(は、は……い♪)

くわあ……!この誘惑に勝てる人います!?!私には無理!断言してもいい!でなきや後が怖い……。

「あ、あの……。」

天羅さんが不思議そうに私達を見つめてきました。

「ん!?!どうしたの?」

「あなた達、会話が出来るの?」

あ、そういえばそうですね。地面に文字を書かずに彼女と話が出来るようになったのは、まだ誰にも話してないですね。そう言われるとこれも進化した!?!と言うことなのかな?

「そうね、確かに直接彼と話が出来るようになったわね。」

「え……いいなあ……、ずるい……!」

いや、頬つぺたを膨らませて怒る顔も可愛い……:ウオツホン……。こればかりはですねえ、簡単に私の血を飲ませる訳にもいかないし……あ、でも、ミラルダと会話していたように地面に文

字を書いて会話をすれば何とかなるかな。私は即、地面に文字を書いて見せます。

(その事はまた後で。今は怨虎竜を止めないと!乗って!)

「え、凄いや!文字が書けるの!?ほんとに!?!」

彼女もミラルダと同じリアクションです。珍しいどころか奇跡に近いんでしょうね。私はミラルダを乗せ、彼女にも乗るように促します。

「え、いいの!?やった!」

彼女も好奇心が旺盛のようで。喜んで背中に乗ります。ミラルダも呆れて笑い出しました。

「な、なによ!」

「クスクス……私の時もそうだったけど、あなたも驚くでしょうね」

「え、どゆこと!?!」

と、会話をしているうちに私は翼を広げてホバリングを開始します。

「これから向かいます!將軍様にそうお伝え下さい!!」

「分かりました!頼みます!!」

私達が、ゆっくり上昇していくなか兵士さん二人は急ぎ戻って行きました。

……………。

「すっ!すっ!すっ!すっ!すっ!すっ!」

ああなるほど、ミラルダの言いたかったことはこの事ですか。あまりに360度のパノラマ景色ですもんね。確かに見応え十分か、彼女が想定していた動きになったもんだから、笑ってたんですね。天羅さんもそれを気にせず周りの景色に見とれています。まあ、ライダーでもない限り古龍の背中に乗って景色を見渡す……なんてことはまず無いことでしょうから、貴重かもしれませんね。おっと、こっぴどいやられないすぐに向かわねば。うん!?奴の気配は……………こっぴどか!私はその気配の方向へと飛翔しました。

間に合ってくれ……そう、祈りながら……………。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆

「グルオアアア!!」(おのれ、小癩な人間共があ!!)

気が付いたマガイマガドが簡単に切れないはずの、かなり丈夫な鎖を何本も断ち切り暴れだしてました。そこは素材や必要性のアイテム等を探取する場所で、城の近くにあり、城下町とは反対側がありました。しかし、その稀少な施設はマガドが暴れたことにより破壊されてしまい、機能しなくなっていました。マガドの気持ちはまだ収まらず、城下町の方へと進撃しだしたのです!目の前のありとあらゆるものを破壊しながら……………。

「何としても抑えるんだ!これ以上町に近づけさせてはならんっ!!」  
「はっ!!」

しかし、相手はあの怨虎竜です。そう簡単には抑える事が出来ませんよね。何人かのハンターさん達が、取り押さえるか討伐せんと戦ってますが怒りモードに入っているマガドを抑えるのは容易ではないようです。それでも、進撃を止めようと傷を負いながら必死に戦ってます。その思いたるや見事です!

「見えたっ!!」

私も見えました!周りの草木や民家等々を破壊しつつ城下町に向かって進んでいます。かなりの暴れ方です。

「これは酷いね。ふるさとをこれ以上台無しにされたくない…………。」

天羅さんも静かに気持ちが入っているのが分かります。

「私も同感。こんな綺麗な町と人々をめちゃくちゃにされてたまるもんですか。」

「あ、気が合ったね。」

「そうね、思いは一緒の様ね。」

「なら、戦闘開始と行きますか!」

「行きましょう!マサトもいい?」

(勿論!アイツを止めるっ!!)

私も2人を乗せたまま一気に下降していきます！

「ゴオアアアアア!!」(止まれ〜!!)

マガドに向かって咆哮を上げます。そのまま体当たりをしようと突進していきます！マガドも気付いて後ろを振り向きませんが遅い!! 2人は手前で横に飛び降ります。私はマガドに体当たりしました！お互いに絡み合いながら噛みついてやろうと、脚で抑えようともがきます！片足でマガドの顔を思い切り押しさえますが、振り払われ逆に強烈な張り手のようなでも爪付きで引っかかれます！身体を反射的に反らせましたが、胸の部分を傷つけられました！つつ、ダイヤモンドコートなのにそのコートに爪痕が付くなんて。コートしてなければ皮膚をえぐられてるところです。なんつう固い爪だ……。

(貴様あ!!人間に組するとはモンスター面の汚しがつ!!)

(あんだこそ、わざわざ人間たちの恨みを増やしてどうするつもりだ!!)

(そんな事になる前に、人間どもを根絶やしにしてくれるわ!我らの世界を創るのだ!!)

(そう言う事態の時は黒龍や祖龍が動くと思うが。あんだ、それどころも黒龍にKOだっただろ。)

(ぬかせ!奴らが動かずとも我が成し遂げて見せるわ!!邪魔する貴様も許しはせん!!)

(そうか……。分かった。なら本気であんだを倒しに行く!)

(なめるなよ、小童があ!!)

私はマガドの顔面目掛けて目の前でブレスを放射!しかし咄嗟に反応されて後ろ足で腹を蹴り上げられます!ブレスは顔を逸れていきます!それを狙ってマガドもブレスを放射!私も翼を羽ばたかせて上体を反らせてギリ躲します!顔の右側を通過して行きました!あつぶなあ!やってくれますね!でも動きが早い!起き上がった!ジャンプして飛び掛かってきました!くっ、このっ!

「グルオアアア!」(小わっばああ!)

「ガアアアア!!」(マガド〜!!)

絡み合いながら上昇し、そしてお互いに地面に相手を叩きつけよう

と急降下していきます！きりもみ状態で

マガドの上を取った！マガドの脚や胴体を押さえつけそのまま地面へ！と思った瞬間……！マガドが尻尾から怨気の籠った弾を3発射出！バランスを崩され、体勢がひっくり返りマガドが上に！そのまま地面に激突！！

「ガアアアッ！！」（ぐわあゝゝッ！！）

「マ、マサトゝゝッ！！」

私の全身が地面にめり込みます！ぐっ……左の翼の付け根が……。咄嗟にダイヤモンドコートを厚めにして凌ぎましたが翼が潰れずに済んだ……。しかし痛みと共に上から顔を足で押さえつけられ、起き上がる事が出来ません。

（ふんっ！貴様ぐとときに遅れは取らんわ！）

マガドが更に足に力を込めてきます。あ、頭が……。

「グウウウウ……。」

私は声にならず必死に耐えるしかありません。その時です……。

「はあああああッ！！」

「おおおおおッ！！」

2人の女性ハンターがアックス状態と太刀でジャンプして真上から振り下ろし、マガト目掛けて攻撃を仕掛けます！その姿が私の視界に入りました！

（ミラルダ！天羅さん！）

しかし、それを見透かしたかのように、上を見上げてニヤリと笑い尻尾を振り上げて円形に振り回します！

「きやあッ！！」

「ぐうっ！！」

（天羅！ミラルダアアッ！！）

2人とも攻撃どころか逆に尻尾に突き飛ばされ、ミラルダも天羅も民家の壁に激突し壁ごと崩れ落ちます！！

なんて事だ……。死ぬなッ！！死なないでくれ2人とも！！もうあんな悲しくて辛い思いは沢山だ……！！

待っててくれ……。今助けるっ！！おっさんパワーをなめんじやねえ



!!

(むっ!!)

「グオオオオオ……………!!」(おおおお……………!!)

必死に痛みを堪えつつ、いやそれよりも2人を助けたい一心で痛みを忘れてマガドを押し返して立ち上がってました。

「ガガアツ!!」(きつ貴様つ……………!!)

不意を突かれてひっくり返るマガド……………。逆に今度は私が上から見下ろす形になりました。ゆっくりとミラルダの元へ。瓦礫を取り除き、気を失ってしまったている彼女を啜えて助けます。良かった、息はある…………。早めに治療しないと。そのまま天羅さんの元に。同じように瓦礫を除き、抱きかかえます。こっちも息はある良かった2人とも無事で…………。

「グウルオアアア!!」(きくさくまくっ!!)

マガドが起き上がったようです。私は2人を草原のある場所に寝かせ、立ち上がります。

「おおっ！ミラルダ殿！なっお主天羅か!？」

将軍様が来てくれました。良かった助かります。

(2人をお願いします！)

私は文字を書いて将軍様に頼みます。

「うむ、分かった！おいっ！誰か、手を貸してくれ!!」

「二はっ!!」

4人の兵士が担架を用意してくれました。丁寧に運んでくれたので、感謝です。私はそれを見届けて、そして全身を怒りに震わせゆっくりとマガドの方へと向き直ります。

(なっ……………!!)

マガドが私を見てたじろぎました。完全に私怒ってます!!シヤガラクの時もそうでしたけど自分の理想を押し付ける…………協力し合うならまだ分かりそうなものですが、一方的は許せない!まして人間を滅ぼそうなどと…………。

(貴様がどんなに怒ろうとも我には勝てぬ!!)

…………もはやマガドの声は私には届いてません…………。

「ガオアアア……!!」(再度、ひれ伏してくれるわ!!)

マガドが立ち上がって前足を振りかざし、私に向かって爪を振り下ろしてきました!!私は逆に体軀を低くし、顔を下げマガドの懐に……。顔を横に向けて口元を開き、ブレスを放出します!瞬時に両側にダイヤの刃が生成されます!

ザグッ!!……。

「ガツカフツ!!」(なっ貴様っ!!)

マガドの腹部から背中へとダイヤの刃が突き抜けていました。そう、シャガラクの時にも作りましたが、クナイのような両刃を生成したんです。その片刃が下から上へマガドの身体を貫いていました。

(お……おのれ……またいつか……蘇って無念を晴らしてくれようぞ……。)

私はその両刃から口を離します。それをつつかえ棒のようにした形でその場に崩れ落ち、目を閉じました……。

(済まないけど、こっちも長生きな生き物なんでね、蘇っても私が止めるよ。)

聞こえているのかいないのか……。身動きせずにそこにうずくまっていました……。私とは相性が悪いのかもしれませんが。少しはおっさんの話を聞いてくれればね……。

くっ、今になって翼の痛みが……。ミ、ミラルダの所に行かなくちゃ……。

「……………!?!」

わ、私は……気を失ってしまったようで。

「……………さんっ……………」

……………。

「……………マサトさんっ!!」

そ、その声は……ミラルダ!……どこに……。私は目を凝らして見まわすと涙目いっぱい私の事を見つめる女性が……。

「良かった!気が付いて……………」

(ミラルダ……無事で良かった。)

「私は大丈夫。それよりあなたの方が心配で……………」

ミラルダは優しく私にハグしてきました。

「ずつと離れずにあんたが気付くまで看病してたんだよ。」

おおつ天羅さんも無事で良かった。

「絶対に傍に居ると聞かなくてな。」

将軍様……おかげで助かりましたよ。

(ありがとうございます。助けていただいたて。)

「いや、こちらこそ礼を言わねばならん、国が城下町が救われたのだ。ありがとう。」

ははっ全然守った気がしませんけどね。周りを見ると丁度城下町の入り口手前に急きよ作られた場所の様で囲いややぐら、松明等を設置されています。

いや、人的被害が及ばなかったのが救いですが……。私もまだまだ弱いですね。これからも彼女を守って行かなければならないというのにね。ガンバロ……。

前足でミラルダを優しく抱きしめます。彼女も嬉しそうに私に頬を寄せていました。

ん?! ああ、左の翼を治療してくれたんですね。大きな長い布を包帯代わりに巻かれています。おかげで痛みは大分和らいでいますが、これじゃあすぐには飛ぶ事が難しいですね。

「マサト殿、翼が治るまで国に居てもらえんか? 民もそなた達を大層気に入ったの。ゆっくりして欲しいと多数の嘆願が来ておるのだ。恩人だとな。どうだろうか?」

え、いや、何にもしてません。出来たかどうかも分からないのにもでも嬉しいですね、翼が治るまでは大きな動きも出来なさそうだし、しばらく御厄介になりますか。ミラルダがOKであればですが……。

(ミラルダ、どうする?)

「私は良いわよ。マサトに無理させる訳にもいかないし。」

(なら決まりだね。)

私は将軍様に返事を地面に書きます。

(お言葉に甘えて、しばらく厄介になります。よろしく願いしま

す。

それを見て將軍様だけじゃなく、周りの人々も沸き立ちました。

こんな人から喜ばれるって……良いですね

……。

残された物達!?!は…………。

改めて、お邪魔します。皇 雅人《すめらぎ まさと》です。

クシャルダオラことダイヤモンドダオラになり♪覚悟を決めて古龍としてここで生きると心に留めて、愛しいミラルダと…………。うわっ言っつて恥ずかしい。

っつて事もあるうか天羅《あまら》さんも私に惚れるという、一生に一度あるかないか。

いやあ、感慨深いものが…………。え、いや、なんでもありません…………。

でね、折角柵等を作ってくれているんですからこの場所で完治するまで滞在しようかなど。まあ、宿に泊まろうと思ってもモンスター用なんて巨大な部屋は無いでしょうから。

(ダイ…………ジヨウ…………ブ…………カ…………?)

独特の体軀をした古龍種が一頭、私の傍に姿を現します。オオナズチことナズツちゃんです。

(おお!ナズツちゃんどこに行ってたの?)

(チヨツ…………ト…………ネ…………)

元々姿を消せる龍なので、それ以上は聞きませんけどね…………。あ、ちようど彼女も戻ってきましたね。早速例の物を頼んでみましょうか。

(ミラルダ、久々に巨大こんがり肉を頼んでも良いかな?)

「え、良いわよ。ナズツちゃんも食べる?」

(君を助けてくれたから、ご馳走するって約束してたんだ。)

「分かったわ、ちよつと待っつてね♪」

彼女は早速焼肉器を手際よくスタンバイ。しかも、どこから…………いや、どこにしまったたのその巨大生肉!しかも2つ!!更に凄いのはその焼肉器!ミラルダ特製だそうで、考えられない変形?!?!?下から火であるのは変わりません、火力は強いですが。ついでに5本ずつ追加になり、太めの鉄棒が肉の真ん中を貫いてついでに支えられます。その鉄棒の横側に大きなギアが。下の方に小さなギアがあり、ギア同

士でチェーンでつながってます。その小さなギアに手回しが付いていて、それをゆつくり回すことにより肉全体が均等にあぶられるという優れたもの!!そんな凄いや焼肉器ゲーム上でもありません。あつても使い道が……あるかな!?ジリジリと焼かれていきます。ジューシーな肉汁が汗だくになつて落ちていきます。その香ばしそうなこと! 2頭で顔を揃えて涎を垂らしてました。あああ匂いの誘惑が……。は、早く焼けないかな?これじゃ蛇の生殺し……。いや、龍ですけど。「上手に焼きました!」

い、今の声だれ!?しかも、生肉を同時に2つ焼くってどんだけですか!お、美味しそう……。。

(タ……タベ……タ……イ……。)

「はい、どうぞ♪」

そのこんがり肉を1つずつ差し出してくれます。2頭ともこの誘惑には勝てません。

(いただきます!)

(イ……イタダ……キ……マス……♪)

2頭ともかぶりついてます!美味しい!!実に美味しい!この絶妙な食感が堪らないっ!横のナズツちゃんも涎ダラダラで食べてます。

(メチャ……クチャ……ウ……マイ……ナニ……コレ……♪)

良かった、喜んでくれてる。大絶賛じゃないですか、ミラルダが聞いたら喜ぶでしょう。早速伝え……。

「良かった、喜んでもらえて♪♪」

へっ!?!……ミ、ミラルダさん!?!……話が通じる!?!ホントに?す、すごいじゃないですか!!

(ミ、ミラルダ……、ナズツちゃんの言葉が分かるの?)

そう言われて彼女も驚いてます。

「た、確かに分かった。え、うそ、私童語話せるの!?!」

本人もほぼ、気付いてなかったでしょうね。私も私達の間での話と思つてましたから。まさか、童語とはね。

まあ、そうなったのもきつかけがなかった訳でもないですしね。今

思えばそうなる事も可能性があつたんですね。でも、竜人でもすべてが竜語を話せるとも限らないし、貴重な人になつちやつたんですね。いやあ、更に大切に思います。彼女が居たから私がいる……そう思います。

「ねえ、なに話してるの?」

あら、天羅《あまら》さん。どちらに?

「彼のお嫁さん候補……と言ってる割にはどこに行つてたの?」

「うん! 武器のレベルアップに武器屋さんに。」

「レベルアップ!?!」

「そう、だつてお嫁さんになるにも修行が必要でしょう? それに助けられるばかりじゃなくて、助けてもあげたいじゃない。だったら、こつちも少しでも強くならないと……。」

「……………」

うくん、確かにそれも一理あるかも。でも、あまりに強くなられても恐妻家は怖い……。怒つて私が討伐されるなんて事があつたら……その時は自業自得ですか……がくつ。

でも、いざという時はサポートは大変助かります。私もゲームの時はオトモに助けられたり仲間のハンターに助けられましたし。私もサポートをしたりで、たとえ、一期一会の仲間であつたとしても凄く嬉しかった……。そんな思い出が、ふと蘇りました。それはそれで楽しかったと。

しかし!! 私は今が一番幸せつ! たとえ龍であつたとしても、彼女が居るんですよ。いろんな出会いがあるんですよ、キツツイ事も沢山ありますけど充実してる感が半端ないです。人間であつた頃の私にはそんな余裕もなかった……。なので、今が一番好きです……。

ミラルダも少し考え込んでしまいました。私は……と自問自答しているんでしよう。

(ミラルダ……。)

「ん!?!」

(君は君らしくでいい。無理に何かをしようとしなくてもね。今までもこれからも愛してる事には変わりないから。)

「マ、マサト……………ありがとう♪♪」

いや、照れますね。我ながらかつこつけたことが言えたもんだ！これって古龍になったから自信が付いた!?

それとも、本気で人を好きになるとそこまで言えるのかな？何にせよ顔が真っ赤だったのは後で言われて気付いたことで……。彼女も私の脚に寄り掛かってました。彼女のぬくもりは良い……。

「もうっ！ずるいつ！なんで、あんただけ話が出るのよ!?!私にも教えて、竜語!!」

え……………お、教えるって言ってもどうやって!?!ミラルダも……………そりや当然困りますわな。彼女も気付いたら会話が出来てたんだから。「教えてくれるまで私も離れないからね!」

え、反対の脚に身体を寄せてきました。彼女のぬくもりも心地……………ごほっ、けほっ。

(イソ……………ガ……………シ……………イネ……………。)

(はは、嬉しい悲鳴かな。)

(カ……………ノジョ……………ニ……………コ……………レヲ……………。)

ん、ミラルダに!?!おおっこれはっ！古の龍秘宝……………。貴重な物をあげたいなんて、よっぽど気に入れられましたね彼女。

(ミラルダ……………?)

「ん？なあに♪♪」

うわっ！その下から上目遣いの目線撃沈しそう……………。なんて誘惑ですか！ミラルダにだけは……………討伐されてもいい……………。って、そこじゃなくて!!

(ナズツちゃんに君にあげたい物があるって。)

「え、ホントに!?!嬉しい!」

(コレ……………ヲ……………。)

「こ、これ……………」

彼女も驚いています。古の龍秘宝……………。大事にしているであろう、その内の1つをくれたんです。なかなか貴重品ですよ！クエストでも、時々か、たまにしか見つからない物です。それを彼女にと、しかも時々肉を焼いて欲しいと、こんがり肉のリクエスト付きです。





(全体に銀色のしかも、ダイヤをコートしている飛竜だ。)

(ほう、同種か。)

(そうだ、そいつは人間に味方していて我らの邪魔をするのだ。)

(そして、黒龍“ミラボレアス”が後ろについている。マガド様はミラボレアスにやられた。)

そうか……。その後の出来事は彼らは知らないんですよね。最後は私と戦って倒された事を……。

(ふんっ、それでお前らは尻尾を巻いて逃げてきた訳か。)

(何だど！愚弄する気かっ！)

(愚弄も何も事実だろう、違うのか？)

(い、言わせておけばっ！)

オサイズチが戦う構えを取ります。ゴシャハギも右腕にブレスを吹き付け、氷の刃を作り出します。

(待て、オサイズチ!!そう言われても仕方のない事。ゴシャハギと対決してなんの意味がある!)

(し、しかしヨツミワドウっ!!)

(頭を冷やせ！百竜夜行は失敗したのだ。我らはこれからを考えねばならん。)

3頭がうつ向いてしまいました。トップが居なくて目的が失われたのだから、路頭に迷った状態ですよね。

(しかし面白そうだな。)

鬼の顔にニヤリと口元が上がりました。人の事は言えませんが、ちよつと怖いですその顔。

(何が面白いというのだ、ゴシャハギ?)

(どれだけ強いのか試したくなってきた。)

(え、あの龍と戦うってのかい!?)

(そうだ、強い奴には興味がある。俺をそこまで案内してくれねえか。なに、着いたらお前らは後ろで見てりやあいい。)

(分かった、案内しよう。)

(ちよつ、ヨツミワドウ!?)

(うまくいけば、マガド様を開放出来るやもしれん。)

(マガドの事はお前らに任せるわ。俺はそいつと戦えればいい。)

4頭は領き合つて、国に向かう事に……。うくん、また厄介な物が来ますね……。そんな事はつゆ知らずですが、他にも動いている物が居ました。そちらこそ更に知りえない所から動き出していたのです……………。

番外編♪♪珍仲間!?!に出会いました。

突然ですが……。皇 雅人《すめらぎ まさと》です。クシャルダオラなおっさんです。後にも先にもクシャルダオラ……と言いつつ後々進化しましたけど。

で、和の国に来る途中で出会った仲間が居たんです……。

和の国に到着する前の事です。和の国に行く前にユクモ村に寄りたいとミラルダの提案で寄って行く事になりました。まだね、その時は文字での会話だった訳ですけど了解して向かっておりました。でも、私にすると少し不安もありました。何故って村に古龍が現れるって普通だと緊急事態でしょ、大騒ぎになると思うんですよ。向かってはいますけど、どうなんだろうかと。すぐにハンターさん達が複数現れて私……倒されちゃう!?!どうしたものか……。

と言ってる間に近づいて来ました、ユクモ村……。あちこちから温泉の湯気が立つ温泉の村……。ゲーム上でもよく過ごしてました。良い所です。

あ、門番さんが早速気付きました。慌てて中へと入って行きます、まずいかなやっぱり。あく……村の人々も慌てふためいています。やっぱりね、そうなりますよねえ。え!?!でも、奥の方……なんか村と雰囲気違ってません!?!あんなどこに広い場所なんてありません!?!たっけ?!?しかも、家もあるし……。3階建て?立派なこと。って、その周りを囲う柵の傍に龍歴院の연구원さん達が沢山います。どうなってるのこれ!?!こんな場所無かったと思うんですけど。げっ!?!広場の奥の方になんで大型モンスターがいっぱい!?!セルレギオスでしょ、バルフアルクでしょ、キリンさんにタマミツネに、ガ、ガムート!?!あれってデインバルドさんじゃあ……!?!

あ、あの……なんの集まりですかここ!?!  
パニックって意味が分かんないんですけど!

何故に色々なモンスター達が一同に介してるんですか?そりや연구원さん達が、血眼になって観察しますわ。被害なく、外から生きた状態を見れるんですから。

あ、あの綺麗な着物を着た女性は村長さんですよ、ゲーム上でもお見掛けしていた女性なのでわかりますけど。

ん!?あの白い綺麗な猫鎧に白基調のニャンコテツを装備したアイルーさんは!?周りに女性ハンターさんやニャンターさんが取り巻いてますけど、一体何者でしょうか……。しかも、これだけのモンスターと、一同に生活しているなんて奇跡でしょ。どうなっってしまったのユクモ村……………。

「私、話をしてくるね。」

ミラルダが先に飛び降りて、事情を説明に行くというので頷いてOKしました。彼女も頷き返して早速広めの場所に降りていきます。

あら、研究員さん達がござって私を見つめてます。違った意味で目が血走ってる…………。

そ、そんなにみつめられると…………:照れますね♪

まあまあ、珍しいのかここぞとばかりに必至になってメモを取ってます。き、緊張するなあ…………。

お、ミラルダが話をしてくれてますが、相手の人達は驚いてます。まあね、人語を理解してる古龍なんてめったに居ないでしょうし、文字まで書けると知ったらどうなるんでしょう。なんか面白そう♪ん!?ミラルダが話がついたのか、おいでおいでしてます。ゆっくり下降して行きましょうか、ホバリングしながら広場のミラルダのいる後ろ側に降り立ちます。翼をたたみ、犬のふせの状態で腰をおろしました。相手の方々が、寄ってきます。挨拶はしておいた方がいいよねやっぱり。私は頭を下げて、挨拶しました。

「初めましてニャー!人間の言葉が分かるニャか?」

なっ!このアイルーさん竜語が話せるんですか!?凄いじゃないですか!ゲームでそんなアイルーが居たら即、雇ってるな絶対。(こちらこそ初めまして。凄いですね、竜語が話せるんですか?)

「ニャア、照れるニャ。前に白龍に会った時からニャ。」

え、白龍ってあの…………祖龍ミラルーツ!?マジか!リアルで会ってるなんて羨ましい……。私も会わせてもらえないかな?話が分かってくれそうな龍さんですよ。

(凄すぎですよ。奇跡でしょ普通。)

「ニヤアア、そんなニヤ事ないニヤ♪♪」

照れて体をよじっています。可愛い。

「え、なに照れてるの白羅さん。」

あら、ここにも綺麗な女性ハンターさんが居るんですね。い、いえ、ミラルダが私にとっては一番ですよ、勿論!!

「ニヤ、ラミアニヤ。このクシャルダオラさんニヤはマサトさんて言うニヤ。」

「へえ、マサトさんって言うんだ。よろしくね、マサトさん♪」

(よろしくお願いします、ラミアさん。)

突然地面に文字を書いたもんですから、白羅さんとラミアさんがそりやもうビックリ!!

マジマジと字を見つめています。かなりインパクトが強かったよううで。

「す、すごいニヤ……。」

「すごいね……。」

……あの……こっちも照れますね。そんなに綺麗な字でもないのにね。

(どうしたの?)

おおつ、セルレ……ギオス!?ですよね?なんだろうちよつと雰囲気が違う気がします。仙異種とも違う感じですし……もしかして進化!?

「ニヤ、ラルク。こちらニヤはマサトさんて言うニヤ。ニヤンと人語がかけるニヤ!!」

(えっ!人語が!?まさか……。)

「ニヤってほら。」

そう言われてラルクさんも文字を見て驚いています。私って白龍並みに貴重だつて言います!?マジか?!

(そんな……。僕らの中でも人語が分かる龍は会ったことが無いよ。)

「そ、そう言われればそうニヤね。」

は、はは……。まあ、希少種ってことにしといてくださいな♪

(ここに居るモンスター達はみんなお仲間ですか?)

白羅さんが中心人物……いや、猫さんですけど。リーダーっぽいので聞いてみました。領いて返事をしてくれます。

(すごいメンバーですね。)

「みんなおいらと出会って、助け合って仲良くなったニヤ。ここに一緒に住むことになったニヤ。」

(へえ……。)

一同に介してるなんて初めてですよ、よくケンカとか起きないですね。

「そういえば、この後行く予定があるニヤか?」

(ええ、和の国に。筆頭リーダーさんからの依頼で百竜夜行が起るのを止めて欲しいとか。それを手伝って欲しいと言われて向かってる所です。)

「ニヤ!? アルザート様ニヤか?」

ほうっ、知ってるんですね。どんだけ顔が広いんでしょこの猫さん、一体何者!?

(彼を知ってるんですか?)

「長い付き合いニヤ。おいらもお世話になってるニヤ。」

「白羅さん、私にも紹介してくださいな。」

え、あ、ユクモ村の村長さんですよ。綺麗な着物で美人さんなので分かりましたけど。

「ニヤ、村長さんニヤ。マサトさんと言うニヤ。人語が分かって文字が書けるニヤ。」

「まあ! そうなんですの!」

「これを見てニヤ。」

さつき地面に書いた文字を見て村長さんもビックリ。

「ま、まあまあまあ、先ほどミラルダさんからお話は聞きましたわ。本当に会話なさんですね。」

なるほど、彼女から聞いてましたか。

「それで、必要な物を揃えたいので少しの間滞在する事を許可願いたいのですが?」

ミラルダが戻ってきました。ひと通り話してきたようです。

「ええ、分かりましたわ。白羅さんはどうです?」

「ニヤ、おいらは大歓迎ニヤ!!」

「なら、決まりです。マサトさんには広場の方で待機してもらいますが、ミラルダさんはその間準備してもらいましょう。それでいいですか?」

「ありがとうございます!」

（ありがとう、感謝します。）

「じゃあ、案内するニヤ。」

私は白羅さんの後について広場の方へ。ミラルダさんはラミアさんや同じ武器を装備しているニヤンターさん2匹と共に村の中へと消えて行きました。

で、さつきから研究員さん達の全員の視線が痛い……。そんなに貴重なんですかね私……。そうなの!?

まあ、会話が出来て話し合えるクシヤルダオラ……。いないよね、普通はね。研究員さん達の緊張感が半端ない!

一句たりとも見逃さんと躍起です、凄い観察魂……。

広場の中に入ると、います、いますモンスター達が。みんな挨拶してくれるので、私も返事を返します。穏やかそうで良かった、それではないとここにはいられませんよね。

「みんなニヤ、紹介するニヤ!マサトさんと言うニヤ!」

（初めまして。マサトです。）

（よろしく。）

（よろしくね!）

（よろしく!どこで見つけたんだ彼女?、手が……。いや、脚が早いな。……って、食いつくとこそそこ!?!モンスターも意外とお茶目なんだな、恋話もするんですか?まるつきりない訳ではないんですけど。）

（これだけですか?）

私は他にも居るのかと尋ねていました。しかし、白羅さんを含めモンスター達もうつつ向いてしまいました。え、なんかまずい事でも聞



いたかな?でも、そうすると他にも居るといふ事か……。

「そうニヤ。黒炎王と金火竜、その子供2匹も居たニヤ……。」

(え、居たって……!?)

どゆこと?ここからいなくなつたつて事!?なんで?でも、みんな納得した感じやなさそうですね。急に居なくなつちやつた、そうなんですか?なんてこつたい!

「今はその子竜の焰羅が居るだけニヤ。これから、準備して新大陸に連れ戻しに行く予定ニヤ。」

(新大陸ですか!?)

「そうニヤ、新大陸に飛んで行つたと連絡があつたニヤ。放つておけないニヤ。」

(そうなんですか、依頼が無ければ一緒に同行出来るのですが……。)

「い、いや、大丈夫ニヤ。今回はおいら達にラルク達も一緒に行くニヤ。必ず連れて戻るつもりニヤ。」

「あら、私を置いてかないでくださいな。」

「ニヤ!?村長さんニヤ……。」

「言つたでしょう、私も行きますと。それに今回は移動するための秘密兵器!?を用意してるんですから。私を仲間外れにすると大変ですわよ……。」

「ご、ごめんなさいニヤ!そんなつもりじゃなかつたニヤ!おいらが守るニヤから一緒に行きましょうニヤ。」

「その言葉、しかと覚えておきますよ。」

「ニヤ、ハハハよろしくですニヤ……。」

あらら、村長さんには頭が上がらないようですね。でも、優しい猫さんですからみんなを守る事でしょう。なんて私が威張れたことじゃありませんが。でも羨ましいです、団結力があつてみんながそれぞれ思い合つてる……良いですよね。

私が白羅さん達と話している間、ミラルダさん達は道具屋、武器屋で必要な物を揃えてました。

「ねえ、ミラルダさんはどうしてマサトさんを好きになつたの?」

「えっ!?あ、その……クエストで雪山に入つてるときに、仲間とはぐれ

ちやつてホツトドリンクも無くなっていた時に、偶然彼が居たの。飛来してきて、目の前に降り立った時は体が震えて動けなかった……ここで一巻の終わりだと震えながら覚悟したわ。でも彼は違つてた……啞えて来た物を目の前に落としてくれたのは、ホツトドリンク3本……。驚いたけど、逆に嬉しかった。モンスターにも優しい生き物が居るんだつて……。あ、勿論草食モンスターとかは優しい動物もいるけど、大型モンスターでしかも古龍でもそんな優しい龍がいるなんて……つて一目惚れしちゃつた♪♪」

顔を真っ赤にしてうつむいちゃつてます。可愛いんですよねこれが、彼女と一緒に居られるつて……。良い。

聞いてたラミアさんも照れてます。お惚気を聞かされてつられてます。あら、傍で聞いてたニヤンターさんも両前足でほつぺを押さえながら照れてます。

「ニヤア！良いニヤアつ！あたかも白羅とそんニヤ風に出会つたらニヤア……♪♪」

「あたしもそうだなあ……。」

「俺もかなあ……。」

「灯羅が何でニヤ!？」

「そうね、どうして!？」

「それは内緒ニヤ。」

「おいっ！」

「クスクスクス……仲が良いんですね。」

「どこがつ！」

仲が良いのか悪いのか……でも、喧嘩する程仲がいいつて言いますしね。ミラルダさんも楽しそうでした。

で、忙しいであろう時に夕食に誘つてくれて皆さんでいただきました。ミラルダさんの巨大こんがり肉2つ同じ焼きは、周りから大絶賛。拍手の嵐。村長さんがその焼肉器に執着して設計図が欲しいと懇願されて、ミラルダが見せてました。後で量産する気でしょうか……。

私も、デインバルドの“焰”や、ガムートの“蓬”、焰羅君や、バ

ルフアルク、タマミツネ等々と話をしてお互いに準備万端で場所は違えど気を付けて行こうと話し合いました。勿論、白羅さんとの出会いや私とミラルダさんの出会いも話しましたけどね。みんな私とミラルダさんのなれそめに注目してましたが。かなり照れました。

その日は夜遅くまで楽しく話し合い……月もそろそろ眠りにつく頃、全員ご就寝……みんないい笑顔でありました。

次の日はモンスター以外、皆さん二日酔い……ま、あれだけ勢いで飲んでりやあね。朝日が黄色く見えるって言われてませんか？目をこすり渋々と起きれば太陽が煌々と。ちよつと、私まで黄色く見えるってどゆこと!?一応古龍なんですけど。誰か、目薬ください……、ってそんな大きなモンスター用の目薬なんて無いか……。

村長さんに促され全員で周りをお片付け……。私も手伝いましたが……、それを見て村長さん大喜び。

「羨ましいですわ。是非、側近として雇いたいですわ！ダメかしら!」

あ、いや、ちよつと……。まだ、目的も果たしてないですし。

「すみません。私達はまだ旅の途中ですので……。」

「ええ。今すぐには言いませんわ。こちらに戻ってきた時で。」

いや、随分気に入られたモンです。有り難いお話しですけどね。まだまだ色んな所を巡りたいので、返事は先伸ばしで。

よし、ミラルダは準備出来たかな？

(ミラルダ、準備は良いかい?)

私が文字を書くのと、彼女も領き返してくれました。

「ええ、いいわ。出発しましょうか。」

私も領いて、彼女を背中に乗せます。

「私達は一足先に出立します！お世話になりました！ありがとうございます！  
ございますー！」

(お二人にこれを……。)

私はそれぞれに鱗を一枚ずつ渡しました。白羅さんと村長さんが目を丸くして驚いています。

「(、これを……良いニヤか!?)」

「そうですね、私にも!」

(後ラミアさんにも。)

と、更にもう1枚。私いい加減に裸にされそう……。いえ、変な想像は辞めましょ。

(お近づきの印に。それと、旅の無事を祈って。)

「それはお互い様ニャ♪」

私と白羅さんは握手を交わしました。気持ちを確かめ合うかのように。

「それじゃあ、また！」

「気を付けてニャ〜!!」

(白羅さんやラルク君達も無事を祈ってます！)

(ありがとう！)

「ありがとうニャ〜！」

と、私達はホバリングして上昇し、和の国に向かって飛翔したのです。見えなくなるまで、手を振ってくれていたようで良い仲間に出会えた私達は意気揚々と向かいました。このあとの事は皆さんご存知の通り……………。

あの……これって解決ですか!?

いや、皆さんモンハンライズのし過ぎでお疲れじゃありませんか? 《皇 雅人》「すめらぎ まさと」こと、マサトです。普通のおっさんがモンハンの世界に転生して……クシャルダオラに……。何故かそこから彼女が出来ちゃった……今でも信じられないんですけど。でも、色々とありまして今は彼女と幸せに暮らしたいと思ってるんです。

今私達は、私が負傷しているので、回復するまで、和の国に滞在させてもらってます。

その間は来訪が多いのなんの。沙耶ちゃん亜紀ちゃん、将軍様、

アミラ様、サクヤ様、村人さん達や城下町の人々……。なんつう凄い歓迎……。良いんでしょうか私……。嬉しいですけど。

本当にお役にたつてないですよ、マガドを止めたと言っても被害はあつた訳だし。最小限に抑える為に頑張っただけですし。本当にいい人達ですね……。

「ねえマサト?」

(なに? ミラルダ。)

「この依頼が終わったら次は何処に行こうか?」

(うーん、そう言えば考えてなかったねえ。温泉もなかなか良いし。)

「そうねえ…一緒に入れるしね♪」

きやあーだ、ダメ。想像しただけで鼻血が……。いや、出ないかな? 古龍ですから。その照れてるところにこんな発言が……。

「ねえ、新大陸に行ってみない?」

(は、はい!? 新大陸う!!)

ミラルダから爆弾発言が飛び出しました!

新大陸と来ましたが、確かに他のフィールドじゃモンスターに出会う確率も高いでしょうし。かといって、新大陸には居ないとは限らない。まだ会った事のないモンスターが沢山いるかも知れませ

ん。

そう言えばここに来る前にユクモ村で出会った猫さん達やモンスター  
の面々は無事に新大陸に向かったのかな？

黒炎王や金火竜達を探しに行くと言ってましたね。

(あの時の猫さん達や村長さん達は無事に新大陸に着いたかな?)

「あ、そうだね。先に行つてると思うけど、あの強力な面々だし無事に  
着いてるわよ。ただ探し人……いや、モンスターと出会えたかは分か  
らないけど。」

(そうだね。そうか、もしかするとまた会えるかもしれないという事  
だね。)

「その可能性はあるわね、やっぱり新大陸に行つてみる?」

(そうしようか、楽しみが一つ増えたよ。)

「フフ……。」

いや、また出会う事でしょう。あの面々も違った意味で目立つ存在  
ですから。

「ねえ、あたしを差し置いて何話してるの?」

うわっ!びっくりした!天羅さんですか。

「あなた達が、何処に行こうとついていくからね。諦めないんだか  
ら。」

は、ははは……、参ったなこりや。

「あの……。」

おお、アミラさんです、どうしたんですよ?巫女さん姉妹の  
妹さんですが、何かありましたかね!?

(な、なにか?……)

「わ、私も一緒にお連れ下さいますか?」

今………なんと  
………!?

「え、え、え、あ、あの……何を……!?!」

私とミラルダは気が動転してます!な、なにを言ってるん  
でしょうかアミラさん!?

「は、はい。私も一緒に行きたくて……その……私も……マサト



「ええっ!!」

私もミラルダも超ビックリ!!いい、いい、一緒につて……や、ヤバイ……いくら古龍でも血圧が上昇していくのが分かる……。複雑な気分です……。(涙)

「おおっ!マサト殿、涙を流すほど嬉しいのだな。良かったぞ!これはめでたい!」

って勘違いしてるし!都合のいいように取ってませんかそれ!はあつ、参りましたね。片や引っ付いて来ると言うし、片や嫁に出そうとまでするし、どんだけ信用されちゃったの私。そんなにモテる程いい男でも何でもないただのそこらへんに居るようなオツサンですからね、今は古龍なんでこの顔ですけど。好かれてしまう意味が分からない。

「ね、マサト……♪♪」

(なに?ミラルダ♪♪)

「私はあなたが好き♪♪でも、他の女性からも好かれるあなたも好き♪♪だって自慢できるじゃない、そのいい人をあたしが……ね……♪♪」

(ミ、ミラルダ……♪♪)

こんな、こんな、心の広い女性なんて居ますかね。絶対やきもちでしょ普通、プイつとされるかビンタに会うか……。悲劇が待っている……みたいな……。ミラルダく好きだくく♪

「ば、バカ、もう……♪♪」

あ、あら、心が漏れた!?今の聞かれちゃった?いやだ照れるくく!!「ね、一緒に行かない?勿論大変な事も沢山あると思うけど、いざとなったらあなたが居るし、ね♪」

(分かったよ、そうしよう。でも私が居るなんて買い被り過ぎだよ、ほとんど何も出来てないし達成もしてないんだよ。)

「いいの……。あたしはあなたと一緒に分かち合えればそれでいい。」(そうか……。ありがとう。)

ホントに出来た彼女です。私は彼女を幸せにしてあげたい、どんな境遇であろうと……。



(まずは、一緒に旅をしましょう。その覚悟はいいですか?)

私が地面に文字を書くと、アミラさんも私達を見て頷きました。その顔に決意が滲んでます、本気の様なので私達も頷き返します。

するとアミラさんの顔が綻びます。彼女の笑顔も可愛い……ゴホツ。

と、そんな訳で仲間が増えました。後は私が完治すれば……そう思っていたのですが、そうすんなりとはさせてはくれず……。

「しよ、將軍様くっ!!」

慌てた様子で、兵士が現れました。

「何があつた!?!」

「はっ!こちらに4頭のモンスターが向かっているとの報告がっ!」

「な、なんとっ!残党か!」

あらら、困りましたね。まだ翼は完治してませんし、かといって放置する訳にもいかない。ハンターさん達だけでは止められないでしょう。一体どうすれば……。対処方法を考えていたその時です!

地面の一部に大きな影が浮かび上がりました!上を向こうとした時、ズシンツ!と地面に着地する物が……。

目の前に現れたのは、翼は無く、ごつい4本の四肢に右前脚だけ赤みを帯びてます。頭から背中、胸、お尻付近まで長く白い体毛に覆われ、鬼のお面をつけたような顔のモンスターが現れました。

「むっ、あれは雪鬼獣”ゴシヤハギ”……なんで奴が……。」

え、知ってるんですか?さすがは將軍様、ホントに物知り♪♪でも、まずいですね。私も起き上がって身構えます。ぐっ、まだ片方の翼の痛みがあるか……そうも言つてられる状態じゃないし、堪えながらも突然現れたモンスターを睨みます。

(お前か、人間どもの味方をするモンスターってのは。)

(だとしたら?)

(ふんっ、アイツらと違って人間を滅ぼすなんてには興味が無い。)  
(なら、私に何の用だ?)

(なに、俺は強い奴が好きでね。タイムマン勝負がしたいと思って来た。)

「ちよつと待つて！彼はまだ怪我が完治してないのよ。」

(なんだ、お前。俺たちの言葉が分かるのか!?)

驚くのも当然でしょうね、まして私の血が混ざっていると知ったら更にひっくり返る事でしょう。

(そうだ、私は彼女と一緒に旅をしている。)

(ほう……。なら、俺が勝ったらその女を貰おうか。)

(なっ……。)

なんて奴だ、ミラルダを景品扱いですか。そこは許せませんね最愛の人をそんな風に扱われるのは！

(どうだ、受けるか?)

「ちよつと、あたしは景品じゃ……。」

(受けよう!)

「えっ！マサトっ!」

彼女が驚いて私の顔を覗き込みます。とても不安そうな顔……。でも、いくらおっさんでも彼女は譲れません！何があっても……。

(ミラルダ……♪♪)

「な、なに!?!」

(愛してるよ♪♪)

「え、え、なんで今……。」

(下がって！アミラさんや天羅さんと一緒に!)

私は竜気を全身に纏います。それと同時に翼に巻いていた包帯がちぎれてバラバラになります。臨戦態勢です！

「ちよちよつ……。」

ミラルダが私に近寄ろうとした時、腕を掴む者がいました。

「え、あ、アミラさんっ!」

彼女は首を横に振って、近づくのを止めます。

「はつきりとは分かりませんが、彼が少なからず本気になっています。」

先ほどのあなたの言葉を聞いていて、あなたを掛けた戦いの様ですね。なら、彼を信じてあげてください。彼も信じて欲しいと願っているはずですから。」

「アミラさん……。」

しばらくうつ向いてましたが、大きく頷きました。そして後方に下がります。

(ふんっ、俺に勝てるか?)

(さあね、でも負ける気がしない。)

(はっ、それは俺を負かす事が出来たらの話だなっ!)

相手がいきなり地面に両前足を突っ込み、地面を真上に掴み上げます!すると、その方向に地面が裂けて盛り上がり私に向かって来ました!私は片前脚をダイヤコートで硬度を上げ、上から一気に地面に突き刺します!

盛り上がって来た地面が突き刺した地面の所で止まります。良かったホバリングで避けていたら彼女達に被害が及びます、それは避けたい……。

(ほう……やるな……なら、これはどうかな?)

ゴシャハギは自身の右腕にブレスを吹き付け氷の刃を作りだしました。見るからに切れ味良さそう……。

私も負けじと口元から両刃のダイヤのクナイを造ります。

(お前もそんな事が出来るのか。)

(そうだね、たまたまだけどね。)

(そりゃ、どっちの刃が勝つか楽しみだなっ!)

右腕を振り上げて私に切りかかってきました!私もクナイの両刃で迎え撃ちます!刃と刃がぶつかり合って火花が散ります!そのままつばぜり合いに!力比べです!私も力の限り押し出そうとしますが、相手もやはり強い!その場からお互いに一步も譲りません。

(やるな……なら、これならどうだっ!)

ゴシャハギが私の刃を弾き、後ろにジャンプして間合いを取り右腕を横から前に突き出し、氷の刃をブーメランのように投げつけてきました!マジかつ!そんな事まで出来るのか……。ホバリングで……

ダメだ後ろに彼女達が居る……いくらハンターだと言ってもまともに喰らえば大変でしょう、そんな訳にはいかない……竜巻で……くっ翼の付け根の痛みが……いや、やらなきややられるっ！守って見せるっ彼女をっ！

（おおおおおおおっつ!!）

私は翼を両側に目一杯広げ、一気に前に突き出します!!竜巻が2本その場から立ち上り、氷の刃に向かっていきます!

（ふんっ、その程度の竜巻で俺の刃が止められるとでも思ったか!）

（そうだな、ただの竜巻ならなっ!）

（なんだとっ!）

そうです、以前シャガラク戦の時に放った無数の小さなダイヤの矢尻が混ざった竜巻……その竜巻で対抗したんです。竜巻を断ち切って通過しようとした氷の刃は無数のダイヤの矢尻に貫かれそこで粉々になって崩れ落ちていました。さすがにゴシャハギも驚いたようです。

（ただの竜巻じゃないのか!）

進化する前ならただの竜巻だったでしょうが、今は違います。使える武器はしっかりと使わせてもらう、そうでなきや彼には勝てない……。

（ならもう一度お前を叩き切るだけだっ!）

ゴシャハギが再度右腕にブレスを吹き付け、氷の刃を作り出して数メートルジャンプし、刃を振り下ろしてきました!

（再度押し返すっ!!）

（やれるもんならやってみろっ!）

私は両刃のクナイを咥えたまま一気に飛び上がって上昇します!

「マサトっ!!」

鈍い音と共に刃同士がぶつかり、再度火花が飛び散ります!

（らあああああっ!!）

（おおおおおおおっ!!）

材質の硬さ……で押し切れると思っていた私は驚きます!両方の刃にひびが入って亀裂が走り、同時に砕け散ったのです!お互いす

り抜けるように後ろを向いて地面に着地していました。私も驚きです、油断があつたという事でしょう。オリハルコンという材質でもあれば話は別でしょうが。

(は、はは、はっはっは、わあっはっはっはっは!!)

な、なんだ、どうしたんでしよう!?急にゴシヤハギが笑い出しました。気が触れたんでしようか?

(やめだ!やめだっ!この戦いは引き分けだっ!)

(どういう事だ!)

(どうもこうも引き分けだと言つたんだ。)

突然なにを言い出すんでしょこの人、じゃなかったモンスターは。

(引き分けだから女はお前のものだ、心配するな。初めからそんなつもりも無かつたしな。)

(じゃ、どうして……。)

(お前と本気で戦いたくてな。手荒だったが俺にはそれしか思いつかなかつた。)

なんとまあ、はた迷惑なモンスターでしょ。でも、悪いモンスターじゃなさそう。強面ですけどね、はい、人の事は言えません。一先ずはミラルダを守ることが出来た……。ははっ緊張が切れたのか、翼の付け根が痛み出しました。ちよつと体勢が崩れます。

「マサトっ!!」

ミラルダが傍に来ました。私に寄り添って付け根を撫でてくれます。

「馬鹿ツ無理するからっ……。」

彼女が顔を私の身体に密着させていました。綺麗な雫が落ちてきます……。私は前脚で彼女を抱きかかえました。見つめたまま私は舌で彼女に口づけします……。彼女も私の事を求めてきました。やっぱり私には彼女が必要です、今までも……。そしてこれからも……。

「まったく、羨ましいねえ、でもあたし達も負けてられないね♪」

と後ろでアミラさんに囁く天羅さん、彼女達も守ってあげなくては……。

(俺はもう行くぞ！)

(え、他の仲間は!?)

(さあ、知らん。俺は案内をしてもらっただけだしな。)

ええっ！それまじやないですか！国が危ないしっ！

(なっなんてことだ〜っ!!)

は?!他の3頭が慌ててこちらに戻ってきました。

(なんだ、どうした!?!マガドが居るんじゃないのか!?)

(い、居ないどころか……と、討伐されていた……。)

あ、もしかして私と戦った事を知らない!?

(済まないと言うか……。あの後、マガドが暴れ出して城下町が危なかったから私が倒した。)

(…(なあにいいいっ!!))

そりや、驚きますよねミラボレアスならまだしも私に倒されたんですから。

(くっくっくっ、はあっはっはー!)

(何が可笑しいっゴシヤハギ!!)

(そりや、マガドじゃ無理だ……。何せ怪我が治りきつてないにも関わらず俺と互角なんだぞ。全快なら俺も倒されてただろうな。)

い、いや、それは買い被り過ぎです。一杯一杯でしたからね、次に戦っても勝てるかどうか……。

(な、ゴシヤハギが勝てないだと……。)

(そうだ、ここは諦めて引き下がった方が良いんじゃないやねえか?)

(む、無念だ……。撤収しよう……。)

(ヨツミワドウ……。)

トボトボと3頭は撤収していきます。ゴシヤハギを除いて……と、そのゴシヤハギが近づいて来ました。

(よう、色男。)

へ、今まで誰からもそんな風に言われた事はありません。逆に物凄く照れますね。

(また、こつちに来た時は俺の所にも来な。なに、喧嘩しようって訳じゃない。語り明かそうぜ、その時は彼女を正式に紹介してくれよ。)

またな。)

(その時には寄らせてもらおうよ。)

ゴシヤハギが右腕を上げて、去って行きました。あのまま戦い続けていたら……どうなっていたか分かりません。こんな考えのモンスターも居るんだと改めて勉強になった次第です。ははは、でもうちよつとここに居なきやですね、付け根の痛みがちよつと強くなっちゃった。参ったな……。皆さんご厄介になります……。もうしばらく居させてください。つてそう言えばナズツちゃんはどこに行っただらろ!?

(ナ……イ……シヨ……ダ……ヨ……♪)

……………。

古龍と神々と……。

いやはや、何かと事が起こっている私、皇 雅人へすめらぎ まさと《ことマサトです。

古龍に転生し、直ぐに彼女が出来、挙げ句に二人目、三人目と告白されて感動の嵐なんです。

今現在、和の国に滞在しております、翼の療養中でありま

す。  
ゴシヤハギさんとも力比べをしました、流石なかなか強  
い！

あ、いや、何しに養生しているのか分かりませんが……。

引き寄せる物があるんでしょうか!?そういう運命だつて言  
います!?良いことも悪いこともごっちゃですけど……。まあ、今回は  
大事にならずに済んだので良かったですね。これ以上は国が  
傾いてしまうので、私もそろそろ、和の国を出なければいけないと  
思ってます。大分翼の付け根も回復しましてね、飛翔出来るくらいは  
動けるようになったんですよ。竜巻を起こすにはちよつとまだ不安  
がありますけどね、ただあんまり長居し過ぎるとやはり強固なモンズ  
ターを呼んでしまいかねないので、一旦引き時なのかなと思つた訳で  
す。あまりにも色々あり過ぎて、でもミラルダとの繋がりを深める事  
が出来たのは良かった、勿論天羅さんやアミラさんもですけど……オ  
ホンツ。

それで、そろそろ出立の準備をしようかと3人と話し、3人は城下  
町へと出掛けて行きました。良かった、仲が良さそうです、私の可愛  
い人達……。

それを見送った、そのすぐ後でした……。

……………

ん!?あれは……。森林の側に居るのは、村の子供で将来有  
望株の沙耶ちゃんと亜紀ちゃん！愉しそうに遊んでいます。オジサン  
もちよつと混ざろうかな?立ち上がり、二人の居る方へと歩いて行き  
ました。すると、二人はこつちを見てニコツと微笑み森の中へと走り



出しました。ちょ、ちょっと待って！あんまり奥に行っちゃいけない！って聞こえる訳がないんですけど。困った、でも万が一の事があつたら………。ま、まずは追い掛けよう。二人を確保してからだ！そう決めて、二人の後を追って行きました。私の方が方向音痴だと言うことを忘れて……。

いや、買い物から戻った3人は大騒ぎ!!って言っても私は子供達を追い掛けていて、そんなことになっているとは露知らず……。

「マ、マサト！何処っ！何処に居るのっ！」

「マサト様〜！居ましたらお返事してください〜！」

「そうだぞ〜！あたしを嫁にしないで居なくなったら損するぞ〜〜！」

「っらっ！」

なんつう事を。でもちょっと嬉しかったり♪……………ウホッ。

「ど、何処に行っちゃったんだろう？今までなら、あたしの帰りを待ってから動いていたのに……………」

さすがその通り、もし一人で行動するなら事前に話しておきますし。

異常と気付けるのはさすがミラルダ！と思う訳で、しかし当の私は全く気付いてないわけです。

「どうしたの!?!」

え…、そこに現れたのは本物の沙耶ちゃんと亜紀ちゃん!?!マジで?じゃ、今私が追い掛けているのって……………と言っても、くだいようですが、当の私は全く気付いてないんですよ。

「マ、マサトさんが居ないの。あなた達見なかった?」

「え、そうなの!?!だってさっき、お姉ちゃん達を追って森の中へ行つたから……………」

「何ですって!?!」

「それが本当ならただ事ではありませんね。」

「アミラさん、何か知ってるの?」

「何となくは…でもまさか……………」

アミラさんも何かを思い出したようで、ミラルダの顔を改めて見つめてました。

「まずは、お姉さまに会いましょう。」

「え、サクヤさんに!？」

「はい、お姉さまならこの事象の事を何か知ってるかもしれませんが。まずは、お姉さまの元に急ぎましょう。」

3人は頷きあつて、サクヤさんの元に走り出すのでした……。

しかし、私が何かに巻き込まれてる!? 事件なんでしょうけど、私が気付くのは、もうしばらく後の事……。

……………

と、子供達を追い掛けてますけどいや、ちょよ、ちょよと! 追いつけないなんて、2人共早すぎでしょ! 普通なら、異常に気付いたでしょうけど本人達と思いついていたので、疑わなかったんです。そして森林や岩場、川や竹林等を抜けて行きます。私も何故か2人にか目に入つてなく、私が急ぎ早に抜けて行くのを、周りのモンスター達も見えていた事でしょう。でも私にはそんな事はお構い無しに、子供達を追い掛けていたんです。

やがて、子供達が立ち止まりました。やっと追い付いた! っで、ん!? なんだここ、初めて来た場所だな。あつと、彼女達は……あれ? 居なくなってる……。おいおい勘弁してね、ここまで来て見失うってシヨック……オジサンにどうすれって言うんでしょ。

でも、なんでしようこの場所。かなり高い岩山に囲まれていて、あ、あんな上に社らしき建物がある。かなり年期が入った建物ですが……いったいここ何処!?

と、突然空に分厚い雲の渦が現れ、中心から飛翔して来る物が見えますが自在に空中を泳ぐかの様に飛翔しています。お腹の部分でしようか? 大きく膨らんで、けして大きくはない後ろ足で、お腹を支えるようにしています。え、もう1頭同じ様な姿のモンスターが出てきました! そちらはお腹は膨らんでないようですが……。

で、私の目の前に降りて来て空中で、逆さ!?!の状態で静止します、2頭ともです。

(あの……あなた方は?)

(我ら是对なる者……)

(対なる者……)

(我は風なり……)

(我は雷なり……)

(我ら是对なる者……)

風…雷…なんか何処かで……あ、日本古来からの風神と雷神!?!て事かな?まさか古龍なんて……。

「マ、マサトツ!」

ん!?!ミラルダ!アミラさんに天羅さん、あら、カグヤさんに  
將軍様まで……。

(どうやってここが?)

「うん、カグヤさんと將軍様のお陰で来られたの!」

「アミラさんがそれに気付いたお陰だね。」

「いえ、私はそんな……。」

素敵な彼女達ですよ、こんな頼りないおっさん古龍でも、真剣に私を探してくれる……。目が痛い……いや、涙なんて流してないですよ、ゴミが入ったかな?

「やはり、この古龍様は……。」

「うむ、カグヤよ、お前の思っている通りだ。お腹の大きい方が

雷神龍ナルハタタヒメ、もう1頭の方が

風神龍イブシマキヒコ……。」

風神龍に雷神龍ですか、神と呼ばれる龍が居たなんて……。

で、なんでその龍が私を?

(お主に頼みがある……)

(頼み!?)

(そうだ、凍土にいる我らの古き知り合いにこれを渡して欲しいのだ……)

前肢を差し出して来ました、ての中には色違いの宝玉が2つ

……。

(これを?)

(そうだ、これを凍土に住んでいる古き友人に返して欲しいのだ……。)

(古き友人とは?)

(人間達はイウ、エルカーナと呼んでいる……。)

おお、初めて聞く名前ですね。凍土と言うことだから、新大陸!?!で間違いないのかな?

(彼が来なくなつて久しい……、なあ対よ。)

(そうですね、数百年は会つてはおりませんよ対よ。)

げ、マジですか? どんだけ長生きですか!?

(頼まれては貰えぬか?)

「お引き受けします!」

(な、ミラルダ……。)

「だつて大切なものだもの、それを私たちに託そうと言うんだから余程の事だと思う。それを私達で届けてあげようよ。思いのこもつた物だから……。」

(そうか……それもそうだね、どのみち新大陸に向かう予定だし預かろうか。)

私は2頭の古龍に向き直り、預かる事を伝えました。

(おおつ! 引き受けてくれるか! 対よ、やっと念願叶うぞ。)

(はい、対よ。この時をどれだけ待ちわびた事か……。)

ほう。その念願を叶えないと、罰が当たりそうですね、これは大事にしないと。

「いつぞやありがとうございます……。……。」

あら、カグヤさん何でお知合いですか?

(あの時の童か……。 久しいの。)

(見違えたの……。)

珍しくカグヤさん照れています。でも、いつぞやって以前に会った事がある?!?

「お姉さま、この龍様達を知っている?」

「ええ。幼少の頃に私のはぐれてしまった事があるでしょう？覚えてますか？」

「はい、あの時は城中大騒ぎで、私も心配になって飛び出しそうになったのを止められてました。」

「そうですね……心配を掛けましたね。ちょうどその時なのです。私はこの龍様達に助けられました。」

「そうなんですか、それは初めて聞きました。」

「そうですね、誰にも話した事は無かったので……。でも、何かの縁です。またお会いできた……。お話しましょう。」

全員がカグヤさんに注目ですよ。みんなその時の事を聞きたくてシンとしています。

「私は一人でお花を摘みに行った時です。いろんな綺麗なお花があつて、お花に気を取られてたんです。いつの間にか崖の傍に来ていました。そして、お花を摘もうとした時崖から足を滑らせ、落ちてしまつたんです……。」

「えっ!!」

「なっ、なんとっ!!」

アミラさんも將軍様も声を上げてしまいました。そりやそうですね、崖から落ちたなんて緊急事態ですよ。で、よく怪我が無くて……つて、まさか……。」

「その時、空中で私を受け止めてくれたのが雷神様でした……。」

「そ、そんな……。」

「ま、真かそれは……。」

「はい、傍には風神様もいました。その時は私も彼らの事はよく分かっておりますでした。」

おお、そうなんですか。優しい龍も居たんですね、まあ全部が攻撃性が強い性格のモンスターばかりじゃないでしょうけど。

「私も、その時は驚きでしたが、しばらく私と遊んでくれて城の近くまで送ってくれました。最後に摘もうとしたお花と一緒に……。」

成る程、そんなことがあつたんですか。こう言うのを貴重な体験で言うんですね。

「なので、風神様や雷神様は私の命の恩人なのです……。」

しばらく沈黙でした……。なんて話しかけてよいやら……。

(よい。昔の事ぞ、なあ対よ。)

(そうですね。再会できたのが何より、ねえ対よ。)

温厚な古龍様で良かった。戦っていたらどうなっていたか分かりません。でね、沙耶ちゃん達を捕まえないと大変なんですけど。

(沙耶ちゃん達を見なかったかい?)

「あ、ええ、居たわよ。城下町の側に。」

(へ!?うそっ!だって、2人で森の中に走って行って大変だと思って追いかけたのに!?)

え〴〵、それじゃ……まさか……と、皆の顔を見るとニコツとして頷いて来ました。みんな知ってた!?私だけが把握してなかったと………がくつ、私は誘いに乗っちゃったんですね。そうですか〴〵、でもよく他の大型モンスターに出会わなかったですね。え〴〵、暗示にかかっていたから居ても気付いてなかったって!?マジか……。

でもまあ、とりあえずは無事なのは確認できたので帰りましょうか。

(じゃあ、戻ります。これは大事にお預かりします。)

(よろしく頼む……。)

「では、これで……。」

(また、立ち寄るがよい。もてなそうぞ、なあ対よ。)

(そうですね対よ。気を付けて行くのですよ……。)

(ありがとうございます。)

「必ず届けます!」

さて、みんな背中に乗せてと。やっぱ5人はちよつと重いな、でも飛べない訳じゃない。

(しばし待たれよ!)

(えっ!?)

呼び止められて風神さま雷神様の方へ振り返ります。すると数m幅の黄色に輝くリングが向かって来ました!

(それをくぐると良いぞ。)

えっ、くぐる!?なんだと考えているうちに迫ってきました。みんな身を低くしてそのリングをくぐり抜けます。みんなは変化が無かったようですが、私だけはありません。翼の付け根の痛みが無くなっている！怖さもあるけど思いつきりホバリングしてみます！おおおっ!!一羽ばたきでここまで上昇出来た！完全回復かな、やった！

(ありがとうございます！助かりましたっ!!)

2頭の古龍たちは手を振っていました。私達も手を振りつつ、城下町へと戻ったのです……。

「龍さんが帰って来た〜っ!!」

おおっ！沙耶ちゃん達です。良かった無事で……え、心配されてたのは私の方ですか!?照れますねえ♪

「それでいつ頃、出立するんだ!」

將軍様……。いっぱいお世話になりましたね。

(はい、彼女達も準備が出来たようなので明日にでも。)

「そうか……。寂しくなるな……。だが、また戻ってこい!」

(ありがとうございます。)

「次に会う時は孫の顔が拝めると良いのう♪」

(ぶほっ！そこですかっ!)

「では、明日。」

手を上げて帰って行きました。スイマセンね、なんの役にも立っていないというのに……。

で、次の日……。町の人から城の人達、各村の人々も大勢集まってくれました。こんなに人から見送られるのって私にすると初めてです。見向きもされなかつたおっさんですから……。なんかすごく嬉しい……。

「みんな準備は良いわね?」

ミラルダ、天羅、アミラ、私とお互いの顔を見合って頷きます。

(よし、みんな乗って。)

順番に背中に乗っていきます。周りの人達に手を振ったり、声を掛

けたり……。

(では、出発します！お世話になりました!!)

私は翼を広げてホバリングします。人々が一齐に大きく手を振ってくれます。下に居る人々が小さくなるまで上昇して行きます。一気に地平線が覗ける様な高さになった所で飛翔を開始します……。

あれ？こっちなかな？いや、そっちなかな？待て待てあっちなかな？方向音痴だと言うことをすっかり忘れていた私……。

「ああっ！ごめんっ！こっち！」

ミラルダが気付いて指さししてくれました。

「え、あんた、意外と方向音痴なの!？」

「そうみたいよ♪」

「可愛い……♪♪」

ええ！私が、可愛い？いや……ハハハ……古龍の私をそう思ってくれるのは貴女達だけですよ……ありがとう♪では行きま  
すか！新大陸へ!!では……♪



いや、長いですね道のり……。

夜分……じゃなかった、日中!?!に失礼します。クシャルダオラ改め、ダイヤモンドダオラに転生しました皇 雅人《すめらぎ まさと》ことマサトです。人間時には普通のおっさんで、恋人のこの字もなく、サラリーマン生活をしていました。が、モンスターハンターというゲームにハマり……何がどうなったかその世界に転生するという相当の確率で事が起き、しかも古龍に転生するという……（特典かどうか分かりませんが!?!）事になってたわけです。

でね、更に驚いたのはモンスターを好きになる女性が居たという事！ありですか!?!あるんですね、そうですね。

私の事か、古龍としてかは分かりませんが好きになってくれた女性が居たんです……それも3人……。

最初の1人目はミラルダと言う女性ハンターで、銀髪のロングヘアでセルレギオスの装備の美人です。雪山で出会ってホットドリンク3本で気を惹いちゃった……私もビックリでしたけど。一番繋がりが強い女性です、いろんな事があって……私も好き♪♪2人目は天羅《あまら》さんと言うネルスキュラのチャージアックス持ちで、スパイオX装備の女性ハンターで、いきなり攻撃されましたけど、いきなり告白されちゃった……。驚きすぎて目が点になりました。告白される……恋人が出来る……あんまり嬉し過ぎて断る事も出来ず……今に至ってます。3人目はアミラさんと言う和の国での双子の姉妹の巫女さんでその妹さんです。惹かれるものがあつたんでしょうね、私は何もした気がありませんでした……。和の国を出るとなった時に告白され、お姉さんや將軍様迄超乗り気！一緒に旅をする事になったんです。

何が起こつたんでしようか私のモテ期……今でも信じられません。天変地異の前触れか、はたまた夢と消えるのか……。どっちも怖い……今更無くならないで……お願いします！

で、和の国から盛大に見送られ……3人と私1頭は新大陸へと目指して出発していました。

晴れ渡る空……下を見れば広大な海……時折ルドロスの群れや、ラギアクルスが軽快に泳いでる……う、うおっ！深い所に今チラツと見えたのは……ごめんなさい、私はゲーム上で戦っては居ないんですが動画で拝見していたナバルデウス……凄い……デカイ！いや私もそれなりに大きい方ですけど……それでも迫力が違いますね。いや、喧嘩しないようにしよつと。と、言っても喧嘩する意味が無いですけど。

あ、船ですね。この世界、海に行く船、砂地に行く船、空を  
行く船……、いろんな形で船がある。その目的や手段によってですが  
……。

多くの行商人やハンターさん達にとつては、貴重な移動手段。私は自身で飛べるので、使う時が来るかどうか……。

あ……あれ……調査船……ですよ、丸い気球船に大きな望遠鏡が設置してある……。

あ……、やっぱり早速気付いてこちらを見ながら何か叫んでいます。やれやれ、今回はどうしようか……、やっぱり気になるから寄って行こうかな。

さくて、急接近しますか。私は少し進路を変え、調査船に近付いて行きます。もう、近付くだけで大騒ぎ♪面白すぎてイタズラ心が出てしまう。調査船の側まで来たとき、望遠レンズの先端を掴んで私の右目を当てて中を覗き込むふりをします。すると、おじいさんがいや、学者さんかな!?が後ろに飛び退いてひっくり返ってましたw  
w　そこまで驚いてくれるとは、光栄ですね。イタズラがいがあります。

「私達はこれから新大陸に向かうところです！」

背中に乗っていたミラルダが話し掛けてました。ハンターが乗ってるなんて、ライダーでも思ってたのでしょうか、それとも!?!でも、3人も人が乗ってたら驚きますわな。

「お、お主たち、こ、古龍の背に乗っておるだど！信じられん、ライダーか!?!」

「いえ、違います。絆石もありませんし、お互いに理解し合つてこうし

ています。会話も出来ずすし。」

「なっ！会話が出るじゃとっ!？」

はい、出来ずす。驚くのは無理ありませんが、今更ですけどお話しましょうか。

(ミラルダ、その学者さんに話してその羽ペンのインクを借りてくれるかい?)

「え、ああ、分かったわ。すみません、そこにあるインクを貸していただけですか？」

ミラルダが指を指して学者のおじいさんが使っているペンのインクを使わせてもらう事に。一体上空で何やってんでしようね♪でも、急いだ旅じゃありませんから旅は道ずれ世は情け……。

「お、おお、構わんが。どうするんじゃ!？」

ミラルダにインクを持ってもらい、私が爪の先を瓶の中に入れてインクを付けます。申し訳ない、そのまま机に文字を書いて行きます。

(初めまして。討伐しないでくださいね。)

みんなして文字に興味深々。一番驚いたのは勿論学者さんと助手のお姉さん。早速ノートにメモってます、そこは学者魂と言うか、凄いです。

「人間の言葉を理解していて会話が出来る古龍など、ライダーの間でもそうは居らん。これは由々しき事じゃぞ。」

まあ、ギルドや龍歴院、国に知ればどうなるか……。少なくとも和の国は大丈夫かと思えます。

(和の国では、おかげで仲良くなれましたし、筆頭リーダーからの直々の依頼を達成出来たので、新大陸に行くことになりました。)

「な、なんと！筆頭リーダーの直の依頼じゃとっ!？」

「そうです。和の国の将軍様が彼と友人との事で、依頼を達成すれば私達の捕獲クエストは帳消しにしてくれるとも約束しました。」

うん、そうだねミラルダ。確かにその約束をして、将軍様がその報告をしてくれるとも言ってくれました。それが確かならば、晴れて新大陸に向かう気持ちが変わってきます。

「うむ、この話の様子じゃと信じがたいことではあるが、事実のよ

うじやの。筆頭リーダーの後ろ楯があるなら大丈夫じやろ。ならば気を付けて行くが良いぞ。」

おお、分かってもらえたようで何よりです。私の鱗を1枚あげましょうかね。私はホバリングしながら鱗を1枚抜き取り、学者のおじいさんに啞えたまま差し出します。するとまたまたビツクリ。「なっ、くれるというのか!?!」

私は頷いておじいさんに渡します。

「おお、おお、これは貴重な……本当に良いのか!?!」

なおも頷くと、鱗をしみじみと見つめてました。

「すまんの、遠慮なく頂くぞ。これは絶対わしの家宝にする。」

あら、ありがとうございます。家宝なんて……そんな……照れますね♪

(タノ……シ……ソウ……ダ……ネ……。)

うわっビツクリしたっ!!姿消したままで声を掛けないでちょうだい!おじいさんがノミほどに小さいんだから……。いつの間に来てたのか、すっかりお友達になっちゃったオオナズチことナズツちゃん。色々お世話になってますです。助けられての事も多々あって、ミラルダの特製巨大こんがり肉がお気に入りとの事。私もやめられませんが、お気に入りです。

徐々に私の横で姿を現したもんですから、学者さんと助手さん、周りのスタッフが大慌て!

「おーオオナズチじゃあっ!!あわわわわわ!」

「ま、待ってください!彼は友人です!いつも助けてもらってます!!」ミラルダが慌てて右往左往する学者さん達に呼びかけます。全員、ぴたっと足を止めて私達の方へ振り向きます。90度横に首を勢よく振り向いてきましたけど、むち打ち大丈夫!?

「な……なんじゃと……友人と言ったか!?!」

「そうです。ですから、危害は加えません。私達の仲間です♪」

ミラルダが微笑んで、喋るものですから学者さん達が驚きっぱなしです。

「そうですね、ミラルダさんにとっては命の恩人のようなものですも

のね。」

アミラさんその通りです。あの時、夜叉蜘蛛“シャガラク”からミラルダの身を守ってくれたのがナズツちゃんですから私のとつても命の恩人なんです。仲間って良いですよ♪

「これは凄いい事じゃ……。ギルドもそうじゃが、龍歴院が黙ってはおらんじやろう。うゝむ、報告すべきかどうか……。」

学者のおじいさんが顎に手を当てて悩んでしまいました。確かにね……。知れば、ハンターを大勢雇って私達は勿論ナズツちゃんごと捕獲せよ！なんてクエストが発令されかねませんね。でも、そこはおじいさんにお任せです。悩んだ顔をしながら私の方を見つめてきました。私はニコツと微笑んでお任せすると頷きました。

「よしっ……ここに居る全員この事は口外無用じゃ!!ここまで人間と密なモンスターはそうはおらんじやろう、貴重な存在じゃ。報告の義務は我らの務めではあるが……。それは人間に危険が及ばないために生息を調べるのであって、決して私利私欲の為ではない！じゃから今回の事はわしらが出しゃばる事ではない。被害があつた訳ではないからの、よいな！」

おおう、スタッフ全員が頷いてくれました。ありがとうございます、感謝します……。

「そう言う訳じゃ、無事に新大陸に着けることを願つとるぞ！」

「ありがとうございます！」

「おお、そう言えば古龍殿の名前はあるのかの？」

ああ、そうですね。なんだかんだで名乗るのを忘れてました。私はまた文字で挨拶します。

(マサトと言います。よろしくです。)

「マサト殿か……。しかと覚えておくぞい！」

私の爪とおじいさんの手であつちり握手。

その場で手を振って離脱します。ずっと手を振ってくれました。また、お会いしましょうね！

(シリ……。ア……。イガ……。オ……。オイ……。ネ……。)

(なんかね、仲良くなれるって嬉しいよ。)

(ソ…………ウ…………ダネ…………。)

ナズっちゃんだってそうです。一緒に並んで飛翔してるの  
だって、奇跡に近い事象なんだし仲が良いなんて事も、人間側にすれ  
ば目が点になりそうな信じられない話ですしね。

「ねえ、やっぱりあんたってただの古龍じゃないね、文字が書いて会  
話が出来て理解力があつてき。一体何者?!」

ははは、天羅さんも勘が鋭い。てか、人の言葉から文字まで  
書いて理解している古龍なんてそう滅多には居ませんよね。私が転  
生じゃなきゃ、この3人とも出会ってないわけですし。うくん、まだ  
話すのは先でしょうかね。お嫁さん候補の一人としては分かっ  
ていますが……まだミラルダほど親密になっている訳でもないですし、会  
話が出来ている訳でもないし。もう少し様子を見ますか、それからで  
も遅くはないでしょう。

「マサトさんは不思議な力を持っています。何か大きな……私達を  
守ってくれる何か……………」

あら、アミラさんそうですか?こんなおっさんです。何か力がある  
と言われても照れますね。クシャルダオラの力という事なら分か  
りますが……私自身がピンときません。

「そうだよね。何かあるよね。じゃなきゃあたし達がこんなに好  
きになるはずないじゃん♪」

え…………3人で頷き合ってる……。う…………嬉しい事を……あ、また竜  
の涙が…………。

(ウ…………ラヤ…………マ…………シイ…………ナ…………。)

(え、なんか言っただ!?)

(ナ…………ンデ…………モ…………ナイ…………。)

顔の表情には出ないのでナズっちゃんが心の声を漏らしていたの  
を分からずにいきました…………。

おお、突然ですが孤島?!の上を通過中です。確か海岸沿いで、岩が  
あつて砂浜になっている場所なので、エリア10でしょうか。

え、海の中を泳ぐ大きな生き物が見えます。背ビレだけが海上を  
右往左往してますね、まさかとは思いますが……居るのやっぱり。

魚竜種の一種ですか、飛び魚に2本の後ろ足が目立つ……体当たりや尻尾での叩き、ウォーターブレス、地面を泳ぎながら突進してくるガノトトスさん……あ、顔を出して上を向いています。こつちを見ている……。もしかして前に助けた竜ですか？おお、ヒレで合図してくれます！どうやらその様で……。

「あれ、この前助けた……!?!」

(そうらしいね。覚えててくれたみたいだよ。)

ミラルダも分かったようです。

「え、なに、ガノトトスとも友達なわけ!?!」

「ホントにマサトさんは不思議な何かを持っていますね。」

い、いや、そんな大層なものじゃないと思いますよ……。良く見てくれるのは嬉しいですけどね。

と、突然尾びれ以外全体を海上より出し、立ち上がるような体勢になります。な、何するんですよ!?!みんなで注目していると、その状態から後ろ向きに泳いで行くじゃありませんか!!イルカショーかつ!!マジか!そんな芸当が出来るぞ知ったら龍歴院大騒ぎでしょ!つてか、今上空から見るからそんなに大きく感じませんが、間近で見たら怖い気が……。近くに居なくて良かった、全員で冷や汗ものでした。でも、意外とお茶目な奴です。

(ありがとな〜〜!)

みんなで手を振ってあげると、ヒレを振って返事を返して来ました。また、こつちに帰ることがあったら会おうね!そのまま飛翔して、移動を開始します。

お、ここは古代林じゃないですか。しかも、広い草原地帯なのでエリア6かな!?あ、あんなどこにもまた見覚えのある……アハハ、相変わらず団体でマツカオ達に対抗して突進して追い掛けてます。逃げ遅れたマツカオは下敷きに……合掌。更にパワーアップしたのか、あのドスマツカオですら自慢の足蹴りを弾き返されて、吹っ飛ばされています!どんだけ強くなっちゃったのあなたたち!大型モンスターを吹っ飛ばすなんて、聞いてないしっ!

私のせいで、連帯感が強くなっちゃったんですか。そりゃ凄

いわ、生態系壊れないですよね!?

ま、あの親子が元気なので良しとしますか、アプトノスですけどね♪♪

あ〜、ドスマツカオが逃げてった……。マジか!? 団体攻撃恐るべし! 私でも勝てるかどうか……。いや、しませんけど。あ、気付いてくれたようで、親子どころか一緒にいる仲間と共にこつちを向きながら立ち上がってるじゃないですか! おく〜い! ひさしぶり〜! 元気だったかく〜い! ってあれ見たら確かに元気か。

「ねえマサト。あの親子、益々パワーアップしてない!?!」

(いやあ、連帯感半端ないと思うよミラルダ。)

「ね、あんた達どこまで顔広いの!?!」

いや、ハハハ照れますね。え、褒められてない!?! あ……。失礼しました。

「天羅さん、彼等は有名人なんですよ。いろんな意味で♪♪」

「そっか……。それはそれで大変そうだね。じゃあやっぱり修行しないと。」

「え、花嫁修業!?!」

「いや、こつちの。」

と、剣をかざしてますよ。そつちの修行だけで良いんですか!?! まずはですか、そのあとは!?!……。返事が反ってきません。違った意味で狙われてます私!?!

やれやれ、大陸がまだ見えて来ませんからまだ暫くは飛翔してないといけません……。たどり着けるんですよ!?! ね!?!

その私の心配をよそに、3人の美女達は愉しそうに会話に華を咲かせていました……。

これから新大陸で起こる出来事も知らずに……。



## 新大陸で出会った同じ境遇の物……。①

あの……こちらは皇 雅人《すめらぎ まさと》です。今、私は飛翔中で背中に3人の美女が乗っています。ミラルダとアマラさんと天羅さんと言います。実は私……って今更知っています!?!元は普通のサラリーマンをしていたおっさんで、モテた事など方に一つもなく、彼女のかの字も出なかった人間でした……。それが!モンスターハンターと言うゲームにハマリ……。そのゲームのし過ぎで、寝落ちして気付けば自身がモンハン世界に。しかもあるうことか、古龍種に転生するという。なんとクシャルダオラ……。マジですか!?!更に驚かされたのは、雪山で出会った女性ハンターに一目惚れされる……。後日、告白されて……。人生バラ色♪♪……。いえ、古龍ですけど。

彼女まで出来ちゃった次第……。更に和の国では2人の美女に告白されてウハウハ……。失礼しました。

でね、彼女と安息の地を求めて旅をしている所なのです。

数日前まで、和の国に滞在しておりまして、そこでの用事が終わり改めて場所を求めて出立したんです。これが長い距離でした。

色んなフィールドがあるなかで、彼女と話し合った結果新大陸……。になったんです。

で、その方角に向かって飛翔したのは良いんですけど、遠い!!なんでしようこの距離!私は渡り鳥じゃないんですから!……。古龍ですけど。

でもまあ、移動途中で調査船にご挨拶したり、以前に助けたモンスター達に再会出来たり、いろんな意味で深みのある旅になっている訳です。

でも流石に疲れる、各フィールドを通過したあとは、ほとんどが海の上空。時たま小さい島があると、小休止……。ありがたい……。

彼女達を気にしつつ、それを繰り返しながら移動していました。時折、貨物船でしょうか航行しているのを見つけては、ピースやVサインをして驚かしていました……。

「ねえ、あれって大きい島……いえ、大陸じゃない？」

おおっ！ やつと見えてきましたか新大陸。でも間違いないのかな？ 初にみるフィールドなのでちょっと不安。

でも、見たことがない生物が色々見えます。間違いはないか……。私はその中で、降りられそうな場所を探します。

そこは古代からの樹木でしょうか枯れた大樹に絡み合って新たな樹木が自然を育んでいます。水分もあることから、動物達も住みやすいでしょうね。

その少し開けた川の流れる場所を見つけ、そこに降り立ちました。ミラルダ、アミラ、天羅も、背中から地面に降りて背伸びびしてます。

(ようやく着いた感じかな？)

「そうね、初めてみる場所だから間違いなさそうよ。」

ここは自然が豊かですね。まあ、後で聞いた話だと古代樹の森と名づけられたんだとか。川の水も澄んでいて、私はごくごくと水分補給。3人もクーラードリンクを飲みます。小モンスターもいますし、この辺は開拓はされてないのかな？

ゲームをする前に転生したので詳しくないんですけど、ここに調査をしに派遣されていたハンターさん達がいたはず……。第一期団から第五期団まで……。でも拠点らしき物は見えないし。再度上空から探してみましようか。空からなら何かは見つかるでしょうし。

しかし、ここに来てまで運が悪いと言うか……。私たちの後ろから、凄まじい程の威圧感を放ってくる物が居たんです。

「なっ……!!」

「凄い殺気だね……初めて会うモンスターだね。」

(僕も初めてみる龍だな……)

その小柄な岩山に降り立った龍は大きく太い2本の角を持ち、胸や腹、翼の内側以外は尻尾まで全体に大小の棘が生えてました。

(お前達、何処から来た、何故ハンターと一緒に居る！)

はは、ほぼ同種から同じことを聞かれますね。

(一緒に旅の途中だが、何か?)

(ふんっ、一緒にか……。まあいい、済まんが俺の糧になってもらうぞ。)

(どういう意味かな?)

(知れたこと、お前を喰らって力を手に入れるのだ!)

ノーモーションで岩山から岩を蹴って低空飛行で突進してきます! 私もホバリングでその突進をやり過ぎそうとしますが、相手もそれを読んでいて尻尾を振り上げて私の脚に引っ掛けてきました。

(なっ!!)

私もバランスを崩して落下します!

「マサトっ!!」

(大丈夫だ! くっこのっ!)

相手のモンスターが身体を反転させて目の前に走り込み、左前脚を振り上げ、私めがけて爪を振り下ろしてきます!!

(とどめだっ!!)

「はああああ……鬼刃斬っ!!」

ミラルダっ!! 彼女が太刀で技を繰り出し、相手の爪の攻撃を受け流します! ナイス、ミラルダ!!

「おおおおおっ!!」

「アミラさんはその木の陰にっ!!」

「はいっ!!」

アミラさんが木の陰に隠れたことを確認すると、反対側から天羅さんっ! チャージアックスの剣と盾を組み合わせて大きなアックスに変形しながら身体を捻って回転させ、勢いよく上から振り下ろしてきます! ですが、間一髪のところを躲かれます! 天羅も舌打ちしながらも、剣と盾の状態に戻し、構えなおします。

(ちっ! 小賢しいハンター共がっ!!)

私上がり上がるのと同時に相手がミラルダに攻撃を変え体勢を低くして突進し角で突き飛ばしてました。

(ミラルダっ!! 大丈夫かっ!)

地面に転がる彼女に急いで傍によって確認します!

「大……丈夫……。なんて奴なの!？」

(お前!私を喰らうと言ってたな、どういう事だ!)

(ふんっ、古龍を喰らえばそれだけ力を得る事が出来るのさ。)

(それで私をか?)

(そうだ、まずはお前を喰らって力をつけ、あ奴を倒す!)

(あ奴だと!?)

(そうだ、ゾラ・マグダラオス……。あ奴も喰らって俺は更に強くなる……。)

マジか!?まだ他の古龍を喰らおうって言ってますか。

「狂ってる……………」

「こんな竜が居るんだ……………」

私もそう思いますよ、まだまだ私より強大で強力な古龍たちが居るというのに……………」

その古龍達をなめてかかっている……。なんか腹が立ってきました、他の龍を喰らって力を手に入れようなんて良い気がしませんね。

(ククツ、俺の血肉になるんだ光栄に思う事だな。)

(私も簡単に喰らわせてやるほど、お人好し……いや、龍じゃなくてねっ!)

(笑わせるっ!俺を止められるか!)

(止めて見せるさっ!)

相手は再度走り込んで前脚を振り上げて襲い掛かってきました!私は口を閉じて左右の口元だけを開けブレスを射出します!ダイヤモンドの両刃を創りそれを啜えて対抗します。

斜め下から刃を振り上げ相手の前脚と激突します!!

鈍い音と共に刃と爪がぶつかり合って力比べに……………」

(それで止めたつもりか?)

(なにっ!)

(おおおおおっ!!)

ぐっ力が増した!?お、押し返されるっ!!相手にそのまま振り下ろされこちらの刃が斜めの状態で、地面に突き刺さります!

(これで武器は使えまい!)

(し、しまった！)

が、その時です！走り込んで来る者が！

「はああああつ……!!」

彼女が私の刃と相手の脚を駆け上がり、ジャンプして太刀を振り下ろしたんです!!

「ガアアツ!!」(ガハアツツ!!)

首筋・胴体・脚と斬りつけられ、激痛と驚きでひっくり返ってました。

「マサトっ！大丈夫!?」

(ありがとうミラルダ！助かった！さすがは私の愛しい人!!)

「もうっ……バカ……♪♪」

あ、顔を赤くして可愛い……って、なにか言ってるこっちも照れますね♪

(グウウツ！舐めた真似をつ!!)

おお、スタミナある。さすがに古龍を食べようとするだけあつて強いですね。相手が起き上がってノーモーションで突進してこようとしたその時です！

「おおおお………!!」

「どうりやああああ………!!」

「??:…!!?グギヤアアツツ!!」

(?!?!)

「なっ!?!」

「だっ誰あれ!!」

な、なんと!!2人のハンターさんがっ！しかも1人は竜人族に見えます。もう1人は筋骨隆々の金髪のマッチョなハンターさん……。でも、その体さばきは2人とも場慣れした動きで……。ベテランさんです。隙が無い、横からの不意打ちも想定しての攻撃でしょう。竜人族のハンターさんはジャンプして、愛用の操虫棍を振り下ろし角を一本叩き折ってました。もう1人のマッチョの方は大剣で相手の腹部に溜め斬りで傷を負わせてました。なんつう人達……。相手のモンスターも再度ダウンしてもがいてます、凄……。

「あ、あの人達は……!?!」

私の記憶が正しければ第1期団の方たちかなと。今第5!?!第6!?!期団まで派遣されてるとか。

その金髪のダンディなマッチョなお方は大団長さん、竜人族のハンターさんで操虫棍使いの……名前は分かりませんがお二人ともかなりの手練れなのは分かります。だって、めっちゃ強い……。

ほう、分が悪いと思ったんでしようね。起き上がってホバリングを始めました。

(次は必ず……お前を喰らう!!)

そう言い残して飛び去って行きました。ひとまずは助かった。

「あ、あの……ありがとうございます。」

「良かったな、怪我は無いか?」

「はい、助かりました。今のモンスターは?」

「うむ、『滅尽龍』ネルギガンテだ。」

「ネルギガンテ!?!」

「そうだ、古龍を喰らう古龍と言われている。」

「そんなモンスターが……。」

私達はそんなモンスターも居るのだと改めて知らされました。まだまだお初のモンスターが生息している事も……。

「どうやらあんた達は遠征に来たハンター達とは違うようだな。」

「その様だ、クシャルダオラと共にするハンターは居ない。」

「一緒にいると言うことは、あんたもこの龍と会話が出来るのか?」

え、今なんて!?!あんたもって言いました!?!

「あ、はい、そうです。彼は文字も書けます。」

二人はお互いに頷きあっています。確認し合うように。

「あの……どうして驚かれないんですか?」

私も同意見です。先程から驚く所か動揺すらしていない、なんで!?!

「それなら、一緒に来てくれないか。我らの拠点『アステラ』に。」

「え、拠点ですか!?!」

「そうだ、そこで会わせたい者達もいる。俺はグラン、その大団長

をしている。」

「私はデュークだ、ヨロシク。」

「私はミラルダです。彼は…。」

(マサトと言います。)

私が文字を書いて挨拶すると、二人は感心していました。

「私はアミラと言います。」

「あたしは天羅《あまら》。」

「了解した、それじゃ一足先に拠点で待つ。気を付けて来てくれ。」  
二人が去った後、3人と1頭が頷き合って拠点へ向かう事にしました。

乗った事を確認すると、ホバリングを開始します。ある程度上空まで上昇して、飛翔します。あ、どっちだろ？私、空では方向音痴です。あ、良かった指を指してくれました。その方向ですか、了解です。私は、飛翔して拠点に向かって飛翔していました。このあと私達は運命的な出会いが待ち受けて居たんです……………。

## 番外編♪②くカリスマ美容師猫さんの憂鬱く

突然ですが……番外編をまた一つ……。皇 雅人〈すめらぎ まさ  
と〉ことマサトです。

サブタイトルにありますように新大陸に向かっている途中でのお話……。実際には着いちやっていますけどね。しかもしよっぱなからネルギガンテと戦ってるし……。続きはまたしますが、途中の小話です……。

古龍になってどれだけ経ったでしょうか……ってまだ1年にも満たないわ、あまりに出来事があり過ぎて、何年も経った気がしています。モンスターと相対し……。彼女が出来……。モンスターと相対し……。また彼女が出来……。モンスターの仲間が出て……。和の国では絆が出来て……。また彼女が出て……。

え、羨まし過ぎるって!?そりやもう嬉しい限りです♪♪大変な時もありますけど、なんか充実しています……。

でね、3人の美女と野獣の……。いや、古龍の私……。で、新大陸に向かっていた時の事です。いろんなフィールドを跨ぐように、上空を通過している時に雪山も通りかかったんです。さすがに装備が寒さに耐えられるスキルは付いていないのでホットドリンクを……。と考えましたが、本数が少ないうえに私は大丈夫ですが3人の美女たちには耐えられない。まして、山よりも高い上空を飛んで行くんですからホットドリンク1本の耐久時間もあまり続かないでしょう。

これは困ったと悩んでいた所、私が雪山山頂近くに村を発見!?あれってもしかしてポケケ村!?3人もそれを見て領いてます。

おお、これは寄らない手は無い!是非是非助けてもらわねば……。で、私達は領き合つて、一路ポケケ村に寄る事にしましたんです。ゆつくりと旋回しながら下降してポケケ村に近づいて行きます。あ、でも待って。いくら3人も美女を乗せてるからと言って古龍が降りて行ったらどうなるか……。

「ニャ~~~~っ!!りゅ、龍ニャ~~~~っ!!」

「お、おいっ!ハンターに知らせろっ!集まれる者全員非常招集だっ



!!

「ひいひいっお、お助け……。」

「み、店を閉めるぞっ！逃げる準備だ!!」

当然、大騒ぎになりますよね〜やっぱりそうなりますか〜。そうですよね〜大型モンスターが襲来したら大騒ぎですよね〜。襲う気は全くないんですけどね〜、勘違いしますよね〜普通。

「ま、待ってくださいっ!!」

ミラルダが地面に着地する手前で飛び降りていきました。天羅とアミラさんが続きます。集まったハンター達は飛び降りて来た3人の美女にビツクリ!

「旅の途中で寄らせてもらいました。怪しいものではありません!」

い、いやミラルダ。そうは言っても怪しまれると思うんですけど。3人だけならいざ知らず、私が居ればねえ。

「お前たちは、何者だ!かのライダーだと言うのか!？」

一人のハンターが、声を掛けて来ました。

「いえ、違います。一緒に共に旅をしてはいますが。」

「ならば何故ここに来た!」

「それは必要な道具や素材を買いだいたいと思った次第です。悪気はありません!」

「ここは、モンスターを連れて来るような場所じゃない。早々に出てっくれ。」

「そ、そんな……。」

う〜ん、気持ちも分かりますけどちよつと冷たくありませんか!?!私は元々冷たいかもしれませんが。

「待ちなさいっ!」

「そ、村長……。」

その男性ハンターも村長さんの前ではさすがにひるんでました。当時ココット村の村長さんと組んで狩をしていたとか。私でも聞き及ぶお話です。良いおばあちゃんになってますが、威厳さは誰にも劣らない風格があります。

「そなた達、その古龍……クシャルダオラと共に旅をしておるじゃ

と?」

「はい、その通りです。」

「ライダー村の者ではないようですが……。」

ハンターさんが補足してますが。そうですね、その村もどこにあるかは分かりませんが、会えたらいいなとも思います。

「して、何処に向かおうとしておるのじゃ?」

「はい、新大陸に……。」

「私は和の国から来ました。アマラと言います。こちらは天羅《あまら》さん、そして古龍の彼と長く一緒にいる彼女がミラルダさんです。古龍の彼も会話が出来ます。」

アマラさんが補足してくれました。村長さん含め、ハンターや村の人達全員、目が真ん丸に大きく見開かれています。直径15cmくらいでしょうか。

「な……なんじゃとっ!か、か、か、会話が出来るじゃとっ!!」

あ、そこですね。そりや驚きますよね。久々の驚きシーンを見た気がします。いつ以来だっけ!?

(初めまして。戦うつもりはありませんので、ハンターさん達を開放してあげてください。)

私が地面に文字をいきなり書いたもんですから、それにもまたビツクリ!村長さん硬直……。

「だ、大丈夫ですか?」

「お、おお、う、うむ大丈夫じゃ。皆の者、敵襲ではない!安心してよいぞっ!」

「ほ、ほんとですか村長!!」

「うむ……ここに古龍殿が書いた言は取った。3人のハンターもついて居るし、村への被害はなさそうじゃ。安心してよいじゃろう。」

ハンター達は渋々散らばっていきます。ここぞでクシヤルダオラを討伐できたとあつたら、自信が付くし名声も上がるでしょう。それが出来ないジレンマというやつでしょうか。ブツブツ小言を言いながら離れていきました。

スイマセンねえ。こつちから喧嘩を売るつもりはないんで……売

られたら買うかもですけど。でも幾らで買うかは別の話……。

「して、新大陸に向かっているとな？」

（はい、和の国で風神龍、雷神龍より預かって来た物があり、それを渡しに向かう事になったんです。その龍が新大陸に居るとの事で……。）

「ほうっ、ワシも言った事は無いがの。新天地に行くなら準備をするに越したことはないよ。ゆっくり準備していくと良いじゃろう。」

（ありがとうございます。これを……お近づきの印に……。）

私は鱗を一枚抜き取って村長さんに啞えて渡します。なんか、村長さんの眼鏡が光った気が……。

「これをくれるというのか、ワシに？」

（はい。）

「それは、絆石という訳ではありませんが……、友情を誓う証です。」

村長さんがミラルダの話聞いて、顔を見上げました。私の方をじっと見つめます。私も真っ直ぐ見つめなおして頷きました。眼鏡をくいと持ち上げて、ニカツと笑みをこぼしました。

「ワシが狩りしておった頃は、こんな事はあり得んことじゃった……。この歳になっても貴重な体験をするんじゃないや。長生きしてみるもんじゃわい♪」

（気に入ってもらえれば幸いです。）

「勿論じゃ！狩りをして剥ぎ取ったならともかく、好意的に渡されたんじゃぞー！これ程貴重な物があるもんかい！ワシの家宝じゃー！」

ええっ！そこまで言います!?!いや、確かに簡単に手に入る物ではないでしょうがそこまで思ってもらえるとは思わなかった……。

「よしっ！準備がてら家に泊まって行くがよい。なに、急いではおらんのだじゃろ？」

「え、ええ!?!いい、いいんですか？」

「マジで!?!やった!！」

「すみません、お邪魔ではないですか？」

「心配は要らん。部屋はあるし、あんたらの話しも聞きたいしの。

サラや!?!サラは居るかの!?!」

「おばあちゃんどうしたの?」

え…………いや、あの…………可愛い…………、つてご、ごほんつ!!

すいません、美人のハンターさんには目がなくて…………いや、ありますけど。

「この人達を家に案内しておくれ。準備も手伝ってあげるといいじやろう。」

「うん、分かった!どうぞこちらに。ようこそポケケ村へ。」

村長さんの自宅に案内されていく3人。美女の四人の後ろ姿はそりや壮観ですよ!なんて悩ましいんでしょ!周りの男性達もすっかり見とれてます……。いや、良かった…古龍ですけど生きて良かった!

あ、でもとり残されちゃった……。さて、どうしよう?周りはまだ警戒してるし、村長さんも行っちゃったし。

ん!?何だあれ?アイルーです…よ…………ね!?わおっ!アフロヘアーに黒のサングラスしてMyダンスをしながらこつちに向かって来ます!あれってもしかしてゲームでもお世話になった、カリスマ美容師猫さんですか!?マジっ?わおっ!こんなところで会うなんて!

「へい、My, brother, 乗ってるかいBaybe。」

わおっ!ノリノリな言葉ですね。私もそれに習いますかね

♪

(oh!サンキュウbrother!今日もそのアフロが光ってるぜ、Baybe。)

「良いノリだぜbrother、嬉しい事言ってくれるぜ、そこいらのファツキンとは違うぜBaybe。」

腰を横に降りながら、ラツパーのように話し掛けて来ます。ここまで徹底すると凄さを感じますね。

「実はユーに頼みたいことがあるのさBaybe、聞いちゃくれないかMybrother?」

ほ!?!私に頼みごと?なんでしようね一体。ま、聞くだけ聞きましようか。急ぎ旅ではないので、解決してあげれば良いかなど。

(分かった、brother相談に乗るぜBaybe。)

「おおっ！聞いてくれるかMybrother！さすがそこいらのフアツキンとは違うぜBaybe。」

その相談で誰にしたんでしようね？

(Mybrother、相談の内容はなんだい？Baybe。)

「今から話すぜBaybe。実はあるモンスターの毛を貰いたいのさBaybe。」

(モンスターの毛が欲しいって!?brother。)

「そうさ、brother俺にとつちやそれがないと死活問題さBaybe。」

(マジかいフアツキン！そこまで悩むモンスター、一体誰なんだBaybe。)

「金獅子さBaybe。あの金髪が欲しいのさ、Mybrother。」

あ……………あははは……………。無理っしょ！あの金髪状態は彼の怒りモードですよ！秒殺どころか、瞬殺でしょ！どれだけ、ゲームで悔し涙を流した事か…………。いや、今は古龍ですけどね！それでも、大変です。どうするか？捕獲!?私からすると奇跡に近いな。参ったな、さすがにこれはどうしたものか……………。

あ……………、もしかしたら……………イケるかもしれない！おしつ！ダメ元で、あの場所に行ってみるか。

(分かったぜ、Mybrother！上手くいくかは分からないが、やるだけやってみるぜBaybe。)

「やってくれるか！Mybrother！やっぱりそこいらのフアツキンな奴等とは違うぜBaybe。さすがは、俺の見込んだ男だbrother！」

(いやいや、それはクリア出来た時に聞くよ、Mybrother。)

「分かったぜフアツキン、よろしく頼むぜBaybe。」

と、戻って行きました。無理難題を置いて……………。でも、宛が無いわけじゃないので…………明日にみんなであの場所に行ってみますか！

私も少し休みますかね、明日の体力を温存しないと。私は身体を丸めて、眠りに着きました。彼女達は村長さんも含めて女子会!?のように、深夜までテンションアゲアゲで話し込んでいたようで次の日は、女性5人とも目が充血して腫れてました……ご苦労様♪

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆

で、次の日です。3人に内容を話してラージャンさんがいるかもしれないあの場所へ行ってみることに。

「ね、あんた達どんだけ顔広いの!?!ラージャンと知り合いなんて半信半疑だし。」

「そんなに凄いモンスターなんですか?」

（確かに戦ったらこっちもかなり苦戦するか、猫タク行きだね。）

「そんなに!?!」

「そうなの。だからあの時は戦う意思が無い事を分かって貰うのに、お土産をね……♪♪」

「?!?!」

二人が不思議がってます。そりゃ好物をあげればね、向こうも悪い気はしないし。

「あそこはひさしぶりだね♪」

（そうだね、出会って間もない頃だしね。まだ居るかどうかも分からないよ。）

「そうだね、まずは行ってみてからだね。」

孤島に行く途中の、小高い丘の岩場の上……。果たして居ますかね!?!彼と離れてから久しいし……。

まずは、降り立ちます。ミラルダも果物を採りに行きました。天羅とアマミラも続きます。

私は、そこで待つことに。翼を休めようとしたら、近づいて来る物が……。

（ん!?!先客……お前は……。）

（おおっ!?!この前の!）

（ほうっ!?!生きてたのか。しばらく会わんから他のモンスター達に倒

されたかと思っただぞ。」

(いやあ、ごもつともだね。ホントに倒されかけた事もあるから嘘でもないよ。)

(そういや、一緒に居た嬢ちゃんはどうした!?)

(ああ、ほら、今戻って来た。)

「ごんにちは。お久しぶりですね。」

(!?!?)

「ラージャンが驚いてます。珍しい!そうか、あの時はまだミラルダとも文字を書いて会話してた頃ですから、直接話が出るなんてビックリしますよね。」

(彼女とは会話が出来るようになったんだ。色々あつてね。)

(そうか……久しぶりだな嬢ちゃん、この前の果物は助かった礼を言う。)

「いえ、大したことは……。でも、今回もお願いがあつてこれを持ってきました。」

(おおっ!そんなにか!?)

よく見ると、ミラルダがバナナのような果実を50房程、天羅が30房程のブドウのような果実を、アミラがメロンに似た果実を5個ほど。3人で短期間で良くそこまで集めましたね。素晴らしい♪♪

「全部、差し上げますので一つお願いを聞いて欲しいのです。」

(で、何だお願いと言うのは?)

「はい、貴方の金髪を少し分けてもらえないかと……。」

(何!?!おれの金髪!?!)

その場の空気が一転して静まり返り緊張感がひしひしと伝わってきます。まずい!触れちゃいけない所に触れたか!?!おおお、茶色かった体躯が金髪の体毛に変化していきます!こんな目の前で怒りモードで攻撃されたら、私もただじゃ済まない!3人も危ないっ!回避させないっ!

(ミラルダー……は、一旦離れ……へ!?)

なんと!!ラージャンさん攻撃するどころか、手招いて来るじゃありませんか!!

(これで良いか?)

おおっ！お願いしているこつちがビックリしてます！金髪を分け  
てくれるというのです！こんな奇跡なことがありますか？

ミラルダ達がラージャンさんの金髪部分をナイフで、一部切  
り取ってます。他から見たら、異様な光景でしょうね。ラージャンさ  
んが大人しく金髪を切られてるんですから。

「ありがとうございます。」

(ごめんなさい、助かります。)

(なに、礼には及ばん。これだけ貰ったらな。)

沢山果実を貰ってご機嫌だったようで、先に果実を見せてお  
いて良かった。被害に遭わずに済んだようです。

(貰ってくぞ。)

(勿論！持って行って食べてくれ。また、会えるかな?)

(お互いにハンターに倒されなければな♪)

(それは確かにね。)

ラージャンさんは果実を全部背中に背負って、ゆつくりと  
去って行きました。私達は顔を見合わせて、小さくガッツポーズを。

それから3人を乗せて、ポツケ村へと戻ったんです……。

「おおおっ！おおっ！すげえぜ、ファツキン、他のハンターに頼んで  
も達成出来た奴は居なかつたんだぜBaybe。一体どうやったん  
だいMybrother！話を聞かせちゃくれないか？Baybe  
」。

金獅子の金髪なんて、超レアでしょう。それを捕獲や討伐で  
剥ぎ取った物じゃないとなったら、そりゃ誰もが知りたがりですよ  
ねえ。サングラスとアフロヘアが、一層光ってます。

(その内ゆつくり語ろう、Mybrother！それで金髪アフロ  
を作るんだろう？Baybe。)

「どうして分かったMybrother」

カリスマ猫さんにまたまた驚かれています。

(金髪でも作って見たかったんだよねアフロ。そうだろう、Myb  
rother?)



「かなわなないぜbrother。その通りだからなBaby。」

「ええっ！金獅子の毛でアフロヘアを作る気だったの!？」

はい、天羅さんその通りです。

「そんな……金獅子を怒らせないようにとどれだけ気を使ったか……。」

ミラルダもゴメンね、付き合わせて。

「そんなファツキンな猫さんは初めてです。」

ん!?私も、天羅も、ミラルダも、アミラに注目します。い、意外に乗ってくる子なんです。ちよつとビックリ。2人もその様でイメージが先行している分、そんな喋りをしてくるとは思ってもみなかった事で……。

アミラもみんなに注目されて照れてしまいました。可愛い……。コホツ。

「すまないbrother、恩に着るぜBaby。」

と、皆に頭を下げてきました。で！なんとっ!!

「(カリスマ猫さんがサングラスを外したくくっ!!)」

もう、ぶつとびです！あのカリスマ猫さんが……。あの猫さんが……。サングラスを外すなんて……。

ホントに変地異起きませんか!?大丈夫!?と言つてもどこに避難しても無理っぽいですが……。

つづらな瞳……。いや、カッコイイ♪♪素顔が見られるなんて、大変貴重で大変ラッキー!!この思い出は一生の宝物……。絶対忘れてなるものか！

そんな感じで、ちよつぴりドタバタしましたが、準備を整えて再度新大陸へと私達は向かいました。陰で私とまた約束しつ……。

(今度は新大陸のモンスターの毛を頼むぜMybrother。)

「(「」らっ「」)」

.....



新大陸で出会った同じ境遇の物……。②

只今、飛翔中ではありますが……。皇 雅人《すめらぎ まさと》  
とマサトです。

古龍に転生して今を謳歌しているおっさんです。なんと3人の美女に惚れられる……。超果報者ですよ。なんでお前だけがって？私にも分かりません。古龍なのにね？

でね、大団長さん達に助けてもらい、拠点に誘われまして一路、拠点へ向かおうと3人を乗せて飛んでいる所なんです。それが女性達が新大陸の植物、動物、食物!?に興味津々ではしゃいじやってます。

その内の1人は最初からホットドリンク3本で惚れられて、そのあとすぐに告白されて、お付き合いが始まって今に至るハンターのミラルダと、和の国に滞在中に告白してきた2人がいまして、いきなり攻撃しておいて、お嫁さんにしてくれと言ってきたハンターの天羅。和の国を出る時に双子巫女の1人でアミラと一緒に行ききたいと。もう、3人とも美人で可愛い……。勿体ない位の……。いえ、勿体なくないです……。

私にとっては大事な大事な女性たちなんです。

「あつ！あそこに珍しい植物が……。」

「あつ！アミラさんちよつと危ないっ！ああつ！」

「え、あ、なにやってんの！ちよつとっ!!」

(ア、アミラさんっ！おっ、落ち！落ち！落ちるっ!!)

うわああああ！バランスがあ！彼女達を辛うじて抱かえて落下します！バキバキ、バサバサと茂みに落ちた感じが……。

「イッタク……ううっ、みんな無事？」

「たくっ……、アミラが突然マサトの背中から身を乗り出すから……。」

「申し訳ありません……。あんまり珍しい物が一杯で……。」

はは……。分かる気もしますがね、新大陸ですから。で、私をも覆つてくれる大木ってどんだけ!?

え!?!今のお腹の音……誰!?!確かにお腹が空いてきたのも事実ですが……。へ、アミラさんの!?!マジで?!いや、確かに食べる時間的には大分過ぎてましたし、私もなんだかお腹が空いてきた。

「……へえ、なかなかの食いしん坊なんだね。ミラルダ……食糧の残りはある?」

「ああ、えーと、残りはと……アレ?うそ……。」

あらく、残りの食料の袋が無いとか……。ミラルダが探してますけど……もしかしてほんとに無い!?

「え、ほんとに無いの!?!この先どーすんの?何が食材になるか分からないし。」

「……現地調達をしたくても、どれが食べられるか分からないね……。」「

「困りましたねえ……(ぐううううう……)」

「あなたがそれを言う!?!」

(いたた……はっはっは、いくらダイヤコートで補ったと言っても、結構キツイな。3人とも怪我はないかい?)

「うん大丈夫……アミラのお腹の虫さん以外はね」

「すいません、しばらく食べてかったものですから……。」

いや、確かにね、お腹が減るのは人それぞれ。私もなんとなく減ってきた感があります。でも、大きい音でしたね、それはそれで可愛いんですけど。さて困りましたね。

(これだけ分からないと探しようがないな……。)

「……と、とりあえず、場所を移動しましょ? ココ、凄く大きな木の上みたいだし……」

おお、確かに。ミラルダの言うとおりです、どのエリアに居るのかも分からないし、周りを見回しても大きな大木が生い茂り、通れそうな穴もありますが、枝やシダや蔦などが入り混じって生えていてジャングルですよ。マズいな……これ、方向音痴の私には……苦手な場所だったりします!?!でも、動かないと始まらないか……。

まずは木から降りましょうか、モンスターも居なさそうですし。

取り合えず、地面に降り立ちます。ふう、3人とも無事で良

かった。で、北側で見つけた古代樹の穴が私も通り抜けられそうだったの、そちらから見晴らしの良い場所へ移動したんです。でもね、後で聞いたらその場所「リオレウスの巣」と聞いてビックリ！知らない事とは言え、出くわしたら大変です。ここで野宿も……とチラリと頭によぎってましたから。いやあ、バルフアルクのように話で分かって貰えるかどうか……。実際、私の大きさでは穴を通る事が出来なくて、3人が私の道案内の為にジャンケンが繰り広げられて（嬉しいやら申し訳無いやらで）、リオレウスが飛来しない事をハラハラ祈りつつ、アミラが勝って背中に乗せて移動しました。

でもね、さすが私です。そこから東側へ回ればアステラが見えたらいいんですよ実は。後に話してくれました、現地の人は素晴らしい。私達は結局、逆の西側から回ったんですね、右も左も……いや、東西ですけどね、分からずじまいで全員迷子……。

「さっきの場所って……何であんな所にキャンプがあつたんでしょうか？……」

「新大陸に入った、調査団達のキャンプじゃない？ まあ……彼らと合流できれば、良いんだけどね……。」

「そうですね……問題は、彼等の居場所なのですが、どの辺りなのか……？」

いやあ、逆方向です……。私含めて誰も気付いてません……。

新大陸では、飼いや慣らされた小型飛竜を使って場所を移動するらしいんですが……便利ですよね。でも、大型飛竜の私と移動する彼女達って、ちよつぱり贅沢だったりします？ 狙われる確率もあがりませんか……。

（ん!? あれは……!?)

下の方を見た時に、リオレウスではありません……影が見えたんです……。うくん、嫌な予感しかしない……。

でも、ここに居てもいざれリオレウスが戻ってくる可能性があるし、移動しない事には拠点にはたどり着けないので、まずは移動しましょうか。

（まずは、この空洞から下に降りて行こう。移動しないとどちらにし

ても拠点セリエナを探さないとならないし。」

「そうね、そうしましょう。道やモンスターに気を付けながら進みましょう。」

と、進んでいきます。マップ上ではエリア15から14の方に移動していたそうで……。

「この森は広い上に迷路みたいだね……複雑に入り組んでるから分かりづらいし。」

「マップでもあれば、まだ分かるんだけど……」

（取り敢えず、下に進もう……さっきのキャンプ状況からして、下にもあると思う……そこに地図でもあれば、迷う心配もなくなると思うし）

ま、食料でも少し残っていれば御の字ですけどね。空からと言っても、食料が何か分からない状態で探したとしても体力が持たない。まして、3人の女性たちにすれば尚更だと思うので。でも、その時は私もさっきの嫌な影の事を忘れてたんです……。後で後悔つてやつですが……。

「……植生は、密林に近いわね……水場も多いし。ガノトトス元気かな……。」

まあ、あれだけのパフォーマンスが出来るなら大丈夫でしょう。つてどっから出るんでしょうねこの自信……。

「里の近くにある大社跡にも似ていますね……。」

「ランポス系かな？ ああ黄色いヤツは……。」

時々見掛ける黄色い四足歩行のトカゲ……ジャグラスという名前だそうですが、確かに集団性があります。ジャグラス達を尻目に、森の中を慎重に進んでいきます。まあね、女性3人はともかく私と一緒に移動していたらさすがに隠れようと右往左往してますよ。大型なら威嚇して来ようものですが、勝てないと自然と把握してるんでしょうね。逃げ隠れる事に必死になってますから。

しかし！新大陸ですよ！まあ、私達が見るもの全てにおいて新しい！どうしましょうこれ。みんながみんな心なしかウキウキしてます。

ホントに勉強させられてばかり……。

更に進んで行くと一番下……つまり最下層のエリアについたように、後でエリア8と聞きました。

「アプトノスが居るわ!」

天羅の指す先には、アプトノスが3頭……ゆったりと草を食べてました……ううう、ダメですねお腹が言う事を聞いてくれない……。

「(おっお肉くく!!)」

ごめんなさい全員で叫んでました……。アミラ以外が生肉を求めてアプトノスに突撃します!……当然、アプトノスは驚いて逃げようとするんですが、私達も必死……。

私が逃げられない様にブレスで竜巻を作り出して、まわり込み一番体格の良さそうなアプトノスを足止めして……ミラルダと天羅が左右に回り込んでそれぞれの一撃、仕留めておりました。

「……お見事ですわ。」

弓を構えて狙いつつ、動きを冷静に見ていたアミラも素敵ですが。良かったこれで何とか食料にありつける……。ゴメンね、そしてありがとうアプトノス……大切に頂くね……。

「グウルルルッ……!!」(血の匂いだ……。)

森の奥深くから……漂う血の匂いに誘われて、1体の竜が森を歩いて来ます……。

それは筋肉質で巨大な緑色の体躯と、強靱な後ろ脚……2足歩行で、黄色の瞳に異様に発達した顎……そしてそこから生える無数の牙の如き棘……まさにその物は、果てる事のない強欲を秘めた狂暴な竜でした……。

「グウウルオオオオオオッ!!」(貴様らあっ!それを寄こせくくつ

!!  
!?!?!?!?!?!?

マジか!? しまった!.....さつき見かけた影が近くに.....。生肉の匂いにつられて来たな! ミラルダ達も流石にその威圧感と畏怖感は危険と感じたようで、武器を構え直して声の方向に身構えます。私もやって来る物を見据えます。そして現れたのは危険指定されている個体.....。

「なっ!? そんな.....イビルジョー!？」

「何なのですか!? あのドヤ顔みたいな生き物!？」

「やばいね、この雰囲気.....もしかして怒りモード.....!？」

(まずいね.....私も聞いた事がある.....。)

「そうね、たぶん特殊個体でクエストにも指定されている.....怒り喰らうイビルジョー.....!!」

いち早く気付いた天羅はその名を口にします。初めて見るんですね、アミラがドヤ顔などというぐらいですから.....そして異常な気配に気付いたミラルダと私とその答えを導き出します.....。

怒り喰らうイビルジョー.....。

クエストにも指定されているやばい奴.....。通常個体ですら怒り状態になると手練れのハンターでも無事では済まない程で猫タクチケツト推奨される狂暴な竜なんですけど、この特殊個体の場合は“常に怒り状態”なんですよね。

.....つまり常時、危険度MAX状態.....遥かに狂暴でかなりヤバい! 半端ない強さです!!

「グウオオオオアアアッ!!」(喰らってやるあっ!!)

私達と生肉を見たドヤ顔さんこと狂暴竜イビルジョーさんの取る行動は一つ.....。

エリア全体を震わせる程の咆哮を上げ、突進しようと動き出した直後.....。

『それはさせませんッ!!』

なっ! 頭の中に声があっ!! わずかに遅れて爆発音にも似た轟音が響き、極太の極光がそのイビルジョーの横っ腹を焼いてました! な、この光.....凄い.....。

「ギャアオオオアアアッ!？」(あ、熱いっ!ぐわああああっ!!)



不意打ちでまともに想定外のダメージを喰らい、更に続けざまに浴びせられて、イビルジョーも踏ん張ることが出来ずにひっくり返ります!!

「……な、何ですか今の光……!?!」

私もお初にお目にかかります。生物のものではないと思える程の極光の攻撃……その極光はイビルジョーの転倒と同時に途切れて、私はすぐさま振り返ってその方向に向きます……。

そこに居たのは、1人のハンターさんとオトモアイルーが居て……体軀こそ私よりも小さいですけど、全身は白銀一色、4本の脚に翼……そして、身体のおちこちに揺らめく幽膜……一体誰!?

ハンターさんと一緒という事は……大団長さんが言っていた事……。

「なに……新種の古龍?」

「怨虎竜”おんこりゆう”マガイマガドとは違いますね……この幽は、まるで幽世”かくりよ”の様な……」

「あの光は、この龍の攻撃ブレス……だったの!?!」

私もそれは驚きです、全員初めて見る龍ですから驚きも格別ですよ。

後で挨拶がありましたけど、油断なくイビルジョーを警戒しつつ此方へと歩み寄って来るのは指折りのハンターさんで新大陸調査団5期団のレクスさん……揺らめく光の残滓を纏って、前の男性ハンターさんの後を歩いて来る冥灯龍ゼノ・ジューヴァで未知の古龍のシオンさん……。

「アンタ等か、外から入り込んだ古龍とハンターってのは……」

既存の装備とは大分細かいところが違うようですね、リオレウスの装備でEXレウスシリーズに身を包んだ男性ハンターさんがマスクを上げて私達の方へ歩み寄って来ました。

『……ホントにクシャルダオラとハンターさんが……』

あら、また頭に響いてきました、まだ幼さの残る様な少女の声ですが……これって全員に聞こえます!?!私とミラルダだけならば古龍繋がりで……とか説明が付くでしょうけど、どうやるんだろ?これ

だったら、3人とも話が通じますよね。後で聞いてみようかな。

「だ、誰なの？ この声……」

でしようね、そうですね、古龍の声を直接聴くのは初ですよね、天羅が困惑してます勿論アミラもですが。

『……あゝ、やっぱり初対面だと戸惑いますよね？ 私です、目の前の銀色の……』

「グルルルウオオオオツ!!」（おくのくれく〜くつ!!）

シオンさんが右の前足を持ち上げて、手を振るように合図をしてくれようとしたんですけど……それを遮る咆哮を上げてイビルジョーさんが体勢を立て直してきました。

「チツ、もう少し大人しくしてろよな……!」

レクスさんが忌々しげに声に出しながら武器を構えて走り出しました。それを見て、ミラルダ達も動きます!

「レクスさんっ援護します、天羅さんっ!」

「了解っ! 食事の邪魔をする奴はアックスに殴られて倒れてなっ!!」

あの……、それ私には止めてくださいね。切なすぎる……。

「私も御供致します!」

ミラルダ、天羅、アミラ3人がそれぞれの武器を構えて、レクスさんの後に続きます。

「ニャー! ハンターが4人も揃えば楽勝ニャー!」

可愛い……いや、思わず……相変わらずアイルー族も可愛いですね。しかも、サポートは助かりますし。さて、私も……。

『私も……行きますツ!!』

オトモアイルーのタマさんが、オトモ道具『はげましの楽器』を演奏してハンター達を応援してくれます、それに合わせる形で私とシオンさんも戦闘態勢を取ります!

このエリア内で“怒り喰らうイビルジョー vs. ハンター4人&オトモアイルー+古龍2体”

という特殊なデスマッチが始まったんです……何としても食い止めないと……。

## 新大陸で出会った同じ境遇の物……。③

ああっと！ごめんなさい！緊急事態勃発してます！エリア8内に  
て異種格闘技……じゃなかった戦闘が開始されました！

申し遅れました、皇 雅人《すめらぎ まさと》ことマサトです！  
肉の奪い合いなのか、私達に対して喧嘩を売ってきているのか、多分  
そうかな!?

ゆつくりと食事をしながら、レクスさんやシオンさん達とお話がし  
たいと思っっているのに、お邪魔をしてくるイビルジョーさん……。天  
羅さんに言われた事を分かってますか!?邪魔するやつはアックスに  
殴られて倒れてなさい……。それ、私も怖い……。

どうしてここまで怒りモードなのか分かりませんが、虫の居所が悪  
かったんでしょうか?短気なモンスターさんは嫌われますよ、どうし  
て私のように落ち着けないのか……。

「「落ち着き過ぎっ!!」」

あ、はい、スイマセン……。

(貴様ら、何故ハンターと共に居るっ!!)

あの……やっぱり珍しいんですかね?こう、モンスターに  
合う度と同じ事を訊かれる……。特殊なんでしょうね、モンスターか  
ら見ても人間から見ても……。

(いや、好きだって言ってくれた時点で離せる訳がないでしょ。これ  
逃したら、婚期が……。)

『え、そこですか!?』

(あ、いやほら、私にとっては3人とも大好きで愛してるもんだから  
……。)

「「ばっかっ、もうっ♪」」

攻撃しながら顔を赤くしてます、可愛い……。

(ふんっ!くだらないな……。俺にとってはどいつも敵で、食料でし  
かないがなっ!)

(そうだな、あんたにとつては……だろ!?)

(話にもならんわっ!)

(そりゃこつちのセリフだ！)

私も、身構えてミラルダ達を気にしつつ攻撃姿勢を取ります！シオンさんも先ほどのブレスで応戦しようと隙を狙ってます。私はダイヤの両刃のクナイを口に咥え、突進する体制に……。

レクスさんが双剣で脚や尻尾を巧みに狙って行きます。天羅が、アックス状態でイビルジョーの横顔にヒット！よろけた所を逃さずに、尻尾の方からレクスさんが背中、頭と回転斬りを浴びせていきます！手練れですね、流石です。

アミラも矢をつがえて貫通の矢をダメージのある脇腹に連続で当てていきます。ミラルダも太刀を振りかざし、懐からジャンプして真上から垂直に刃を降り下ろしてダメージを与えていきます！

「ちっ、なかなかしぶといな。」

「さすが怒り狂ってるだけはあるね。」

「スタミナ、体力、半端ないしね。」

「ダメージの度合いが弱くてなかなか倒れませんわ。」

「ゴオオアアアアッ！」(邪魔なハンター共があああっ!!)

わ、余計に暴れましたよ。ん?!急に立ち上がって足踏みしました。マズイ!このモーションはまさか……。

(みんな……危ないっつ!)

私は咄嗟に翼を広げて、皆の前に立てて盾がわりにします！  
(食らええっつ!)

その貯められたアギトから放射されるブレスは黒くおぞましいブレス……。地面や私の翼を無視するように吐いてきました！何とか翼の盾で攻撃を防ぎます！

「マサト！大丈夫!？」

(大丈夫だ！みんな怪我は？ブレスに殺られなかった？レクスさんはっ!?)

「レクスさんは大丈夫ですかっ!？」

「こつちは大丈夫だ……って、しまったっ!」

レクスさんが反対の方を向くと、オトモのタマさんが……。

「グルアアアアッ！」（小癩なあああつ！）

「ニャアアア！こつちに来るニャアアアッ！」

マズイツ！ジャンプして、タマさんの方につ！

『させないっ！』

シオンさん!?タマさんを押し退けて身代わりによ!

『きやああつ！あぐつ！』

このっ！殺らせないぞっ！喰らわせてなるかっ!!

（ふんっ！身代わりなんぞするからだ……だが、容赦はせんっ！）

イビルジョーが、上半身をしながらアギトを開いて、牙を剥き出した状態で頭を降り下ろしていきます！

『レクスッ……!!』

ハンターさんの名を叫んでました。レクスさんと……。

（容赦しないのはこつちの方だっ！）

私はすかさず、ノーモーションからの突進をして両刃でイビルジョーの背中を一閃します！

「ギャガアアアアッ！」（ぐわあああつっ！）

いくら筋骨隆々と言っても、今のダメージは少なからずキツいでしよう。そのため横に吹っ飛んで、ひっくり返ってもがいてました。

「大丈夫かシオンっ！タマはっ!?どつちも無事か!？」

レクスさんがシオンさんの元に。

『はい、でも右前脚が……。』

「ほんとか!?見せてみる！」

あちや……今のイビルジョーの両足のジャンピングプレスで、脚を痛めています。

（私も油断した、済まない!!）

『いえ、貴方のせいではありません。』

「ニャア……ごめんニャア……。」

『大丈夫だよ、タマも無事で良かった。』

優しいですね。まだ成体になってないと思いますが、しっかりとっている……。

「ゴオアガアアアッ！」（お、おのれ！おのれ！おのれ〜〜っ！）  
よろつきながらも、起き上がりエリア全体に響く怒号を上げ、全身赤黒く染めてブレスを溜め込みます！くっ、今度は間に合わないかっ！

イビルジョーが渾身のブレスを私達に浴びせようとしたその時です！

「ガッ、ガハッ！」（ぐおっ！なんだっ！）

このエリア8の全体を包こむ空気、気配……何も無いのに真上から押し付けられる重圧……。

「な、なんだこれっ！」

「ニャ!?地面に引っ張られるニャ!!」

「ぐっ!う、動けないっ!!」

「だ、ダメです！立ち上がる事も出来ないっ！」

「マ、マサトっ!!」

（ミ、ミラルダっ！私も動けないっ!!）

『な、何なのこの力!』

全員が……いや、イビルジョーもですけど。地面に吸い寄せられて、その場にくっついて身動きが取れない!!

更に地面に押し付けられます!!

その同じに倒れ込んでいるイビルジョーの後ろに圧倒的な威圧感と殺気が混じった気配を漂わせる物が現れたんです……。

「ぐっ……なっ、なんだアイツは!」

「え……っつ、嘘……。」

「マ、マジで……!?!」

「そ、そんな……。」

（わ、私と同じ……種が……いる……。）

『起き……上がれ……ない……』

それは、私と同じクシャルダオラですが……、違うのは私よりひと回り大きい体躯に漆黒に艶のある鋼や錆びた色とは違う色……。そして鋭い殺気……。

（ほう。お前らも転生者か。）

そのクシャルダオラが意外な事を口走ってきました。

(なっ何故それを!?……まさか……。)

「マサトっ!……それって……。」

そうです、ミラルダが思っている通りだと思えます。

(……そうだ、俺も転生者だ……。俺の“超重力”グラビトンに耐えられない様じゃ俺の敵じゃなさそうだな。)

口元を少しつり上げ、ニヤリと含み笑いをこぼすその古龍は私達の動けない姿を見て上から目線で見据えていました。

(何故……こんな……事を……するっ!……。)

(ククク……。心配するな、今日は顔を見に來ただけだ……。ほんの挨拶代わりにな。)

(どう……いう……事だ!……。)

(ふんっ、いずれ分かる。せいぜい今を楽しむんだな……。)

(何っ!)

なんと、イビルジョーの首あたりを啜えて持ち上げ、ホバリングしていきます。全員、地面に押し付けられながら驚愕でした。あの体格をいとも軽々と持ち上げたんです、驚くなど言う方が無理でしょう。

私達は何もできないまま、その漆黒のクシャルダオラが飛翔して飛び去るまで強力な重力は解けませんでした……。

かの龍が去った後……重力が解けて、みんな解放されます。あまりのショックにゆっくりとしか立ち上がれませんでした……。一体何者なのか……。ただ言える事は私達とは仲良くなれない相手……。あの殺気の籠った圧迫感は紛れもなく私達を敵と見ている事……。それだけがはつきりした事でした……。

確かに全てが仲が良いなんて事はないと思っていました。この世界でも居ない方がおかしいと思えるぐらいに。

でも、それが突然やって来るんですから困ったもんです。心の準備が出来やしない……。

「マサト……大丈夫!？」

ミラルダが傍に寄ってくれました。

「なんて奴だ、ありゃバケモンだね……。」





慌てて横目で、クシヤルダオラの顔を見ます。漆黒の体軀の中にひと際真っ赤な目がイビルジョーの事を見据えていました……あの怒りモード全開だったイビルジョーが喉の鳴らす音が聞こえるほどに生唾を飲み込んでいたのはその場の話……。

(なら、着いたら早速で悪いが働いてもらう。だが、その前に傷ぐらいは治してやろう。)

この古龍には逆らえないと直感で把握したのかイビルジョーさんも観念していました。一体仲間を増やして何をしようと言うのでしょうか。その時の私達はそこまで考える余裕もありませんでした……。しかし、あの体軀の色……。そして、私のように進化したのか重力の攻撃属性……。私の場合はダイヤですが……。あの畏怖するよくな気とパワー……。今の私では太刀打ちできないかもしれない……。でも、負けられないので……。応援よろしくお願いします……。つて誰に言ってるんだろ私!?

セリエナで療養す……。

いやあどうも。すっかり古龍になじんでいます、皇 雅人《すめらぎまさと》ことマサトです。

新大陸……ウキウキ感満載で様々なモンスターが居て……。驚かされてばかりなんです、まさか能力違いと同種がしかも私と真逆の考えを持つ古龍まで現れるなんて……。

あの超重力“グラビトン”なすすべがありませんでした……。何故現れたのか？目的は何なのか……今の私にとっては分からずじまいなのですが……まずは、傷を負ってしまったシオンさんやレクスさん（レクスさんは無事の様ですが。）3人の女性ハンター達……事が事だけに疲弊している事もあって、私も守るところか何も出来なかった事にシヨックが否めない。

なので、体力気力を整えるべくアステラへ。そして、傷を癒すならとセリエナへの移動を勧められ向かっていたんです。

今回は大団長“グラン”さんが案内をと小飛竜にぶら下がる練習をしたんです。スリンガーと言う名称だそうで片腕に手甲のような形に似てますが、万能なもので小石をセットして射出出来たり、矢じりの付いた細いですが丈夫なロープを射出して掴んだりぶら下がったり……。

え”、私とその練習!いい、いいいえ私がそれを使ったとして小飛竜が可哀そうで……逆に私にぶら下がるんだったら、何頭行けるかな？と言つても意味ないでしょうけどいけますよ。で、ミラルダ達のサポートです。落ちかけたりしたら私が受け止めて……。で、中でもやはりアミラが慣れるのが早かった、和の国ではスリンガーに似ている“翔蟲かけりむし”が使われていたようでしたし、天羅もあまり慣れていなかったのか使えるようになるまでしばらくかかっていたようです。ミラルダがやつと慣れた頃には小一時間ほど経っていました。これもまたいい経験です、後々役に立ってくれるかもしれないですね。

それで、折角だからとグランさん小飛竜で移動しようという事に。

私とシオンさんは後ろからついて行くことになりました。

おお、良い風が吹いています。小飛竜たちもその風の勢いも助けになってグランさんやミラルダ達を運んでいきます。ミラルダがその小飛竜と仲良くなっていたのが、ミラルダらしいと思って見えました。

「はっはっは、スリンガーには慣れたか？こういう移動もなかなかだろう？」

「凄い……良い眺め……。」

「そうだね、風も心地良いし♪」

「お3方は度胸がありますね……私は最初、少し怖かったですけど……。」

一緒に同行してくれているクリスさん、あなたの言う事も最もです。飛行船とかならともかく、かなりの上空を足元が無い、ぶら下がりで飛んでるんですから。バンジージャンプ並みに怖かったりしますこれ!?

突然、飛竜でしょうか、団体さんが同じ方向に飛んでいます。私達は初めて見る種でスリムで綺麗な翼を優雅に広げて翔んでいる……。レイギエナと言うんだそうで、見るもの聞くもの新鮮度抜群です！（危険だ！）

（危険が近付いているぞ！）

あら、私とシオンさんを見て敵と思ったようでかん高い鳴き声をあげ始めました。

「……………んツ……………凄い鳴き声……………！」

「そうだな、あれはお前達に相当ビビってるぞ。」

『はあ……………心外です……………私達は目的地が同じだけで、害する気は無いと言っている……………』

（確かにね、仲良くなれるならそれに越したことはないし、喧嘩を売る気も無いしね♪）

と言って攻撃されても叶わないので、一応警戒しながら様子を見ていると、慌ててはいるものの襲っては来ない……………しかも、私達やグランさん、ミラルダ達を囲うかのように周りを優雅に飛翔していま

した。

警戒は解けたようで、鳴き声もさつきとは違い、話し合う声になっついて殺気も感じられない。

『これは……貴重な体験ですね。レイギエナの群れと遊覧飛行なんて、滅多に味わえないですよ?』

「凄いい……こんな事が……あるんですね、凄く素敵……♪」

いやあ、これはホントに凄い光景だろうね。私にはミラルダが一番素敵……オホツ。

「素晴らしいですね♪警戒が解けただけでも、凄いの。」

「ねえ、レイギエナにぶら下がって移動出来ないかな?」

「「うらっー」」

あつはつは、天羅らしいと言えらしいですねそこがまた彼女の素敵なところですけど……♪

「私も……シオンと出会ってから、モンスターの生態には驚かされてばかりです。」

『……前にレクスと飛んでいた時は、タマの方が怖がってあまり近付けませんでしたけどね……』

ほう、クリスさん達にとっても貴重な体験なんですね。余程珍しい……って、こうして私とシオンさんや、ミラルダ達にグランさん達と団体で行動している時点で奇跡でしょうけどね。

(レイギエナか……私達を友好的に見て貰えたのか、誘導してくれている様にも見えるけど、どうなんだろ?それに彼等は何処に行くのか……?)

『レイギエナ達の観測はまだ不定期なのですが……彼等はこの先にある凍土地帯へと渡りを行っています……目的は不明なのですが、比較的若い固体が多い事から「繁殖の為では?」と研究者達は考えているようです。』

(ほう、繁殖かあ……なるほどねえ……)

もしそうだとしたら、レイギエナ達にとって良い場所があるんでしょうね。私達にとっての良い場所は……まだまだ見つからないかな、急いでいる訳ではないですからねその内自ずと出てくるでしょ

う。

そのレイギエナ達と遊覧飛行を数時間続けた後、雲の海が徐々に晴れて行き、目の前に巨大な雪山と真つ白な銀世界の大地が現れました。周り一面雪だらけ……ここまで広範囲な雪の大地は初めてです。「ここからは俺について来てくれ。セリエナはあの山岳地帯の南の辺りだ。」

了解です。なんでも手前に森があつてセリエナへと続いている道があるそうで、それを目指すんだとか。全員それに従つてグランさんについて行くことに……。いやあ、ミラルダと出会つた時を思い出しますね。そういやホットドリリンクあつたっけ!?

空からだと直ぐですね。森の道に降り立ちます。ミラルダ達もホットドリリンクは用意していたようで、早速飲んで準備完了で。

でも、居るんですよ。こういう場所にも、適したモンスターが……。雪の中を背ビレ!?を立ててジグザグに向かつて来る物が居ます。みんな身構えて警戒します。しかし、ここは雪の大地……雪の厚みが半端ない!足を取られて上手く動くことが出来ない。まずいな、向こうが有利か……すると大きな刃状の顔をした魚のようなモンスターが姿を現し、まさにこつちに突進して来ようとした時その後ろから、そのモンスター目掛けて大木が飛んできました!慌ててそれに気づいたモンスターが間髪で大木を躲し、振り向いて大木が飛んできた方向を見据えます。

雪煙の中から現れたのは巨大な立派な角を持ち、2足歩行で前脚は小さいですがパワーがありそうな草食系に見て取れます。グランさん達に後で聞きましたが、魚!?サメ!?のようなモンスターが“凍魚竜ブランドロス”、そのブランドロスに大木を投げつけて来たのは“猛牛竜バフバロ”と言うそうで、更に驚いたのはバフバロさんは知り合いとこの事で、サクラさんと言うそうです。喋り方が方言になっている事から、サクラさんと分かつたそうで助けられた感があつてありがたかつたですけど、そのサクラさんの圧勝だったそうです。

「ようこそ、ここが俺たちの第2の拠点……セリエナだ!」

おおっ!!真ん中の大きな機械を中心に色々な設備や機能が施され

てますね。ここだけ暖かく感じるのもこの蒸気機関を利用しているのだとか。文明の力って凄い……。

「あつたかいね！」

「ホットドリンクがここでは要らないようですね。」

「過ごしやすくなってるなんてどんだけの設備なの!？」

確かに凄い設備ですよ。人間ってその場の環境に応じられるように進化出来るんですね、オジサン感動……。

それで、グランさんの後について行って1つの建物の前に着きました。入り口に人が……いや、竜さんが居ますね。ん!? シオンさんに手を振ってますね、まあ知っていて当然ですよ。で、こつちを見た……固まってる……そりやそうか、なんで一緒にこいつが……みみたいな顔をしていますよ。お気持ちお察しします……。

「レオン、今良いか? 客を連れて来たぜ。」

「大団長!? それにシオンまで……え、でもレクスはアステラだと聞いてますが……。」

「そうだ、今回は任務じゃない。主にこいつらの治療だ。」

「治療!? シオン……お前が怪我を!？」

信じられないと言った顔をしています。ここの司令官をしているというレオンさん。でも、シオンさんの足に巻かれた包帯に驚いたようです。

『私だけじゃないんです、彼も……。』

(すみませんね、突然お邪魔して。申し訳ない。)

爪で地面に文字で返事をしたもんですから尚更ビツクリ。しばし硬直状態で混乱していたようで慌ててシオンさんに質問しました。

「なっ……クシャルダオラ……って、え!? 彼……って、シオン!？」

『彼は私と同じ、共存を望む古龍……クシャルダオラのマサトさんです。』

紹介されて私も頭を下げます。

「私はミラルダと言います。彼女が天羅でこちらがアミラ。マサトと一緒に旅をしています。よろしくお願いします。」

終始驚いてばかりのレオンさん……突然押しかけ女房……じゃな

かった押しかけクシャルダオラって何者だ!?!って感じですよね。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「……………はあ、なるほどな……………我々とは違う目的で外部から来たハンター達と……………イビルジョーの他にもう1体のクシャルダオラ……………か、シオンが手も足も出なかったとは、正直言っても信じられないな。」

「だが、これも事実だ。その証拠に2頭とも手酷くやられたんでな、暫くコイツらをここの温泉で休ませる為に来たって訳だ。」

え、温泉がある!?!良いですね♪有り難い。怪我の治りも早そうだし、シオンさんとも色々話してみたいしね……………。

「え、武器の手入れ!?!」

『はい、ここの工房なら腕利きの方も居ますし……………イビルジョー戦での動きに、少し違和感を感じたので……………。』

ほう、よく見えますね。確かにある程度のレベルは上げていたようですが、暫くそのままでもあったので対応しきれない部分も出てきていたかも知れません。丁度良い機会かもしれないですね、彼女達の武具を見直すのも……………。

「そうね……………確かに暫くそのままだわ。」

「あたしもアックスの調子がイマイチだったんだよね。」

「そうですね、戦闘中に武器が破損したなんて事になったら大変ですものね。」

「そうよね、今はマサト達の事もあるし、お願いしましょうか。」  
『……………だ、そうですよマイトさん。』

おお、ここが工房ですか。凄いな、なかなかの広さがあって大きな溶鉱炉がある……………。働いてる人達も、火の暑さとは違う熱気が伝わってきますね。

3人がカウンターの並んだところで、シオンさんが親方さんに話を振っていました。ここに慣れてますね。

「ホウ？お前さん達が外から来たハンター達か……見たことのねえ素材の武器のようだが、手入れの基本は殆ど一緒だ……俺ら2期団の腕を見せてやるよ！」

「お願いします。」

「任せときな、やるぞお前ら！」

「「おおっ!!」」

働いてる人達も気合いが入って、早速ミラルダ達の武具を預かって行きました。なんか頼もしいですね、良かった。さて、私達も回復しないと……と、シオンさんに案内してもらおう事に。あ、そうだ！シオンさんの会話方法聞いてみよう。文字を書くより効率が良いし、急ぎの時には話を通じやすいね。ま、まずはゆっくりしますか。では……♪



## 会話が出来た!!

今、新大陸で拠点の一つセリエナにお邪魔している皇 雅人《すめらぎ まさと》ことマサトです。

3人の美女たちに告白され、一緒に旅をすることになった私……嬉しき一杯な反面、私とは真逆のクシャルダオラの出現で、悩む事にもなり……。

で、いろんな意味で準備期間と決めて静養を含めて体を休めている所です。

そこで、色々話をシオンさんに聞きたいなと思いつつ、ふと前に思った事を聞いてみる事に。

そう、あの会話術……。特定の人だけに話すだけじゃなく、全体にも伝わる……。これを覚えることが出来れば意思疎通が随分楽になる……。そうすれば3人ともっとラブラブに……。失礼しました……。

で、頼んでみたら快く了承してくれて早速シオンさんの居る小屋で練習を開始しました。

でもっ、でもっ、めちゃくちゃムズイじゃないですかっ!!なにこれっ!?!こんなにシビアとは思いませんでした!

“龍の言霊”……。万能話術だそうで、やり方は優しく教えてくれたので理解は出来たんです。ただ、今までそのエネルギーを制御していた訳でもなかったなので、いざやろうとするとどうやれば制御出来るのかさっぱり分かりません。参りました……。でも、出来れば覚えたい。

なんでもシオンさんが言うには、

『この“龍の言霊”は鳴き声や吐息にほんの僅かなエネルギーを含ませて、人の五感に合わせる特別な波長として発することで、一種の声として相手の聴覚や脳内に直接響かせる方法です。』

との事。

(だああああ……。ムズカシイっ!マジツ?針に糸を通すよりも難しいよ!?)

いや、シヨックです。これ扱えるまで何年かかるのか……………。

『何ですかそのイメージ……………あ、そうか……………マサトさん、風で感覚を掴みましよう！いつもの暴風を纏うやり方で！』

風を纏うやり方!? 出来ないことはないでしょうが……………。

(何か……………さつきよりも、難易度上がってない!?)

『私は元々、エネルギー操作が得意な種族らしいので……………スレイン(ネロミエール)から概念を教わっただけで出来ましたし。』

マジで!? なんでも他の古龍さんから教わっただけで出来ちゃったって? 凄すぎでしょ! エネルギーの扱いが得意だと言っても私からしたら……………師匠と呼ばせて下さい。

そうか……………風か……………よし、それなら場所を変えよう。

(風を起こしても、最小限に抑えられそうな場所はあるかな?)

『えくと……………それなら大蟻塚の荒地はどうですか?』

(大蟻塚の荒地!?)

その場所は、その名の通り蟻塚の群巢があったり、水源洞窟や湿地帯、森林があつたりと入り組んだ地形のようでそこに移動することに。

で、シオンさんの案内で中央付近と思われるキャンプ地の近くに降り立ち、エリア6とされている場所へと移動。その丘にはクルルヤックと言うモンスターが寢床にしているのだとか。竜巻起こしたら……………大丈夫かな? まあ、やってみよう。

『まずは最弱出力がどれくらいなのか、一度見てみないと……………』

なるほど、一番弱くねえ。私は翼をちよつとだけ動かして竜巻を作り出しました。でもね……………それでも大きいのか砂や他の物を巻き上げ、吹き飛ばしながら50m程進んで消えました。ゴメンね、暴れている訳じゃないからね……………と言っても竜巻だし……………あ……………なんか落下してきた……………あれがクルルヤックかな!? スマンっ!!

(結構抑えたつもりなんだがなあ……………あれ以上に抑えるとなると……………)

『うーん、何かしら指標というか……………“これくらい”と言う感覚を掴んで貰えたら、かなり楽になると思うんですが……………』

“これくらい”かあ。その度合いだよなあ……。そこがネットク……。私の場合は風を操る……。という事はエネルギーを少なからず操っている事になる。その強弱のコツさえ掴めれば……。とシオンさんの話。凄く熱心に教えてくれるので、嬉しい程にありがたいんですけどおっさんて意外と理解するまで時間が掛かったりするもので……。

『仕方ありません……。私がマサトさんに対して直接エネルギーを渡すので、その強さを感じてください。あ、頭を少し下げてくださいね。』

あ、はい。え、エネルギーを直接!?

(え?……なっ?……へあっ!?)

な、な、なんと!!私の顎の下にシオンさんが額をつけてきました。更に前脚を私の胴体に当ててきます!

あ……。何か流れて来る物が……。エネルギーか、こんなに小さな感じだったんですか。なるほど、こりや分からん。でも、何でしょう!?何か色っぽさを感じるのは私だけでしょうか……。物凄く照れる感じが半端ないんですけど。いや……。ミラルダと以来でしようかねこんな感じは……。しかも、方法が触れあつてだったので身体がガチガチです……。しばらく、シオンさんを見つめたままピクリとも動けませんでした……。身体の熱が上がって行くのが分かります。でも、火は吹けませんよ火竜じゃないので……。

彼女の方は首を傾けてました。どうやら、エネルギーの調整を間違えたかと思ったようで。純ですね……。私の思いがバレない様にしないで……。ね♪♪

『ど……。どうかな!?こんな感じで良いのかな!?変じゃないかい?』

『おお、ちゃんと聞こえますよ……。後は皆さんと会話も出来れば成功ですね。』

やった!通じた!この感覚だったんだ、これが分かるのに苦労するとは……。シオンさんありがとう。そうすると、後はミラルダ達と会話が出来るかどうかな。

私達は勇んで2頭でセリエナへと戻っている時、陸珊瑚の台地と言われる場所に2つの殺気を感じました。

全身が赤い体躯と黒い体躯の2体……同種の様ですが体毛は無く、犬に似た体型で脚それぞれの爪が10本ずつある……。上下に2本ずつ大きめの牙が猛獣さを醸し出している……。私には分からないモンスター……。

シオンさんが後で文献でオドガロンという牙竜種と載っていたと教えてくれました。縄張り争いか、餌の取り合いか2頭が争っているのを横目に私達はセリエナへと飛翔していました。

数日が過ぎた頃、ミラルダ達の武器の手入れが終わったと戻ってきました。私はシオンさんについて行き、トレーニングエリアという場所まで待ち合わせていました。

「マサト、シオンちゃん……お待たせ。」

おお、何か久しぶりな感が……。しかも、小飛竜の扱い慣れちゃってるし。おお、そうかここなら武器のテストにはもってこいなのか。ここまで考えている新大陸の拠点って凄い……。

「マイトさん達の技術は凄いよ！あたしのアックスが新品みたいになってる！」

ほうっ、天羅のチャージアックスが確かに綺麗になってるような……。

「えっ……軽い……!?」

はい!?!以前よりも軽々と振り回してますよ!?!どうなってるの!?!

「あ、ホントだ！あたしの太刀も使い勝手が良くなってる！」

「私の弓もです……弦が弾きやすいです、でも威力は落ちている気がします。そういう事でしよう!?!」

「そりゃあお前さん達の癖に合わせた調整の結果だ……俺らは隔離された新大陸の中で、何とか使える物を探し出し大事に使ってる……だから結果的に長く使えるように、最初の内から使い手の癖に合わせておくのさ。まあ、癖ってやつはなかなか抜けないもんでな……時には無理が掛かって武器の寿命を縮める事もある。」

お前さん達の武器の使い込み具合から、癖を読み取ったうえで設計をし直したのさ……勿論、使い勝手はそのままにな。ガハハハッ！」

凄いな、それぞれの使い勝手と癖を見抜いて武器を設計しなおして

調整していく……言うほど簡単な事じゃない事は良く分かります。ハンターも命懸けならば、そのハンターを守るための武器や防具も命懸け……そんな裏方さんが居ないとやっていけないこの世界……一致団結という事ですよね。

「「ありがとうございます！」」

「ガハハハッ！良いって事よ！向こうの素材を扱えたのも、いい刺激になったしな。」

ははは、なんだかんだで良かったですよ。でも、職人ですよね新素材に関してまだ知れたそうでウズウズしてます。

『良かったね、3人とも。』

3人とも私の声に驚いて気が付いてない……。周りをきよろきよろするばかりで、なんだか見えていてW。

「あ……もしかして……マサト……なの!？」

「えっ!?!こ、これマサトの声なのか!？」

「こ、これが貴方の声なんです……嬉しいです!」

『やっど……みんなと自由に話せるよ、これからもよろしく。』

祝！自由に会話が出来るようになりました。シオンさんには感謝

……いや深謝……みんなが良くなって行ける事を切に願って

……。

氷れる龍との遭遇……。

お久しぶりでゴザイマス。皇 雅人《すめらぎ まさと》《ことマサト》です。古龍に転生していく月か……。

3人の美人に告白され……元の世界ではあり得なかつたモテ期……今はこの世界にいる方が幸せを感じてしまう今日この頃……。

それで、今私はシオンさんと共に言霊の修行の末、会得してセリエナで合流し会話が通じると大喜びで……。ミラルダ達も武器や防具がリニユールで、凄く良くなったとそっちも大喜び♪

そんなところにアステラで異常事態が……と聞いた私達は一路アステラへと戻ったんです。

戻ったアステラではシオンさんが異変に気付いたようで、

『……何でしょう、何か違和感が……。』

私には良く分かりません。まだ、土地的に慣れていない事もあって何がどう……とまでは把握できないでいます。

「シオンちゃんは、何か違うと思うところがあるの?」

『それが何なのかは分かりません、ですがこう……違和感を感じるんです。』

「ふくん、あたしらはこの森を見慣れてないからね……何が何だかさっぱりだよ。」

確かに天羅の言う通りです、まだまだいろんなものがお初過ぎて馴染めても居ないし、地形を把握できても居ない……不利な事ばかりです。

そこで、シオンさんがハンターさん達に変わった事が無いかと尋ねていました。＼普通は……＼と言う普段からあったり居たりしている物や動物、植物がいつもの生態とは違っているという事でした。

『一体、何が起こっているのでしょうか……。』

「さあな……だが、このままじゃ食材の補給が出来ねえ……この事態が続くんじゃメニューを見直す必要も出て来る。」

料理長のデイランさんがそこまで言うなんて、緊急事態じゃないですか!食問題は結構大変ですよ!最悪、拠点の存亡にも関わる事態

……今は貯めている食材が残っているでしょうが、いつまで持つかは分かりません。まして追加で調達が出来なくなってくると限界が来る、かなり深刻だ……。

で、ふと思っただんですけどさっきからレクスさんの姿が見えない……。顔を合わせた時にはお礼を……と思っただんですけどね、何処に居るんだろ!?

『そういえば、レクスさんは?』

「数日前、例の黒いクシャルダオラが陸珊瑚の台地で目撃されてな……。彼はその調査に向かわせている。」

え、アステラに居ない!?

『え、じゃあこの事は知らないんですか?』

「そうだ、奴の動向も気になったからな。そつちも重要事項と捉えて、レクスに一任した。だから敢えて呼び戻してはいないんだ。」

あ、なるほど。確かに奴の言っていたことも気になるところですね。(今は挨拶代わり……。その内分かる……。) そう言っていたの思い出しました。だけど、あの時奴は強かった……。いくら歴戦のレクスさんといえど無事で居てくれることを祈りますよ……。

『そうですか……。仕方ありませんね、エイデンさんに同行をお願いします。』

え!? エイデンさん!? 誰? はあ、よく聞くとレクスさんと同じ5期団ののハンターさんで新大陸に来るまではなかなかの有名人だったそうで……。

「あ、私、名前を聞いた事がある! 名の知れた強者ハンターさんだつて……。」

おうつ、ミラルダも知ってるんですね。

「あのシオンちゃんが、同行に俺を……指名とは……。こりゃ、モチ期かな?」

「……馬鹿な事を言う暇があるなら、この荷物を運ぶのを手伝いなさいー!」

「おお怖っ。」

『はは……。仲が良いんですね♪』

「どこがっ！」

怖っ！逆に私が突っ込まれました。こちらの女性は編募者のエリスさんですか……。

しかし、エイデンさんはおちやらけていますけど、只者じゃない事は良く分かります。詳しい事は良く分かりませんが、装備が半端ない。強いと感じ取れます。新大陸に来る人ですからね、それだけでも強いでしょうね。

それで、彼らが森の調査に赴くとなつたので手伝わせて欲しいと名乗り出ました。言霊を教えてもらったし、何かの形でお礼したかったこともあるし……。

快く了承してもらつたので、私達も赴く準備……。

『古龍の気配が微かにします、二手に分かれましょう……マサトさんは海岸沿いの方をお願いします、私達は古代樹の周辺から。』

『分かった、気を付けて。』

「ええ、そちらも……危険を感じたら、スリンガーで救難信号を……すぐに向かうわ。」

「美人さん達の頼みなら、何を置いても駆けつ『ドゴツ』ガフツ……！」  
いや、大丈夫かなこの人!? 良い音がしましたけど? 慣れっこだつたり? やっぱり仲が良いんじゃない? ……やめとこ。

それから、それぞれに分かれて調査を開始したんです……。

私達は予定通りに海岸沿いの方にあるキャンプ地に降り立ちました。ミラルダ達も警戒しながら背中から降りて周囲を見渡します。ん!? 何か聞こえる……。

「奥の方で何か聞こえるね。」

「何の音でしょうか?」

木々や葉っぱに反射してくるので聞き取りにくくなっています。これは、確認した方が良さか……。

『とりあえず行ってみようか、ここで模索しても始まらないし。』

「そうね、どのみち調査が前提だし進まなきゃ始まらないわ。」

「だね、行こうか。」

全員で顔を見合わせて頷き、エリアーへと進んで行つたんです



……。さすがにあの状態は想定外でしたが……。

エリア1に来たんですけど、目の前には大変な光景が……。2頭のモンスターが、争ってます。1頭は2足歩行で翼はなく、その代わり尻尾が鋭い刃になっている炎弾ブレスも吐く群青色の体軀をしている……。デインバルド……。

もう1頭は、全体に黒い体軀で、両前足に刃のような翼があり、尻尾の先には棘も。猫に似た顔つきをしていて愛くるしい顔でいて、狂暴さも持っている……。ナルガクルガ……。

その2頭がよりによつて、ここで縄張り争いしてるってどゆこと!?

私達が目に入らないのか、2頭は真剣に争ってます。デインバルドが、自身の口に尻尾をくわえ、牙で尻尾を研ぎ澄まします！ナルガクルガは、間合いを取るべく低い体勢で回り込んでいきます！先に仕掛けたのはデインバルド！勢いをつけて身体全体を捻り、鞭のように尻尾をナルガへ向けて降り下ろしていきます！ナルガはそれを反射的に避けて隙を与えずに尻尾を振り回して、棘をデインバルドに向けて飛ばしてきます！デインバルドも後方へバックジャンプで棘をかわし、にらみ合いになってました。

「まずいところに来ちゃったわね……。」

『確かにね……。』

うわっ危ない！後方へ！私はみんなを後方へと誘導します。でも、私が出がった時後ろ脚が大きい事をこの時だけは嘆きました……。光虫を何匹か潰してしまっただんです！瞬く間に眩しい光に包まれそのエリア全体を覆いつくします！それが、デインバルドとナルガクルガにも及んでいて2体とも更に怒りモードに突入してしまいました。2頭とも暴れ出してしまい、収集が付かなくなってます！

お互いに傷つけあってスタミナを消耗しつつも、尚も攻撃を辞めないのどどちらかが倒れるまで終わらないのか……。？と思っていたら、閃光の光が無くなっていき視界が開けていきます……。

完全に視力が回復した時に2頭が同時に私を見つめていました

……。あ……。まずい……。よね!?

「ちよ……やばっ!!」

天羅が慌てて動くも、既に遅く……。

『てめえのしわざかアアアア!!』

2頭が揃ってこっちに向かって来ます!

「全く!縄張り争いの真つただ中に出るとかマジであり得ないわっ!どんな確率よ!」

『いやあ、照れるなあ♪』

「「褒めてないしっ!!」」

キャンプ地まで大慌てで引き返します!ミラルダ達を守る為に後ろからついていく形で。

ぎりぎりセーフ!でキャンプ地内に……。

(ゴリアっ!出てこいやあ!)

(捻り倒してやるああ!)

わ……外で、ひっきりなしに吠えまくってますね。さすがに詰りめ寄せられた感じですが、このままじゃ何も出来ずに終わってしまう。

私達は身動きがとれなくなっていました。

「困ったわね、これじゃ調査どころじゃないわ。」

『ごめん……。』

「あ、いや、マサトを責めてる訳じゃないわ。エリア1で縄張り争いしてる方もどうかと思うし。」

「でも、これじゃここから出られませんね。」

確かにそうなんです……。

ん!?そう言えば叫びの咆哮が無くなってる!?なんでだろ?

……。

(チヨツ……ト……イイ……カ……ナ……。)

その怒りを私にぶつけるべく叫んでいた、デインバルドとナルガクルガの背後から声を掛けられ、ビクツ!!つとしてゆつくり2頭は振り向きまます。すると目の前に少しずつ姿を現す物が……。

(おお、オオナズチ……さん!?)

(あ、あんたか。どうしてここに!?)

(チヨツ……ト……ネ……カ……レラ……ヲ……ユ……ルシ……テ

……ヤツ……テ……クレ……ナ……イカ……)

2頭とも顔を見合わせて首を傾げました。

(あんたの知り合いか?)

(ソウ……シ……ンユ……ウ……ダヨ……。)

(え、親友!?)

何がどうだと言うのか、2頭が青ざめています。あ、顔には出ないか。

(そ、それ早く言ってくれよ!なあ!)

(お、おう。そうですよ、それを知ってればここまでは……。)

(ジャ……ア……イイ……カ……イ……!?)

オオナズチが2頭を交互に見渡しました。2頭も動揺したように小刻みに頷いて、それぞれ反対方向に去って行きました。

(ク……スツ……イ……ツモ……タ……ノ……シマ……セ……テク……レル……ネ……キ……ミタ……チ……ハ……。)

そのオオナズチもまたゆっくり姿を消して去って行きました。まさかナズちゃんも助けてくれていたとは露知らず……。これ幸いと、調査を再開しようとしたとき、拠点に帰還せよの信号弾が上がり戻るようになりました。

スイマセン……何も役に立ててない……。ガクツ……。でもまづは戻らないと。驚愕な事が起きていましたから……。

戻るとシオンさん達も戻っていました。そちらはしつかりと痕跡等見付けて来たようで、ですがセリエナでとんでもないものが、見付かったそうで直ぐにシオンさん達とセリエナへと戻りました。

そこで目にしたものとは、ガチガチに全身が凍っているアンジャナフの死体……。って名前は教えて貰いましたが。

「ああ、お前達か……見てくれ……あのアンジャナフが完全に凍結しちまつてる……。しかも、皮膚片や細胞組織の状態から、凍結した直後までは生きていたらしい。」

『そんな……!?!』

『嘘でしょ?!』

私にしても信じられない現象です!この巨軀を芯まで瞬時に凍

結するなんて……。しかも、この土地でも十分にアンジヤナフは活動していたようですし、生きたまま凍結するなんてことは通常ではあり得ないとの事でした。

「……もしかして、これが今回の現象の大元……!?」

ミラルダも何か気付いたようです……アステラや周りのフィールドの異常現象、それにシオンさん達が掴んできた痕跡……。

「成る程……確かにこれが、仮に生物の仕業だとすれば、移動しているのは納得だが……。」

『そんな生物が、存在しているのでしょうか……?』

「兎に角だ……元凶が古龍なら、搜索方針を一部変えなくちゃならぬい……エイデンはシオンを連れて、古龍の目撃情報が多い龍結晶の地を調査してくれ……。ミラルダさん……貴女達が部外者であるのは承知の上だが、今一度協力をお願いしたい。」

「良いですよ、ここまで付き合った訳だし、最後まで見届けたいわ。」  
一緒に同行する事になった私達は龍結晶の地へ向かうために準備を進めるのでした……。同じ頃に別の場所で移動している物が……。……。

その龍結晶の地に1頭の生物が舞い降りていました……。全身が白い体躯で氷を纏い、4本の四肢があり氷の結晶のような翼を持ち、頭部から後ろにかけて棘が生えている私よりも一回り大きいサイズ……。

その古龍の降り立った周りは霜柱や氷柱が出来、大気温度もどんどん下がっていました……。

『……彼の龍は、一体何を画策しているのでしょうか……もし、わたくしの妨げになるのでしたら……覚悟して頂きますわ……!』

何やら決意と気迫が籠ってますね。彼の龍とはいったい……。

それで私達はどうとセリエナで、ある人物に会ってました……。1期団のフィールドマスター“カルラ”さんです。

「アンタが噂のクシャルダオラ……マサトって言うんだっけ？ アタシはカルラ、調査団の1期メンバーでフィールドマスターをやってるわ。」

『え、あ……どうもです、クシャルダオラしてますマサトです。』

驚きましたよ、ずっと調査に出ているのでなかなかお会いする事が出来ないとか……。

「アンタ達は確か、この地に居るっていう古龍に会いに来たって言ってたわね?」

『ええ、確か……イヴェルカーナって……。』

え、凄く真顔になって私の前に来ましたよ。何か私気に障ること言っただけかな!?

「そいつは口伝にのみ残る伝説の古龍よ、その名はどこで知ったの?」  
『え、いや、それは、あの……和の国に居る神龍で……ナルハタタヒメとイブシマキヒコという古龍ですけど……。』

「……知恵ある古龍達はお互いを認識し合い、秩序の輪を描く……あの人の言っていた通りね……!」

え、いや、あの……何かつぶやきながら1人考え込んでますよ。あの人が……!?

「アタシも同行するわ……アンタ達だけじゃ、イヴェルカーナを探すのは骨が折れるわよ?」

『ええっ!?本気ですか!?!』

驚きです!カルラさんが一緒に行ってくれるというんです。居場所に宛があるんでしょうか?じゃないと一緒に行ってくれるとまでは言わないでしょうね。

『カルラさんも来るんですか?』

シオンさんも驚きますよね。急に一緒に行くって言い出すし、引き止めるも何も背中に調査に向かうための荷物を背負ってしまってるし……行く気が満々です。

『……分かりました、カルラさんはクリスと私の背中に……マサトさん?』

『あ……アハハハ……怖くてあの間に入れな……』

ミラルダ達はマジ顔でジャンケンをしました。3人共、乗せて行きますよ。今それをここでする!?!え、死活問題!?!そこまで拘っちゃうの!?!……。

と、何とか3人を無事に乗せて龍結晶のあるキャンプエリアに降り立ちました。でもね、シオンさんもそうでしたが、私も感じていました。

『シオン……あの先だ、かなり強い気配がする。』

『はい、私もしつかりと感じています……間違いなく古龍ですね。』

それは地下へ降りる洞窟の入り口から、威圧感が半端なく伝わって来ます！ミラルダ達は私の様子に気付き、アイテムを確認しました。

そして、全員で地下へと降りて行きます。エリア8に……。

「これは……。」

「前に来た時より、随分と涼しいわね……。」

「おばさま、ここにも例の痕跡が！」

その痕跡は完全に凍った植物と、それを踏みつけて残った足跡でした……。

「……この痕跡、どこかで……。」

カルラさんとクリスさんエリスさんは、考察に。ミラルダ達とエイデンさんは周囲の警戒、私達も周囲に気を向けます。

そこに突然、ヒヤリとした風が吹き込んで来ました。いや、かなり冷たいか……。

『……っ!? 皆さん警戒を、来ます!!』

シオンさんが叫んだ方に振り向きまます！次のエリアに続く通路側から真っ白な物が直線状に通過し、壁面を一瞬にして巨大な氷の塊を造ってました……。

「……構えろ！奴が突っ込んで来たぞ！」

咆哮と共に飛翔しながら私に向かって来ます！私はホバリングで上昇しながら竜巻で応戦します！しかし、あまり効いてはいないようです。

『随分なご挨拶だね、短気なのは損だよ♪』

『マサトさん、油断しないで！あの白いのは……!』

なっ……竜巻の中から、あの白いものを放った!?シオンさんの足

元に氷の塊が!?

なんて奴だ! 私のダイヤモンド生成より早いのか!?

『あのブレスは絶対に避けて! 恐らく当たったら即死は免れない……!』

それはまずいな、私がダイヤモンドの壁を作ったにしても、瞬間凍結で簡単に破壊されてしまうでしょう。こうなれば、全員で凍らされる前に倒すしか……。

「俺が援護する、美人さん達は無理しない様に……深追いせずに一撃離脱で構わないから!」

「了解!」

「初めて見る相手だけど……、久々に腕がなるわ!」

「私も二方向から攻め立てます!!」

アミラの矢の攻撃を始めとして、一斉に動き出します! クリスさんとエリスさん、カルラさんの3人はフィールドの入り口まで下がります! 私も風球のブレスを放って、奴のブレスの軌道をずらしたりと、援護しながらダメージを与える方法を模索して戦っていました。シオンさんも援護に加わろうとした時です!

「待ちなさいアンタ達! ソイツこそが口伝に残る伝説の古龍……! アンタ達の探してた “イヴェルカーナ” よ!!」

はいっ!?! カルラさんっ! い、今なんと!?! 物凄く意味深発言しませんでした!?!?

私とミラルダ達と、啞然としたのは言うまでもなく……。

## 氷れる龍との遭遇……②

目の前に探し人……じゃなかった、探し龍を見つけた、皇 雅人へすめらぎ まさと《ことマサトです。古龍に転生して新大陸にお邪魔中で……。

3人の美女に好かれ……一緒に旅をする毎日……転生して古龍ですが……幸せな日々……。

またもや大変な事態……龍結晶の地で私達の目の前にイヴェルカーナが現れたんです！周りの大気が極度に温度低下を招いています。霜柱や氷塊が出来て……。

『アナタ達……何故、人間などに手を貸しているのですか!? それにアナタは、彼の龍の同族……却って好都合ですわ！アナタ達の企み、全てこの場で吐き出して頂きましょう!!』

うわっ！尻尾が長く鋭い氷の刃のようになっていて連続で槍のように突き出してきました！何とか躲すのが一杯ですが、このままでは怪我は免れなくなる……まずは両前足をダイヤモンドコートで、更にダイヤモンドの両刃のクナイを生成しながら、槍のような尻尾の攻撃を躲します！

『「マサト(さん)!!!」』

『来ちゃダメだ!! 何か誤解しているようだ！誤解を解かないと話を聞いてもらえない……! (え、シオン!?)』

ミラルダ達は武器を構えたままでこちらを見据えています……が、シオンさんがいつの間にかイヴェルカーナの後ろに回り込んでいました！私に集中している所為かシオンさんが後ろに居る事を気付いていない……。

シオンさんがホバリングして両前足でイヴェルカーナを羽交い絞め……!?

『やめんしやいッ!!』

『ッ!? しまっ……きやうんッ!?』

うおっ！空中から投げた……。バランスを崩してひっくり返



るように落下していきます！何でも初挑戦だったからうまくいくかどうかは分からなかったと？度胸あるう！助かりましたよ。あの攻撃をどうやって躲しながら、抑えられるかと考えてましたから。

で、背中から地面に叩きつけられたイヴェルカーナ。

『……………ツ……………やつてくれましたわね……………え……………つ、あれ……………ツ!?!』

必死に体勢を立て直そうともがいてますが……………いや、珍しい体勢ですね。これがホントの“ひっくり返し”というやつでしょう。翼も四肢も胴体も逆さまで動けなくなってます、横にも縦にも上にも動けません……………。

何が起こった!?!と全員絶句……………。

『……………何が、どうなって……………くつ……………た、体勢が……………!?!』

最強種の古龍がじたばたするのって……………何か笑える……………あ、だめだ……………。

『……………ぶふおつ……………!?!』

噴き出しちゃった……………なんか可愛げがあつて可哀そうなんだけど面白い……………。あ、私に続いてみんなが一斉に笑い出しましたよ。

「ぶはっ……………ちよ……………待って……………苦し……………何で……………そんな綺麗に逆さま……………アハハハッ!」

エイデンさんが受けてる……………。

「シオンちゃん……………さすがに投げっぱなしは……………フフフツ!!」

ミラルダ、そこ!?

「あははは!!古龍が逆さま……………あはははっ!」

天羅も珍しいよね、こんな姿はまずお目にかかれない……………。

「くくつ……………すみません……………さすがに耐えきれません……………くふふふ……………!」

アミラまで……………確かに凄い光景ではありますけどね……………。

『……………ぶはあつ……………!?!』

シオンさんも耐え切れずに笑い出しました。

「まさか……………古龍のこんな姿を見るなんて……………ぶつ。」

「……………やめなさいよクリス、笑うなんて……………くふつ。」

「……はあ……あんだ達、もう少し緊張感を持ちな……。」

カルラさんが呆れながら……全員イヴェルカーナの周りに集まったんです。イヴェルカーナは私達を見回して観念したのか、落ち着きを取り戻し会話が出来る状態に……。

『……あの……申し訳ありません、急に襲ったのは私の不手際です……ちゃんと謝りますわ……ですから、この体勢を……何とか……して頂けませんこと?』

ああ、そうですね。このままじゃあまともに話も出来なさそうですし、まずは起こしましょうか。シオンさんと起こす方法を模索します。

『……風で身体を浮かせられるかな!』

『うくん、この冷気、直接触れない方が良さそう……。』

『れ、冷気が邪魔なら引つ込めますわ! だから早く……ううつ。』

あ、あらら、ウルルン目線になっちゃった。さすがに何とかしてあげないとね。早速、地面と背中の中に風を潜らせ、浮かせるように体重を軽減させていきます……それに合わせてイヴェルカーナが翼を一旦畳みます。そこでシオンさんが横からゆっくりとイヴェルカーナを横向きに押し上げてあげると、自身でやっとながったのでした……。めでたし、めでたし……って、終わりませんって!!

『……ありがとうございますわ……アナタ達、普通にマトモな方達でしたのね。』

あの……あなたにとって周りのモンスターってマトモじゃなかったんでしょっか!?

『私は“マリナ”……人間たちからは“氷龍”イヴェルカーナと呼ばれていますわ。』

『シオンです……こちらこそスママセン、止めるのに深く考えずあんなやり方で……。』

『クシャルダオラのマサトです……誤解は解けたかな?』

『それはもう……よく見れば、あの黒い奴とは雰囲気から違いますものね。』

黒い奴!?なんか意味深発言なんですが?まさか……。

『それで……アナタ達は何をしにこのような場所まで?』

まあ、当然疑問になりますよね。このメンバーで来るぐらいですから。

『貴女に逢うためでもありません。』

『な……私に!?!』

「そうです、和の国に居る神龍から預かったものが有ります。それを貴女に渡して欲しいと……。」

『アナタは?』

「はい、ミラルダと言います。ここに居るマサトと、天羅にアミラと一緒に旅をしています。安息の地を求めて……。」

『そうでしたか……。それでその神龍とは?』

『それは……。』

そうなった経緯と共に、神龍2頭の名前を告げました。すると遠くを見るように目を細めていました……。ようやく、辻褄が合ったようです。

『イブシマキヒコに、ナルハタタヒメ……私達を知ると言うことは……恐らく「シロウ」と「キヨヒメ」の事ですわね?……カムラの里からなら、さぞ長旅だった事でしょう?』

ん!?でも待てよ、確かあの時男性の物言いじゃなかったかな?

『……あれ?でも、あの2人は「彼」って……。』

『……ああ、2人と良く会っていたのは、私の弟「シモン」ですわ。あの子は数年前、フラヒヤ山脈の方へと旅に出て……今は音信不通ですの。あの子から、旅立つ前に2人の事を聞き……私が代わりに待つ役を……。』

『そうだったんですか、どおりで……。』

と言うことは、私が転生してきた場所……鉢合わせしてもおかしくない状況だった訳だ……。ま、まだその時はイヴェルカーナの存在すら知りませんでした……。』

『……もしかしたら、私達とすれ違ってたかも知れないね。』

「そうね……あなたと出逢った時に現れたら、どうなってたかしら  
♪」

『いやあ、少なくともミラルダを庇ってたと思うよ。見過ごせなかったと思うし。』

「ありがとう♪」

うわっ！ 久々にその笑顔攻撃！ 照れるじゃないですか！ ダメ……勝てない……。

ミラルダが宝玉をマリナさんに渡しました。想いが深いんでしょうね、目を閉じて染々と……。

しかし、マリナさんが急に目を見開き！ 私達の方に振り向いたんです！

『すぐにここを去りなさい！ あの「醜い肉塊」が来ますわ!!』

そう叫んで、冷却ブレスを放って私達が入ってきたエリアの入り口を氷壁を造り出して塞いでました！

でも、その分厚い氷壁をぶち壊して侵入して来たのは実はアイツでした……！

『うぐおおおあああああツ!!』

『……やはり来ましたわね、黒鋼龍の下僕……!』

そう、アイツとはイビルジョー。しかも“怒り喰らう”状態の……。ん!? でも何でアイツが黒鋼龍の下僕なんて……今マリナさんそう言ってたよね!? 知っているという事は一度鉢合わせしてる!? 確かにあの黒鋼龍に連れ去られたイビルジョーでしょうけど。

『またアナタですの? 何度も言わせないでくださいまし……私はアナ達に加担などしませんわ!』

『……ふんっ! だったらここで消えてもらう……。』

『それも御免被ります! 今度は氷漬けだけでは済ませません……確実に、その命の灯火を消し去ってあげますわ!!』

言うか否か冷却ブレスを放っていきます! しかし、イビルジョーも構えていてジャンピングでそれを躲しアギトを開いてマリナさんへと向かっていきます!

『馬鹿のーっ覚えですわねツ!!』

おおっ！マリナさんもイビルジョーの飛び掛かりを躲し、ジャンピングでイビルジョーの頭上を飛び越えながら氷の刃になっっている尻尾で攻撃していました！戦い慣れしているというか……凄い……。

『グウ……ッ、嘗めるなァッ!!』

反撃を食らったイビルジョーも怒りを更に表し、すぐさま振り向いてアギトにブレスを溜めながらマリナさんの背後を狙ってます！まづいつ、このままではブレスを喰らってしまう！

『……ッ、させません!!』

『マリナ！避けてッ!!』

シオンさんと同時……2方向からブレスを放ってました！シオンさんのブレスがイビルジョーの足元に直撃し、その反動で爆発が起き、私のブレスは圧縮と高速回転を掛けた空気弾でイビルジョーの身体を抉っていきます！

『ぐっ……がああああああ!!』

「隙だらけ、だっ!!」

「邪魔は、させないっ!!」

ミラルダっ?!天羅っ?!足元に入り込んで“居合抜刀気刃斬り”“超高出力属性解放斬り”を放ってました!

くうくうくうっ!シビレルくくくっ!!これだから彼女達は離せません!見事です!こんな時だけ……愛してるくく!!……し、失礼。

『グウウウ……お、おのれえ……!!』

さすがにこつちを睨んでます。私達が先に相対した者と分かったのでしょうかね、ま、そこまで記憶力があるかは別として……。しかし、そのせいでまだプロ級が居る事を忘れているイビルジョー。アギトを大きく開けて向かって来ようとした時、アギトの中に何かを放り込まれて口を閉じてしまう当人……。

『がっ……がはっ!!』

体内での爆発音!?投げ込まれた方を見るとエイデンさんがガッツポーズしてます。爆発系の……なんか入れたっぽい……。はは……さすがに体内から攻撃されればどのモンスターでも大概ダメージは

免れないでしょう。あれは凄く痛そう……。対決する事は無いでしょうが、私の時には勘弁してくださいねお願いします。

更に私の横を一本の矢がイビルジョーに向かって飛んでいました！アミラの放った矢が綺麗な放物線を描き、イビルジョーの左目に吸い込まれるように突き刺さり、イビルジョーの視力を奪います！

『ぬがツ!? め、目がアア!!』

『死にたくなければ避けなさい!!』

なっ！マリナさん!? うわっ冷却ブレスの最大威力か!?

『……ッ!? みんな、伏せてっ!!』

私の掛け声に咄嗟にブレスを躲していきます！これに触れたら一大事だ！離れなければ……。無数に氷柱が出来上がり、更にマリナさんは上空からブレスを放出していきます！たちまち、大地ごと氷と化していく……。絶対零度（アブソリュート・ゼロ）”と後で聞きましたが……。そんな恐ろしい技を持っているとは……。て、敵じゃなくて良かった……。。

『お、お、おのれ！おのれえええっ!!』

憎しみと苦しみが混ざった咆哮を上げて氷像と化していきます。全く身動きが取れるはずもなく、彫刻にされていくイビルジョー。でも、凄いスタミナです。辛うじてですが生き残っています!?! 虫の息ではありますが……。

『……まったく、あの黒鋼龍は……。とんだ傍迷惑ですわね。』

鼻息交じりに侮蔑を漏らすマリナさん、チートな強さを持つ彼女は凄いと思いますよ。ん!?! シオンさん!?!

『……マリナ、お姉さま……。』

『……!?!』

はい!?! お、お姉さまって……。ナニ!?!

『あ……。何でもないですっ！ 何でも……。』

『あ、あ、そう?……。そ、そうなんだ……。』

私もどう対応したら良いのか分からずに、あいまいな返事をしてきました。深く追求はしない方が良いよな絶対……。

「……もう流石に暴れはしないだろうな!?!」

さすがにね。内臓もかなりのダメージだろうし、身体は完全に氷漬け……ダメージを喰らった後での氷像ですからね、そう簡単には無理でしょう。

エイデンさんが用心深く小石をちよつと離れたところからぶつけてました。反応が無かったので安心したようですが……。

仮に動いたとしても、イビルジョーには戦う体力・スタミナは残っていない……それよりも黒鋼龍がイビルジョーを部下にしていたのは驚きです、確かにあの時イビルジョーを連れ去りました。しかも、さっきの話から行くとマリナさんをも仲間にと、味方を増やそうとしている感があります……一体何が目的なのか……今の私達には分からずじまいでした……。

忌まわしき古（いにしえ）の記憶……。

いろんな事が起こり過ぎっ!! おじさん追いつけないっ! 失礼しました、皇 雅人《すめらぎ まさと》ことマサトです。

今、目の前に氷の像と化している恐暴竜君が虫の息で、動くことすら出来ずに居ます。周りの地形もろとも氷結するなんて、見事! としか言えません。敵としてでなかったのが凄く有り難かった……。

あの絶対零度には勝てる気がしません。ミラボレアスのファイヤーブレスもどうかかな? と思う程。

マリナさんの私的な用事で、このエリアに来たとの事。でなきやそうそう来ないですよ、ここにはね……。

来たことを嗅ぎ付けた黒鋼龍がしつこくイビル君を寄越してたそうで、大変迷惑!! だったそうです。

そりやね、強引に勧誘すれば誰だって一步下がりますわな。特に女性ならば……って古龍ですけど、雌ならば当然かな? 雄でも、しつこ過ぎるのはちよつと……。

て、事でまずはマリナさん達に付いて行き、エリア9からエリア3へと移動する事に。

『それにしても、あの黒鋼龍は……まだ私の事を諦めていませんのね……。さすがにもう我慢なりませんわ……。』

え、マリナさん何処に!? まさか、アイツの所に行くつもりか……。

『ちよつと待って! マリナさん、あの黒鋼龍の居場所を知ってるのかい!?!』

私はマリナさんを慌てて引き止めます、そして居場所を確認したいと思いましたが……。私が……。私が行かなければ……。アイツを止めない……。

『知っているも何も、彼が来いと言ったのですわ……。俺の考えに賛同するならば来い、陸珊瑚の台地で待つ……。』とね……。

なんだって!? 一体仲間を募って何をする気だ……。まさか、和の国に居た“怨虎竜マガイマガド”と同じような考えじゃ……。だとしたら止めないと……。



『……マリナさん、彼は僕が止める……止めなきやいけない……。』  
「マ、マサト……。」

ミラルダ達も心配してくれてます、ありがとう♪でも、なんとしても私が止めないといけない気がするんだ。なんとしても……。

『アナタは……奴の目的を知っていますの？ 奴の狙いは恐らくアナタの方ですわ……それを分かっている、行くと言うの？』

その通りですよ、奴の狙いは私で間違いないでしょう。はつきり言って、勝てる自信なんてありません。どれだけ痛い思いをするのかと思うと、精神的ダメージが大きいことも否定しません。怖いと思う事は今までもいくらでもありましたから……。でも、それは私一人での話……今は私を慕ってくれている、3人の女性が居る……贅沢で申し訳ないが誰も離したくない！まして、和の国にいるあの女の子達や国の人達と会えなくなるなど、もつての他だ！人々も、モンスタ―も守りたい!!

私は自然と、3人の女性をそれぞれ見つめていました……。

『彼のやろうとしている事は間違っている……人と龍は、争う必要なんて無いんだ。少なくとも私は信じてるよ……』  
「人と龍は共に歩める」とね……。』

わ！な、なんだ、地震か!? きゅ、急に地面が……。

「な、何が……!?!」

「地震!?!」

『いえ、この揺れは……。』

ぜ、全員がその場から動けない!?! 足元がつ!?!

全員がそっくり巨大な黒い穴の中へと吸い込まれていきます! 身体がゆうことを、き……か……な……い……。

……。

そこに白き龍が居ました。上から見下ろす下の様子は非情なまでの惨劇……。

それは、人と言う生き物が自然の摂理を無理矢理ねじ曲げた禁忌の技術……竜を殺し、その骸を用いて竜に似せた龍殺しの兵器……。

それに激怒した龍達が、人に罰を与える為にと戦いを始めた

……。

でも、高度な知識を持つ白龍が故に、滅ぼすことが解決となるのか……他の選択肢は無かったのか……と自問自答を繰り返している……。

その後も、その惨劇の光景を見ました……。

私は竜大戦という過去の嘯があるとは転生前ですが聞いたことはありませんでした。歴史上の設定として……。でも、詳しく見たのは私もこれが初めてです……。

「……人間は……こんな過去を持っていたと言うの？」

『……これは……こんな事が……私は、もう少しで過ちを犯す所でしたのね……。』

「何処の歴史書にも、こんな事なんか記されてないわ……隠された過去……忌むべき過ちと言う事ね、これは……！」

全員が、その光景に息を飲んで見ているしかありませんでした……誰も何も言えず……その恐ろしい光景を見ている事しか出来なかった……。やはり、2度とこんな惨劇を繰り返してはいけない！なんとしても奴を止めないと、全てが滅んでしまう……。

すると、その光景が急に無くなり真っ暗な闇に包まれました……何も見えず……何も聞こえず……すると突然、目の前に姿が縦に半分だけの女性が現れたんです……。

赤い髪のショートヘアで全体に赤と黒基調の防具で、口元はニヤリとしてましたが眼は鋭く殺意と憎悪が籠ってました……。

「やつと……やつと……見付けた……アランの……敵……。」

えっ!? 敵!? 何それ? あ、あの……恨まれる覚えが無いんですが……!?

って、しかもアランで誰でしょう!?

そして、一体君は誰なんだ? 私が敵だなんてどういう事だ! 教えてくれ!

「待っている……必ず……お前を……狩ってやる……必ず……。」

そう言い残し、その女性は暗闇に消えて行きます。

ま、待つてくれ！一体君は誰なんだ！おいっ！待て！待つてくれえっ!!……………。

『ハッツ!』

そこで私は初めて気が付き目が覚めました。周りを見ると、私の顔に寄り添う3人の女性が……。ミラルダ達が心配そうにこちらを見ていました。

良かった……。私は、生きてミラルダ達に逢えたんだ。ホツとして、改めて目を瞑ります。安心したせいかな、涙がポロリ……。

「マサト……泣いてるの？」

『え、う、うん。3人が可愛いから嬉しくてさ……………』

「え!?…………もう!」

「驚かせないでよ、全く…………クスッ。」

「でも、嬉しいです♪♪」

絶対にこの幸せだけは譲れない!こうしてお互いに共存の道を進むことも可能なのだから……。

必ずこの幸せは守ってみせる!!

でもあれは何だったんだろう……。あの女性のハンターは、私を狩りに来ると……。半分しか見えなかったけど姿がリアルすぎるし……。

そして、アランの敵!?……………。一体誰でしょう!?!その人とは会った事がありません。いや、私の転生前に会った事があるとか……。

(いや、その人間には会った事は無い…………。)

わあっ!!突然ビツクリするでしょ!!って久しぶりだね、1つになつてから話してないね?

クシャルダオラ自身です。今は1つになったんで、会話は出来なくなってるものと思ってました。

(久しいな…………と言ってもいつも一緒だな…………。)

ごもつとも。で、どう思う?こうして私が来てからは全くあったことが無いし、人的被害を与えた事は無いと思うけど。

(我はハンターと戦った事は少なからずあるが…………だが、その中にアランと言うハンターが居たかどうかは分かりえぬ事…………。)

う〜ん、本当に私の事なのか……勘違いなのか……はたまた、本当に私を狩りに来るのか……。

(誤解ならばそれを解くしかあるまい、事実を確かめてだが……。)

まあね、話せる相手だと良いんだけど……。

(来れば分かる……。)

だね、それ以上は考えても埒が明かないね。いやあ久々に声が聞けて新鮮だったよ。

(我もな……だが、そいつが来た時は教えてくれ……、ではな。)

あ、ああ、分かった相談する！

………何か気になる事があるのかそう言い残して話は終わりました……。まだ、しばらくはハッキリするまで私の中にしまっておこう、あの夢は私しか見ていないようだし……。

気付くと、“古代竜人”さんやら“溟龍ネロミエールのスレイン”さんやらが来ていたようで私達が目覚めた時には既に居なくなっていました。会ってみたかったけどまたその内会えるでしょ。

シオンさんに何かを伝えたようで、私には分かりませんでしたけど……でも、凄く大事な事にも思えて……。

全員が目覚めて改めて一度アステラへと戻ったんですが、でも待ち構えていたのはそんな事すら忘れるかのような事実が……。

「……レクスが、陸珊瑚の台地で消息を絶った。」

『……ッ……!?!』

彼女が明らかに動揺しています。一緒に戦った仲だからか、そのショックは大きいようで彼女が向きを変えて向かおうとしています！これはマズイ……。

『シオン!?!何処へ……!?!』

『……レクスは……彼は死んでない……きつと生きてます……でないと私がッ!!』

今にも飛び立ちそうです！私は慌ててそれを止めました！

『心配で焦る気持ちも分かる！けどその疲れた身体でアイツに襲われれば間違いなく倒されて無事じゃ済まなくなる！』

『私はどうなっても良い!!彼が……彼が居なきや……うつ!?!』

ホバリングで飛びかけていた所をボウガンの弾が命中し、失速してそのまま地面に気を失うように眠ってしまった。

「……やれやれだぜ、あの大人しいシオンがこうも焦るなんてなあ……。」

エイデンさんのヘヴィボウガン……睡眠弾レベル2との事で、強制的に眠らせた状態です。

『ありがとうございます、助かりました……。』

「ね、ねえ、レクスさんとシオンちゃんの間にかあったの!？」

ミラルダも気になってクリスさんに問いかけてました。

「いえ、私にはさっぱり……2人の仲は普通に良いですし、特別に何かあったという事は……一度も……。」

「そ、そう?？」

クリスさんにも分からないシオンさんの様子……。何故そこまで彼に拘るのか、分からずにいる私達でありました……。

おなじ転生者の彼女……。

クシャルダオラ……ちょっと特殊になりましたが……転生しました、皇 雅人《すめらぎ まさと》ことマサトです。

実に3人も私を慕ってくれる彼女ができ、安心して一緒に暮らせる場所を求めて旅を続けてました。

その道すがら色々と有りまして……ただいま新大陸にお邪魔中です。

始めて遭遇するモンスターや新しく出逢った人達……特にハンターさん達と行動を共にしているゼノ・ジーヴァのシオンさん。

まだ幼いとはいえ、私と同じく人間の言葉を理解している古龍となれば、ハンターさん達が保護したくなるのも分かる気がします……

それに、同じ転生者だと称する黒鋼龍まで私の前に現れ……それぞれこの思いを持って行動している……という訳です。

……黒鋼龍の方は、危険思想の持ち主なんですけどね。

あ、今私達はセリエナに戻って来ております。

なんとココに、私達が休める小屋を特別に用意して頂いたらしく、少しはゆっくり落ち着けるかなと思いましたが……が、そこへ間の悪い事に、あの凄腕ハンターのレクスさんが行方不明と聞かされ、その情報で血相を変えたシオンさんが無理を押し探して探しに行こうとしまして……ですがエイデンさんが機転を利かせて彼女を眠らせ、その場は事なきを得ました。

……今はシオンさんも、用意して頂いたこの小屋で休んでいます。

あの時の、何か思い詰めてる様な感じ……彼に対して思い入れが強すぎるように思えるし……理由が何なのか、私じゃ想像も出来ません。

物凄く気になるけど、無理に起こす訳にはいかないし……下手に起こして、また救出に向かおうとされても大変だし……

ふうっ……まあ、目が覚めたら聞いてみるかな？

それにしても、この子との会話は何か……ナズつちゃんやマリナさんから感じる雰囲気とずいぶん違う気がするんだよね……ま

さか、私と同じとか……？

……おっと、色々考えている内にその子の目が覚めたようです。

『……う……ッ?!』

『……気が付いたかい？ まったく、無茶し過ぎだよ』

特別に作られた暖かいベッドに寝かされていたシオンさん……まだ回復が完全ではないのか、頭だけを少し上げました。

『……あれは、本当なんですわね……レクスは……』

『そうだよ、彼は今行方不明になってる……明日には、捜索隊が組まれるそうだよ。』

やはり、この子は異常なほどレクスさんに固執している……こりや聞いてみるしか無さそうだね。

『は……やく……見つけないと……私は……!』

やっぱりまた探しに行こうとしてる……止めないと!

『ダメだよシオン、君は今だいぶ消耗している……今は身体を休めるんだ!』

『退いて下さい! レクスが居なければ私は……わたしは……!』

『何と言おうと、駄目なものはダメだ! 今の君は無理をし過ぎてる

……ちゃんと体力が戻るまで、今は待つんだ!』

やはり何かあるな……どうもさつきから私と同じと言う気がしてならない。

後で話をしてみるか……違ったとしても私には大差ないことだし、ミラルダ達にはもう話してあるしね♪

ミラルダ達はそれでも私を慕ってくれている……彼女達には感謝しかないな♪

『マサトさん……行かせて……!』

軽く広げただけの私の翼すら押し退けられないまま、泣き崩れる白い幼龍……無理しすぎだよほんとに……気持ちにはよく分かる。

(でも、今は我慢しなさい……君に無茶はさせたくないんだよ)

心境は複雑だけど、そのまま翼で包んであげる事しか私には出来ませんでした……

『……すみません……ご迷惑をお掛けして……』

泣き崩れてからしばらく……気持ち少しは落ち着いたので、シオンさんは元のベッドに戻ってきました。

やはりここは話してみよう……不安な気持ちで一杯だろうけど、今訊いておかないと後がない気がする。

『ごめんよ……ずっと迷ってたけど……君に訊いておきたい事があるんだ。』

『え……っ？』

『シオン……君も、元は人間だったんじゃないかな？』

『……!?』

……ありや、あんまりストレート過ぎたかな？ 一応、周りには誰も居ないけどね……え、いやあ、そんなに切ない目で見つめられても……照れ……いや、失礼。

『いや、前から気になってはいたんだよ……なかなか確証が無かったんで、聞き辛かったんだ……』

自分の頬を爪でポリポリ搔きながら聞いてました……

『え……ちよ……ちよと待ってください!! 君もって……事は、マサトさんも……』

『そう、私もだよ。ミラルダ達には既に話してある。』

私も、元は人間だった事を……ちゃんと納得もしてくれてる』

やっぱり、私が転生している事には気付いてなかったみたいだね……驚きを隠せないでいる。

『ちなみに、私は最初から転生前の記憶があるけれど……シオンはどうなんだい？』

あれま……固まっちゃった……考え込んでる？ 聞かなければ良かったかな……いや、でもそれくらいは確認した方が良く……よね？

『……シオン？』

『……分からないんです……私は転生前はどんな人だったのか。』

過去に何をしていたのか……自分の名前すらも……』

……え、転生前の記憶が無い……って、そんなパターンあるの?!

たまたま私は運が良かったのか悪かったのか……記憶がそっくり残ってはいるけど、彼女には無くて……こうして、古龍に転生した事



だけが事実……

『……そうなんだ……』

『ただ少し……マサトさん達が来る前に、龍結晶の地で実験した「龍脈干渉」で……断片的な事は思い出したんです……』

『断片的……?』

『はい、それはこんな感じで……』

その内容を聞いていると……私のいた同じ世界の場面であったり、また別の場所であったり……夢か? いや、それにしてはリアルすぎる。

私がすぐに「あの場所だ」と思える所も多かった……かと思うと急に分からない光景の話も混ざって……普通ならほとんどが同じ場所での事柄が浮かぶはずなのに……そうじゃないのは一体……?

ひと通り聞かせては貰ったけど、まだよく分からないな……ただ、転生した事だけは確かだ。

『……そうかあ……でも、やっぱり君は転生古龍だと思うよ。』

私と同じか、近い世界らしき記憶があるからね……一部だけが全く違うのは気になるけど』

私がそう答えると、彼女はまたゆっくりと語り出しました……

『多分、別の風景の記憶は……違う世界で私が生まれてまだ幼い頃……今とそう変わらない感じの扱いを受けていた頃の記憶だと思います。』

見える光景は、今の世界に近いものですし……

……でも私が一番気になったのは、この記憶の中に……見た目は今と少し違うけど……レクスとクリスが出て来るんです。

それも……私を1番大切にしている我が子のように』

な、ナンダツテー!?! レクスさんにクリスさん!?! 2人がシオンさんを我が子のように……ってマジか?!

『……え、どういう事? レクスさん達とはアステラに来てから出会ったって聞いたけど……』

『その筈です……少なくとも、私がレクス達と出会ったのは、デュークさんの手でアステラへ連れて来られてからですし……』

もし本当だとしたら、それが全部、転生前の記憶だとしたら……シンオンスさんは二度転生しているという事だ……

一度は違う世界……多分、私と同じ世界だろう……そもそも一度はこの世界の過去へ……そんな転生なんて初めて聞いた、完全に想定外だ。

『……結局、私は何処から来たんでしょ……』

この話から思い至ったある結論に確固たる証拠は無い……けど、もしかしたら彼女には思い当たる節があるかもしれないと考え、私はその推論を話して聞かせる事にした。

『これは……あくまで仮説だけどね……』

\* \* \* \* \*

『……なるほど……つまり、私はマサトさんの居た世界の転生者で……その前か後に、この世界で1度生まれている……という事ですか？』

『うん……確証は何も無いけど、そうとしか思えないんだ。』

多分、時代的には今よりも未来……そこで一度、ヒトとして生を受けていたんじゃないかな……？

それが何故、過去に戻って……しかも古龍に転生する事になったのかは分からないけど……』

『……………』

彼女は黙ってしまいました……この話は、あくまで私の仮説でしかありません。

本当に正しいかどうかなんて定かじゃない……シオンさんの本当の名前も分からないしね。

ただ、レクスさんとクリスさんの存在や、彼女を我が子と扱う様子……それだけでも、何か深いつながりがあるかもしれないと思える。

『……だからなんだね、彼の安否が気になつてあそこまで……』

『……今思えば、生まれた直後の私に記憶が無かったのは……もしかしたら悲しい出来事があったのかもしれない。』

……それこそ、記憶を封じたい程の事が……』

いや、今その事を思い込んだらダメだな。記憶がもし蘇った時、正気では居られなくなる可能性がある……。

『今はそれを考えちゃいけない、過去の記憶に引き込まれダメだよ？ たとえ思い出したとしても、その事を引きずると同じ事が必ず起きる……あるいはもつと悪い状態で……』

そうなつてはいけないし、しちやいけないんだ。』

しばらく考え込んでいたようですがどうやら納得してくれたようで、一安心かな。

『とにかく今は身体を休めよう……ただでさえ消耗してるんだから、ちゃんと休んで、体力を回復させるんだ。』

搜索は明日出る人達に同行するようにしよう……私も行くし、ミラルダ達だつて手伝つてくれるさ』

『はい……ごめんなさい……ありがとう……ごさいます……す……』

やつぱり、まだ回復してないみたい……そのまま彼女は眠り始めました。

あの時もかなり疲れていた筈なのに、あんな無茶をして……考えてみれば可哀想な境遇か……

だけど、これから良くして行けば良い……今の私の様に、前よりも幸せだと思える様に……

その翌日……私はミラルダ達に、秘密の所は伏せて搜索隊に同行する事を話すと……

「私達も手伝うわよ？ あの子があんなに必死になるの……何か、只

事じゃ無いって感じだったものね」

……と快諾どころか、自分達も行くと言ってくれましたよ……くう  
くつ、本当デキた良い彼女たちですわ……オジサン泣けてきます！  
そして約束通り、シオンさんも捜索隊に同行して来ました。

……彼女の転生話は、まだ秘密の方が良いと思う……  
どうせ確証も無いし、荒唐無稽過ぎて誰も信じられないですから。

私達を含めた捜索隊は一路、最後の目撃情報があった陸珊瑚の台地  
に向かいました……ですが、そこに残されていた痕跡から「レクスさ  
んは『瘴気の谷』に転落したのでは？」という事態に発展……

真下にあるその谷には直接降りれないとの事で、別ルートから向か  
う事になりました。

……で、『瘴気の谷』ってどんな所なの?! 初めてなんでお手柔ら  
かに……ね♪